

カンバーランド宣教研究

紀要（二号）



2024

カンバーランド長老教会

日本中会宣教研究所

カンバーランド宣教研究

二号 目次

卷頭言 鈴木 淳 1

【歴史的遺産】

エー・デー・ホール師没100年、何を学び継承するか、
—カンバーランドスピリットとハンセン病療養所— 阿部伊作 4

日本に派遣された宣教師（フォレスター、ディル、スタッツ各師）
の意義 関 伸子 39

【説教】

「そのうちのひとりは、感謝した」 吉崎忠雄 77

【研究発表】

論文「祝福を告げる者—伝道師の祝祷について—」 濱崎 孝 84

講演「長老のつとめ」 潮田健治 111

講演「平和を実現するために、見る、聞く、考える」 古畑和彦 138

編集後記 152

※ 本紀要の聖書の引用は、別段のことわりがある場合を除き、日本聖書
協会『新共同訳聖書』を使用しています。

卷頭言

日本中会宣教研究所所員

すずき あつし
鈴木 淳

「そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいければよりも優れています。」(マルコ 12:33)

紀要の二号発刊にあたり改めて、篠原基章(東京基督教大学教授)著 「『宣教』とは何か、教会の使命に関する一考察」(『キリストと世界』25号)¹ を読み返してみました。この論文は私達の教会で、常に議論となることに一つの重要な方向性を与えていました。インターネットで公開されている論文なので一度目を通していただくと「宣教」という理解に大きな示唆が与えられることがあります。

さて少しだけ内容を私の視点で紹介しますと「宣教は教会の使命を包括的に表現する概念として位置づけることができる。教会に委託された包括的な宣教の使命はキリストの十字架の死と復活によってもたらされた神の国の到来を証しすることである。教会の使命は救済論を中心軸に据えつつ、創造論に根ざした射程をもつ。この2つの側面を統合的に捉えていくことが重要である。」と末尾で記されています。つまり、魂の救いだけが教会の主目的ではなく、創造された世界全体の救済が教会の包括的使命であると言うのです。

教会の使命が神の国の建設に参与することでありながら、第一義的に罪の赦しがキリストの贖いの最終目標と限定するならば「神は人類を救うために人を創造された」というおかしな論説がなり立ってしまうと言うのです。こ

1

<https://www.tci.ac.jp/info/overview/file/4f91393031b73d6b63fb238e70c95dc8.pdf>

のような混乱は、西洋キリスト教国の世俗化が急速に進み教会の使命が分断化される中で、その再統合を目指してミッシオ・ディ 「神の宣教」というパラダイム転換² の神学的な試みを生み出しました。

この転換の変遷は「伝道」と「社会的責任」を教会の使命の両輪として理解することを助けましたが、教会の使命をこの二つの分離した要素から成るものと捉えた瞬間に、その二つが原則的にそれぞれ独立し、社会的側面なしの伝道、伝道的側面なしのキリスト者の社会参与となると警告しています。つまり、一つの要素を本質的に第一とし、他方の要素は任意の第二とすることは誤りであり、それは互いに優位性を主張しない不可分なミッションということなのです。

このように「宣教」という言葉は、教派間の対立の根源になった歴史があると共に、使命の統合という重要なヒントを提示しています。それ故に私達は、単なる主觀による論争に終始するのではなく、神が何を望まれているのかということを歴史全体から神学的視座で慎重に見直すことにより、新たな神の宣教の芽を見逃さないようにしたいと思わされます。カンバーランド長老キリスト教会日本中会の歩みも、ミッシオ・ディ 「神の宣教」の中にあり、これからも積極的な参与を試みる群れでありたいと思わされます。

² その時代や分野において当然のことと考えられていた認識や思想、社会全体の価値観などが、革命的に、もしくは劇的に変化すること。

エー・デー・ヘール師没 100 年、何を学び継承するか、 —カンバーランドスピリットとハンセン病療養所—³

東京基督教大学図書館・共立基督教研究所研究員 阿部伊作 あべ いさく

はじめに

本稿は、1909 年から 1934 年まで大阪に存在したハンセン病療養所「外島保養院」内の外島家族教会（現 邑久光明園家族教会）とその活動を支えた A・D・ヘール宣教師の宣教活動、また合わせて明治期のカンバーランド長老教会の活動について考察する。筆者は、2020 年からハンセン病療養所内のキリスト教会の資料保存と継承について研究を行った。⁴ その際に、当時、社会で忌避されていたハンセン病者に、A・D・ヘール宣教師が親身に関わり、日本基督教会浪花中會をとおして支援をしていた事実に認識を新たにした。

新型コロナウィルス感染症が流行したこの時代に改めて、感染症の経験と病者への関わりについて考えることができれば幸いである。2023 年は A・D・ヘール師 (Hail, Alexander Durham (1844–1923)) 没後 100 年であった。特に A・D・ヘール師晩年の靈的深化について、埋もれた記憶より、現代に生きている我々がヘール宣教師の遺産から何を発見し、継承していくべきいいかと共に考察できれば幸いである。



左 J. B. ヘール
右 A. D. ヘール

³ 本稿では、引用する史資料や歴史的記述で必要な場合に限って「癩」「らい病」などの表記を用いる。患者の場合は文脈により「回復者」「患者」「ハンセン病者」等の用語で表記した。

⁴ 阿部伊作「【調査報告】ハンセン病療養所のキリスト教会について①：外島家族教会からの一考察」『キリストと世界』東京基督教大学 33、2023、206–257 頁

I カンバーランド長老教会の伝道スタイル

1 明治期キリスト教について

明治初期のキリスト教界指導者の多くは、武士階級であり、いわゆる佐幕派出身者（薩摩・長州藩を中心とする新政府側ではない、いわゆる維新負け組）であった。また儒学的教養をもつ者が、宣教師から感化を受け新しい世界観を得、日本の近代化をめざし、和魂洋才的なキリスト教が形成されていった。明治初期のキリスト教は、自由民権運動のなか躍動感、勢いがあったが、中期には、西欧化の反動、国家主義の台頭で困難の時代に入り、教会は外国ミッションからの自立を求め、日本の教会色を強める傾向があった。個人の自覚、責任、主体性より、和をもとめ権威を大切にする、天皇を中心とする国体觀がもつ体質であった。伝道の広がりは、宣教師が居住を許された居留地から、都市部そして地方へと展開した。

それらの中で、教会形成における外国人ミッション（宣教師）、日本人教会（牧師、大会中會）との微妙な位置関係が、天皇を中心とした国体觀のなかで、宣教や神学等にずれを起こした。

2 明治期のキリスト教受容—プロテスタント宣教師の中で

明治初期来日したプロテスタント宣教師たちの多くは、まず、聖書翻訳、またお抱え教師として、幕府や藩の学校で英語や洋学教授などの教育、医療・社会事業などを通じた伝道方法を用い、キリスト教主義学校が誕生し、卒業生らが政界、官界、学界などで影響力をもった。1877（明治6）年 キリスト教禁制の高札撤去が始まり、キリスト教が公に日本国内で伝道できるようになって数年を経て、横浜で1872（明治5）年 日本基督公会（現 横浜海岸教会）設立、東京では1883（明治16）年 リバイバル運動が起こる。関東では主に学校、インテリ層への伝道が進んだ。1899年の条約改正（居留地廃止）以降、旅行が自由となり宣教師の活動範囲が増して、宣教師来日も増えたが、

時代は欧米化への反動時期、宣教団体は厳しい時代を迎えていた。

*明治前半に渡來したプロテスタント外国ミッション諸派

| 会 派 | | | |
|-----|------------------------|------|------|
| 1 | 米国監督教会（北） | 1859 | 安政6 |
| 2 | 米国長老教会 | 〃 | 〃 |
| 3 | 米国阿蘭改革派 | 〃 | 〃 |
| 4 | 米国浸礼自由伝道会社 | 1860 | 万延元年 |
| 5 | 米国伝道社（アメリカン・ボード） | 1869 | 明治2 |
| 6 | 英國教会宣教会（CMS） | 〃 | 〃 |
| 7 | 米国婦人合同伝道会社 | 1871 | 明治4 |
| 8 | 米国（北）バプテスト伝道会社 | 1873 | 明治6 |
| 9 | 米国美以教会（メソジスト・エピスコパル教会） | 〃 | 〃 |
| 10 | カナダ・ウェスレアン・メソジスト教会 | 〃 | 〃 |
| 11 | 英國海外福音宣教会（SPG） | 〃 | 〃 |
| 12 | スコットランド一致長老教会 | 1874 | 明治7 |
| 13 | 米国福音教会 | 1876 | 明治9 |
| 14 | 米国カンバーランド長老教会（CPC） | 1877 | 明治9 |
| 15 | 米国バプテスト伝道会社 | 1879 | 明治12 |
| 16 | 米国ドイツ改革派教会 | 〃 | 〃 |
| 17 | 米国美普教会 | 1880 | 明治13 |
| 18 | 基督教会 | 1883 | 明治16 |
| 19 | フレンド派 | 1885 | 明治18 |

参照：『明治のキリスト教』高橋昌郎著。吉川弘文館、2003、141-142頁

そのような中、カンバーランド長老教会宣教局より派遣されたヘール兄弟が、1877（明治10）年また翌年と、関西に来日した。当初は大阪川口居留地に居住し兄弟で、大阪、和歌山、三重などの僻地を伝道し、各地に教会を創設した。兄A・D・ヘールは教育者として、大阪同志神学館で教員として日本

人伝道者を育成し、1984年 川口居留地に大阪女学院を同長老教会教育監督として創設した。大阪は、建前より実際を重んじる都市であり、「自分の教派的立場をもちながらも閉鎖的にならず、他教派のあり方からも学びつつ民衆の間に入っていこうとする庶民的雰囲気をもつ、開かれた」カンバーランド長老教会の気風やヘール兄弟の実直さと関西地域（佐幕でも薩長でもない）の出会いは最良の出会いであったと考えられる。

弟J・B・ヘール（Hail, John Baxter (1846-1928)）は 1877年 夫妻で来日。1928（昭和3）年まで50年間、日本で伝道、帰来は3回、兄A・D・ヘールは、翌1878年、妻レイチェルと息子ジョンと共に来日。1923（大正12）年まで45年間、日本で伝道、帰来は3回、カンバーランド長老教会宣教局は、教会のない地域、宣教の進んでいない地域での活動を第一に考えていた。

大阪では、既にアメリカンボードから派遣された宣教師が活動していたが、上記の開拓伝道方針にならい、ヘール兄弟は、まだ鉄道などの交通機関がない中、舟、人力車、徒歩で紀伊半島の海岸線・山里に沿った町から町、村から村、山里と伝道し、「ぞうりばきの宣教師」と呼ばれた。1881年と1883年の和歌山伝道、新宮伝道、田辺伝道と幾度も宣教活動を継続し、洗礼者が与えられ教会が誕生した。それら撒かれた種が成長し、紀州から米国移民、東京へと信徒が広がり、宣教がさらに展開された。

A・D・ヘール師は、1909年（明治42）年の日本プロテスタント開教50年記念会で「田舎伝道」と題して講演を行い、その精神を語った。

田舎伝道は義務であり生きた問題である。田舎とは実際的に言えば比較的伝道の行われていない地を指す。田舎伝道は田舎全体に福音が発展して往くべき運動である。この運動が現今のキリスト教の重要な問題であると訴えたいと私は思うのである。これにとて先ず要請されることは、即刻手をつけねばなれば、即刻を要求するのである。教会が守勢に陥らんことを防ぐためにこれを要するのである。伝道は深く広く発達しなければなら

ない。⁵

3 カンバーランド長老教会と日本基督教会

明治期、関西では、長老主義の日本基督一致教会（1877（明治10）年設立）と会衆主義の日本基督伝道会社（1878年設立 後の日本組合基督教会）が存在した。1889年 米国カンバーランド長老教会ミッションボード（宣教局）は、日本基督一致教会に加入し、浪花中会所属となった。翌年、同一一致教会は日本基督教会と改称した。1891（明治24）年 浪花中会に登録された教会は17、うちカンバーランド長老教会は、大阪カンバーランド第一長老教会（現 大阪西教会）、同第二長老教会（現 大阪東教会）、新宮、愛隣（海南）、和歌山、田辺、須賀、愛知、四日市の8教会である。東京深川教会は東京第二中会へ登録された。浪花中会は、1906年に（河内）長野、富田林、大阪住吉の3講義所、1912年に外島家族教会の設立許可を行った。それぞれのヘル師が関わった。それらは、1909年のプロテスタント基督教日本開教50周年と相まって当時、大阪において熱心に行われた伝道活動の一端を表していると言える。

4 ヘール兄弟及びカンバーランド長老教会宣教師が開拓教会について 略年表

- ・1877（明治10）2.24 弟 J・B・ヘール夫妻横浜到着、28日神戸着
- ・1878.10.21 兄 A・D・ヘール夫妻、北京号で横浜着、
- ・1879 最初の講義所（大阪西教会の前身）を南堀江に開設、初めての説教が行われた。
- ・1880 南区八幡筋に講義所（大阪東教会）開設

⁵ 『開教五十年記念講演集』（近代日本キリスト教名著選集18）、日本図書センター、2003、397-400頁

- ・1881 (名護町に講義所開設)
- ・1884 最初の教会、大阪第一長老教会（大阪西教会）献堂式
日方橋愛隣教会設立、新宮教会設立・献堂、那賀教会設立
- ・1885 丸の内講義所（和歌山教会）設立、田辺教会設立
- ・1886 大阪第二長老教会（大阪東教会）設立
- ・1887 和歌山教会献堂式、田辺教会献堂式
- ・1889 愛知教会（後に名古屋教会と合同）設立、東京深川教会設立
日本の「カンバーランド長老教会」が「日本基督一致教会」に加盟し、後に「日本基督教会」と名称を変更
- ・1890 四日市教会設立
- ・1896 CPC 日本の教会、13 の自立した教会、49 人の現地で叙階された牧師、102 の日曜学校があり、5,400 人が出席と報告
- ・1897 大阪にてバンホーン師により安治川講義所開設（北田辺教会）
- ・1905 長野講義所（河内長野教会）、富田林講義所（富田林教会）設立、住吉講義所、開設⁶

5 ヘール兄弟、カンバーランド長老教会宣教師が関わった教会名 地理区分

和歌山……日方橋愛隣（海南）、新宮、和歌山、須賀

三 重……四日市、津、阿漕、上野、伊勢、亀山

大 阪……西、東、茨木、北田辺、河内長野、富田林、住吉、泉佐野他

名古屋……愛知

東 京……深川

⁶ J・B・ヘール『日本伝道二十五年』年表、大阪女学院、1978

6 係わったカンバーランド長老教会派遣の初代宣教師たち

ヘール兄弟の宣教活動を、多くの宣教師たちが助け協力した。ミス・アリス・オル(Alice Orr)、ミス・ジュリア・レビィット(Julia Leavitt)、ミセス・A・M・ドレナン(America M. Drennan)、ミス・ダフィールド(Bettie A. Duffield)、ミス・ガードナー(Ella Gardner)、ミス・フリーランド(Jennie Freeland)、ミス・モルガン(M. Morgan)、マリー・ゴールド(Marry Gault 医師)ら女性また夫婦の宣教師が派遣され大阪、各地で英語やバイブルクラスなどで教会員と子どもたちへ宣教した。

各教会に、神の計画による尊い歴史があるが、紙面の都合でここでは、貧民、弱者への協働の視点において特徴ある教会について記す。和歌山県は交通手段が整備されてはいなかったが、徳川御三家の一つ紀州和歌山藩があり、幕末から明治初期にかけて、文化、人との関りにおいては決して過疎地ではなかった。

7 なが 那賀教会 共修学舎と米国移民 忘れられた教会

和歌山県は全国で6番目に多い海外への移民を出した県である。那賀地方は、和歌山の山間部池田村、現在の紀の川市にある。1890年から3年間で同地域を中心に158人が渡米した。和歌山県内における米国移民先駆けの地域とされている。明治期、那賀には私塾が多数あり多様な教育が展開し、自由民権運動時代の中、粉河騒動と呼ばれる民衆闘争が行われた。

池田村の本多和一郎(1852-1895)は、慶應義塾で福沢諭吉に学び、帰郷して共修学舎を起こした。本多は1883年にJ・B・ヘールより受洗。共修学舎講堂においても聖書研究会を行い、自宅の一部を那賀教会として、共修学舎の指導や渡米相談所を設け渡米の推進と、キリスト教の伝道に努めた。ヘールの記録によると三谷村の最初の改宗者で、熱心な儒教家であったが、当初キリスト教には懷疑的、儒教とキリスト教の比較研究によって入信、その後、自分の学校に宗教と道徳の教科書として聖書を取り入れた、とある。墓碑に

は十字架が刻まれている。⁷ 大石余平、ヘールが訪問、共修学舎の塾生を洗礼に導いた。教会は1884年に創立された（受洗者41名）。この教会から、多くの渡米者が巣立った。J・B・ヘールが、海外移民について相談にのった。その中には堂本誉之進、本多熊太郎（後 外交官1874-1948）、他に画家 保田龍門らがいた。⁸

その後、一信徒が日曜学校を戦後まで継続して行ったが、教会は継続しなかった。現代にも通じるが、青年たちがその地域を離れ、都市へ就職、海外へ流出する地方教会の問題が那賀教会にもあった。しかし福音は海外に広がり、米国移住先で、教会員として教会活動がなされた。

8 カンバーランド長老教会 深川一致教會 山内量平 貧民救助会

深川教会とは、和歌山田辺教会の長老だった山内量平（1848-1918）が、東京に移り住んだ際に、在京していた清水芳吉と共に東京築地にカンバーランド長老教会を創設、1888（明治21）年秋、深川に移り、深川一致教会と称した。設立のためヘール兄弟が来京した。場所は、深川相川廿番地（現 江東区）、隅田川永代橋の近くであった。和歌山から東京に出てきたカンバーランド長老教会の教会員のほとんどが転会した。一致教会第二東京中会に属した。当時の東京の教会について、山内らは「教会を訪ねたが、新しい人を歓迎する気はない」ように思いました。「あなたをもっと知つてからでないと歓迎できません」という風で、みこころなら、キリスト信徒でも異教徒でも、すべて心からの歓迎を受けられる教会を建てようと願い設立にいたった。

当時は、いまだお国、藩意識が強く残っていた。また深川は東京下層として貧しい人々が多くおり、貧民救済会を立ち上げ支援を行った。

山内量平は、J・B・ヘールより1883（明治16）年洗礼を受けた。山内家

⁷ 『日本伝道二十五年』145-145頁、425頁

⁸ 『那賀地方の北米移民』那賀移民談話会、2021、5-20頁

の救いについては、植村正久の著作に詳しい。⁹ 和歌山県田辺の出身、妹は植村正久の妻季野である。季野は、フェリス女学院でキリスト教と出会い帰省時に家族伝道を行い、一家に信仰が広がった。山内、大石余平らは、東京で「紀伊友愛会」を設立。会で聖書を渡し、在京の紀伊国人らに伝道した。山内は、後に日本福音ルーテル教会の初代日本人牧師となった。¹⁰

深川教会の略年表

- 1888（明治 21）年 山内量平、清水芳吉（和歌山田辺）が上京、転居。
同年暮れ 築地で礼拝を始め、東京築地長老教会を設立。
- 1889 年 3 月 J・B・ヘール訪問、連続集会開催、4 名洗礼を受ける。移転 深川区相川廿番地、永代橋近く、(後に教会が発展し深川区伊勢崎町廿四番地にも深川教会講義所を設立)
- 1889 年 6 月 8 日 ヘール、上京（基督教新聞）教会設立
- 1890 年 3 月 深川一致教會礼拝案内 「福音週報」第二号 広告
貧民救助会の活動を行った。
4 月、カンバーランド長老教会、浪花中会に 9 教会、深川教会は東京第二中会に登録された。
- 1888 年 4 月 第一回、紀伊友愛会 在京の紀伊国人、親睦、基督教伝道会費有、参加者に聖書をプレゼント、
- 1893（明治 26）年、中会記録タムソン談「安息日には目下僅かに 7, 8 名の集まり、長老だも當地には居らぬ有様なり、続報：深川教会に関する特別委員タムソン、同教会に就き取り調べを為したる所、教会と

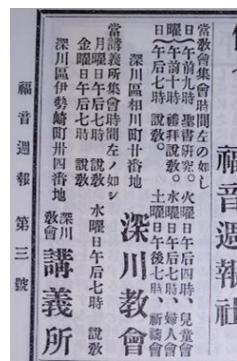
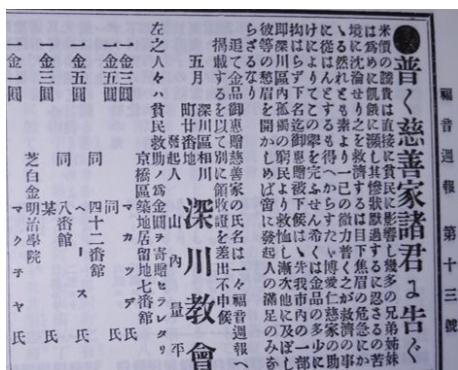
⁹ 佐波亘「山内家の人々」『植村正久と其の時代（第一巻）』教文館、1937, 733-770 頁

¹⁰ 福山猛『日本福音ルーテル教会史』日本福音ルーテル教会、ルーテル社、1954,

して継続するの見込みなりきにより已むを得ず。教会を解散しこの信徒の離散せざる様、保護し置き度きなり」 それ以降、東京第二中会記録から消滅された。

*その後、『基督教名鑑』1896（明治29）年11月には教会名記述無し。

深川教会は、貧民への援助を行い、今までヘル宣教師によって育てられたミッションとの関りを大切にしようとする姿勢があった。これは、宣教師や海外宣教ミッションから独立して、国家より認められようすることを重要視した日本基督教会指導者 植村正久らとの相反があったと考える。教会に牧師が就任せず、派遣されず、自然消滅した原因、そして山内が他教団の牧師になっていく要因の一つにはそのような背景と日本基督教会指導者達の考え方との違いがあったと考えられる。またその時代には田村直臣のいわゆる「日本の花嫁事件」による日本基督教会内の対立分離、主要な牧師の離反があった。



*「福音週報」(発行人: 植村正久、印刷: 山内量平、福音週報社、1-51 (1890-1891)) の広告より

9 新宮教会 1911年 大逆事件 弱者への視点

1911（明治43）年 ヘール師が開拓した新宮にて國を震撼させる事件が起った。なにより、ヘールが洗礼を受け、和歌山での開拓伝道の実であり、ヘールの伝道、また新宮教会を支えてきた大石家に起った事件である。1884年に大阪西教会で受洗した大石誠之助（大石余平の弟、医師）が、1911年大逆事件により死刑に処された、大逆事件とは、1911年 明治天皇暗殺計画の容疑者として逮捕され、26名が大逆罪で起訴、2名を除いて証拠のないままに死刑宣告を受け、翌年、幸徳秋水ら 12名が処刑された事件である。大逆事件は社会に大きなショックを与え、社会主义運動はきびしく弾圧された。国家権力による冤罪事件であった。沖野岩三郎牧師に警官の尾行が付き、教会は警察の監視下におかれた。

大石家はもともと学者や医師を輩出した旧家の家柄で、權威にたいする反骨精神の家風があったと云われる。大石家5名が洗礼受けている。父の増平、子の余平、^{むつよ} 瞳世、^{たまきとりひさ} 玉置酉久、誠之助である。きっかけは、瞳世が大阪の梅花女学校に学び、1882年に浪花教会 澤山保羅^{ぼうろ}から受洗し、兄 余平に聖書を贈り伝道したことに始まる。

長男 余平は、1883年にA・D・ヘールから受洗を受けた。そして余平の土地に新宮教会が建立された。1884年6月、9名の信徒で教会を組織し、会堂を竣工、教会設立式と献堂式を行った。ヘール兄弟が伝道開始以来最初に自力で教会堂を建築し、献堂した教会で、カンバーランド長老教会ミッショ�이によって設立された三番目の教会となった。山本周作は、伝道に従事するために新宮に居住することになった。1885年には、大石余平、山内量平らが田辺に集まり、平信徒伝道団を結成し熱心に伝道した。大石瞳世が卒業後、帰郷し日曜学校を開始、新宮教会幼稚園の前身となる。夏には英語学校が開かれた。報告によると「受洗者 20名、現在会員 31名、女学校生徒 7名、英語学校男子 60名であった。

新宮教会設立時、長老となった余平は、ヘール兄弟と共に伝道し、その後、

愛知県熱田で鉱業の仕事をしながら信徒伝道者として活動した。1891年10月28日、名古屋英和学校チャペルでの早天祈祷会中に起こった濃尾地震で夫婦ともチャペル煙突の下敷きになり召天した。¹¹ 息子に東京の文化学院を設立した西村伊作と、^{マルコ・スティーブン}真子、七分がいる。

教会設立時の執事は、大石家親戚である玉置酉久（余平の弟）であった。酉久は、その後、被差別部落の人びとと関わりをもち、虚心会という、教会員と被差別部落の人々との交流の場を作った。¹²

新宮教会は、設立の1884年から1907年まで専任牧師不在で、宣教師の巡回伝道や各地の伝道師に支援、信徒によって支えられ、カンバーランド長老教会からの経済的支援を受けた。1890年の第10回浪花中会では長老 玉置酉久が、牧師要請を願い、無牧の状況を訴えた。来援した宣教師は、ヘールを始め、ミス・オルなど多くの女性宣教師がいた。

1904、05年と、大石誠之助が会堂で「非戦論」など社会主義演説を行った。1908年新宮教会は伝道教会に編入。1907年初めて、主任牧師として沖野岩三郎が赴任し11年間在任した。その間に1911年大逆事件が起り、信徒 大石誠之助が死刑となり教会は警察の監視下に置かれた。

この事件は、関係者にとって語る事の困難な事柄で長く封印されてきた。ヘールや他の宣教師が残した文章からは直接の言及は見いだせないが、当時の日本基督教会浪速中会においても大きな出来事であったことは想像に難くない。

¹¹ 葛井義憲「西村伊作の幼年時代を中心に」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』21(2)、2010、10頁

¹² 辻本雄一『熊野・新宮の「大逆事件」前後：大石誠之助の言論とその周辺』論創社、2014、353頁

10 A・D・ヘール (Alexander · Durham · Hall 1844-1923) その人生

年表 人生の四季 宣教活動区分

前述したアレキサンダー・D・ヘールは長男として生まれ、イリノイ州マコム (Macomb) という僻地で成長した。名前は、母方の祖父 Alexander Chapman (1776-1834) の名前より命名された。祖父 Alexander が生きた時代は、アメリカの第二次大覚醒運動と呼ばれるリバイバル運動のさ中であった。祖父 A・チャップマンは、カンバーランドローガン地域中会の西部地域宣教委員会メンバーとして、頻繁に宣教旅行に出かける開拓伝道者であった。 ウィリアム・ホッジ牧師の教会にも属した (カンバーランド長老教会初期)。¹³ それらの中で米国においては 1810 年にアメリカンボード (米国海外伝道協力理事会) が設立され、海外宣教への活動が各教会で起こされてくる。それらピューリタン精神の背景・土壤より、ヘールは、カンバーランド長老教会宣教師として日本へ派遣され、1923 (大正 12) 年 6 月 5 日召天。(墓地は豊中市服部の外国人墓地である)。

亡くなる 10 年前の 1913 年、ヘール夫妻の来日 35 周年記念祝賀会が大阪市と南河内で催された。当時の基督系新聞「いのち : The Life」大正 2 年 5 月 25 日 (第 1 年 3 号) は、「ヘール博士号」として、35 周年記念祝賀会で語ったヘール師の言葉を以下のように収録した。

今回、私共二人のために催された祝会は、感謝に堪えないものであります
が、また恥じ入る次第です。御国に出来ない事をでかす諺に「炒豆に花が

¹³ Beard, Richard. Brief Biographical Sketches of Some of the Early Ministers of the Cumberland Presbyterian Church. Second Series. Nashville, Tenn.: Cumberland Presbyterian Board of Publication, 1874, p.148-173、Alexander Chapman : 1776 – 1834, Cumberland Presbyterian Minister
<https://www.cumberland.org/hfcpc/minister/ChapmanA.htm>

2024/3 最終閲覧

咲く」ということがあるのを学びましたが、日本の御方はそれを実行なさるのに驚きました。私どもは炒豆の如きものですが、皆さんから花を咲かせていただきました。これを以っても日本人は何事でも出来なさるお方だと申すことができます。私共は御国に於ける 35 年は只年を重ねたと申すに過ぎないものであります、忘れてならぬのはこの長年の間、私共を護り給ひました神様の恩恵めぐみであります。神様は萬世不易永久不変の御方でありますから過去に賜はれた恩澤は正しく将来にも下さる証拠であります。私共は只神様の愛と力とを頼りとして萬事を尽くすのであります。……35 年の昔が丸で夢の様に想はれます。こいねがう所は、この上尚ほ基督の精神が御国の人間に活現されまして、利己心や我慾主義を捨て愈々高等なる生活に進まれんことであります。過去 35 年を顧みますれば、一として神様に感謝せずに済むことはありません。私の洗礼を受けました信者の中には、既に召されて天国に昇った人が多数御座います。私の息子も私を彼国で待って居ります。私は残る生涯を御国に於いて神様の許し給ふまで働いて、天つ故郷に帰りたいと存じて居ります。

ヘルの人生がよく表された文章である。人格的魅力と共に神と人への感謝と人生の成熟が示されている。この祝賀会では多くの参加者から、その業績と人格の高潔さ、無私の愛の業について賛辞が寄せられた。

A・D・ヘルの人生を四季で例えるならば以下の区分がうかがえる。

- | | | | |
|------------|----------|----------|--|
| 第一期 | 根 | 宣教師準備期間 | 海外宣教師候補者として認可 33 歳 |
| 第二期 | 春 | 芽吹き・種まき期 | 35 歳～ 来日、大阪にて宣教活動開始、 「田舎伝道」僻地伝道 |
| 第三期 | 夏 | 成長・促進期 | 41 歳から、成長見守る教育事業監督となり、 教育事業を展開していく。女子教育、ウエルミナ女学校。牧師養成機関、YMC A、神学書出版など |

第四期 秋 同伴・指導期 46歳から 帰大阪 収穫と受難の時代へ
日本人より自給自立を目指す教会形成への時代、国家意識の高揚
と欧米化（キリスト教）への反動期 1888年：大日本帝国憲法制定、1891年：教育勅語、内村鑑三不敬事件、1899年：私立学校令、
文部省訓令12号による宗教教育禁止

第五期 冬 見守、靈的円熟期 68歳から～ 古株 息子、妻の召天、ハンセン病者への奉仕、仕えるディアコニア 内面 信仰の深化

略年表（数え年） 1844-1923

| 略年表 年齢 (1810 カンバーランド長老教会 (CPC) 設立) | | |
|------------------------------------|----|---|
| 1858 | 16 | マコーム教会 (CPC) で弟と一緒に洗礼。南北戦争時には北軍に志願（軍人恩給） |
| 1866 | 24 | ウェンズバーグ大学卒業 ¹⁴ 、ペンシルバニア州ユニオンタウン長老教会で奉仕 |
| 1867 | 25 | 按手礼を受ける。ペンシルバニア州プレゼントビューセンターチャーチで任職式 |
| 1868 | 26 | レイチェル・リンゼイ (Rachel Lindsey) と結婚 |
| 1869 | 27 | カンバーランド教会を牧会 |
| 1870 | 28 | 第一子死産、翌年次男ウイリアム・リンゼイ誕生、しかし3歳で早逝 |
| 1873 | 31 | オベリン神学校卒業。73年三男ジョン・ユージン生まれる |
| 1877 | 33 | クリーブランド医学大学（現 ウエスタン・リザーブ大）にて学位取得、医師免許取得。 |

¹⁴ <https://www.waynesburg.edu/community/paul-r-stewart-museum/distinguished-alumni> 2024/3 最終閲覧

| | | |
|----------------|----|---|
| 1878 (M 11) | 35 | 10月カンバーランド長老教会派遣宣教師として来日、大阪川口居留地で伝道を開始、翌年より講義所を作る。以後、兄弟で大阪、和歌山、三重の僻地を中心に活発な伝道行なう。 |
| 1880 | 38 | 長女アニー誕生（後 ホキエ宣教師と結婚） |
| 1881 | 39 | 和歌山への伝道旅行始まる。以後継続的に伝道、 |
| 1883 | 41 | 教育事業監督拝命。大阪伝道同志館にて伝道者育成、地方教会を支援。各地に英語学校、幼稚園、男子、女子校、孤児院を構想。YMCA事業に協力 |
| 1884 | 42 | ウキルミナ女学校（川口22、現 大阪女学院）開校、『神学入門』出版、新宮、大阪西教会献堂式 |
| 1885 | | 新宮で英語学校設立、（和歌山では在籍110名、前年設立、ミスオア、ダフィールド） |
| 1887 | 44 | 第一回帰米（病気療養） |
| 1888 | 46 | 帰阪、クリーブランド大学より神学博士授与。同大組織神学教授の招聘辞退、四日市伝道 |
| 1894 | 53 | 日清戦争、傷病兵へ、捕虜への慰問、出兵兵士への聖書配布 1894-1895 |
| 1895 | 54 | A・D・ヘール夫人、大阪泉南の紡績工場女工に仕えた。工場で定期的集会を始める。婦人矯風会林歌子を精神的に支える。 |
| 1897 | 56 | カンバーランド長老教会伝道会社、日本伝道二十年記念会（ウイルミナ女学校（川口22）） |
| 1907 | 65 | イタリアでの国際日曜学校大会に日本代表として夫妻で参加。F・B・マイヤーも参加 |
| 1909 | 67 | 日本開教50年記念会（東京）にて講演「田舎伝道」を行う。 |

| | | |
|---------------|----|---|
| 1911 | 68 | 軽井沢にて家族休暇中、息子 J・E・ヘール浅間山噴火に遭難、召天 |
| 1912 | 69 | 外島保養院内家族教会を応援始める。約 12 年、召天 3 週間前までハンセン病者へ仕える |
| 1913 | 70 | 来阪 35 周年記念祝会（大阪 YMCA 会館、南河内郡玉手山、津、四日市で祝賀会） |
| 1914 | 71 | A・D・ヘール夫人レイチエル召天 |
| 1916 | 72 | アジア伝道会議（韓国）、日本伝道会議の友好代表として参加（1910 日韓併合、1919 三一運動）そこからピョンヤンでの長老派会議に出席。 |
| 1921 | 77 | 北長老教会朝鮮ミッション年次総会（ピョンヤン）で講演 |
| 1923 (T12) | 79 | 4月 16 日、ヘール 80 歳記念会（ウキルミナ女学校）、5月 17 日、家族教会訪問 6月 5 日、召天、大阪神学院 大阪女学院で葬儀（後日、外島保養院でも記念会） 9月 1 日、関東大震災 |

*アニー、ヘール、ホキエ著「アレクサンダー・ダーハム・ヘール」『大阪女学院史研究』1、1984、120 頁 参照

11 A・D・ヘール宣教師の晩年、人生の第五期について

1911(明治 44) 年 AD ヘール 68 歳（来日 34 年目）の時であった。家族での軽井沢での避暑の時、長男で宣教師の J・E・ヘール（37 歳）が浅間山噴火により不慮の急逝を招いた。ヘール夫人レイチエルは息子の死のショックで、重い心臓病を引き起こし、元の健康を回復することはなかった。1912 年 社会事業のためとして J・E・ヘール記念館が三重の阿漕教会に設立される。そうした背景の中で、同年からのハンセン病療養所外島内での伝道活動への A・D・ヘールの関りが始まったことは意味深い。A・D・ヘールは、米国において

オペリン神学校卒業後、クリーブランド医科大学で医学を修めた宣教師であり（1876～77年春と秋学期に受講）。ハンセン病に関する医学的知識を有していた。そのようにしてA・D・ヘール夫婦の人生晩年には、息子の死から導かれ病者、弱者への奉仕への道が備えられていた。外島保養院への活動は、ヘール夫妻にとって大切な事柄であった。その表れとして以下の言葉がある。家族教会でのヘール師召天記念会席上で福田荒太郎師は、思い出として、ヘール師は患者と会う時にはいつも、「私は、みなさん（患者）に逢うのが慰みあります」と発言したことを述べた。¹⁵

外島保養院にて、その年のクリスマスに12名の入所者がヘールより洗礼を受け、一人ひとりと握手をしたことが入所者にとって大きな励ましとなつた。そして召天する前の最後の奉仕先が外島保養院、5月17日の家族教会召天者記念会参加であった。福田荒太郎師と共に働き、ヘール師は12年の間、202名の入所者（及び職員）に洗礼を授けた。患者たちは、洗礼の「おめでとう」の一語と握手に驚き、喜び「はじめて本当に人間の心にふれた」と感激した。外島保養院がヘール宅から近い所にあったこと、医学を修めたことは神の配剤である。

福田荒太郎がハンセン病療養所伝道を、周りの教職者が積極的に賛同しなく失望の中にいる中、軽井沢から戻ったヘールは「福田さん、聖示に叶っています」と励ました。福田は、「私はこの一言、先生の言葉に失望から不撓の力を与えられて決然としてここを捨てることは出来ないと申しました」と力を得、ヘールは共にその後も伝道訪問と経済的支援を行った。人生の晩年にふさわしい、社会から見捨てられた弱者たちに愛をもって仕えた働き人であった。レイチェル夫人については召天後、その日本での働きを記念して1918年住吉教会が会堂を献堂した。レイチェル夫人の、大阪泉州の紡績工場女工たちへの働きを記念したことである。ヘール夫婦は、年齢を重ねる中で、

¹⁵ 岩本清濤『故ヘール先生の片影』福田荒太郎（発行）、1926、38頁

社会で弱くされている人々との関わりを通して、イエスが示された、本当の命に出会っていったのではないだろうか。

A・D・ヘル師



外島保養院 10 周年（1919 年）の記念写真（清教学園中高等学校所蔵）

関連する記事として、ウイルミナ女学校青年会が基督降誕祭に際して「一同祝意を表すため種々なる物品を取り集め西区外島に設立せるらい病院へ寄贈したる」（YWCA「女子青年界」10 卷、1913（大正 2）年）、記事「アレクサンダー・ダーハム・ヘル」アニー・ヘル・ホキエ（長女）述に、ライ患者と祝うクリスマスについて「家族教会会堂建築のためヘル宣教師が英國、米国 MTL（Mission to Lepers）へ資金援助を申込んだ」（大阪女学院史研究 1）との記載がある。

II 章 ヘール師晩年の活動 ハンセン病療養所内教会との係り

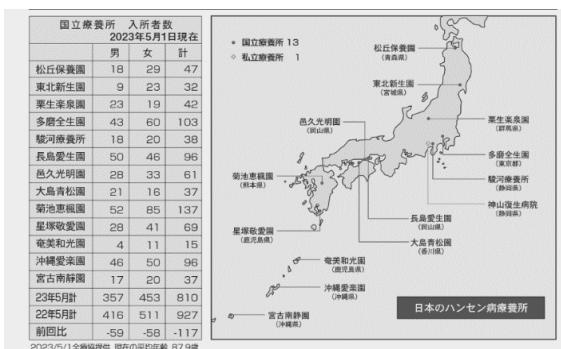
次に AD ヘール師晩年の 10 年間、係りもった大阪外島保養院（ハンセン病療養所）と療養所内外島家族教会について概要を記す。

1 国内のハンセン病療養所について

ヘル師が関わりをもった大阪外島保養院は、1907（明治40）年制定の「癩予防ニ関スル件」により1909年、全国に5つの「道府県連合立らい療養所」が設置された中の一つである。その後、8箇所が設立、現在国内に13の国立ハンセン病療養所が点在している。1996年「らい予防法」が廃止されたが隔離体制は存続、それまで90年間、約35,000人が隔離を受け、社会復帰した退所者もいるが、入所者の約7割は、50年以上に渡り療養所に留まりその地で生涯を終えなければならなかった。

現在、施設にハンセン病患者（菌陽性）はいないが、ハンセン病の後遺症による障害者と高齢者が暮らしている。その歴史は、世界の各ハンセン病政策から遅れ、人権侵害の絶対隔離政策によってなされた、誤った優生思想による強制的収容と無らい県運動（「病者の撲滅」を目的として国を挙げて作られた管理）であった。

療養所は、「実の家族との離別、実名を名乗れず、結婚しても子どもを産むことが許さない子供のいない社会、入所規定があっても退所規定がなく、火葬場、納骨堂があり死んでも故郷に埋葬されない」隔離収容施設であった。多くの入所者は、絶望に出会い、自死を考え、試み、死と不条理な生に対峙、抗う経験をして、歩みを深めてきた。社会から除外される中で、彼らが見出したのは、かけがえのない人間の命の尊厳という普遍的な実在であった。



*好善社 HP より

(<https://kozensha.org/>)

2 ハンセン病療養所とキリスト教、

日本において、戦国時代、宣教師らはハンセン病患者に関わり施設を作り介抱した。¹⁶ 明治に入りいまだ、何ら救済を行わず放置されていたハンセン病患者へ医療的活動を始め支えたのは宗教者とその援助団体、キリスト教の宣教師だった。¹⁷ 熊本回春病院でのハンナ・リデル女史（1855-1932）、草津・湯之沢地区でのコンウォール・リー女史（1857-1941）、静岡裾野の復生病院でのG・テストヴィド神父（1849～1891）、¹⁸ 待勞病院でのコール神父（1850-1911）と修道女、好善社でのケート・M・ヤングマン（1841-1910）女史らである。（東京都東村山市にある高松宮記念ハンセン病資料館では、療養所にゆかりのある人物としてそれら宣教師と共にA・D・ヘールの展示がなされていたがリニューアルした国立ハンセン病資料館展示では外されている）。

3 外島保養院

外島保養院は、1909（明治42）年 ハンセン病の公立第三区連合府県立療養所（大阪府主管）として設立された。患者収容対象地区は二府十県（大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、和歌山県、滋賀県、三重県、岐阜県、福井県、石川県、富山県、鳥取県）で、場所は、大阪湾の一番奥まった海拔0メートル、河川が湾に注ぐ河口低湿地帯中州であった。設立計画当初、また定員拡大予定と隔離強化にともなう移転計画においても地城市民による反対運動があった。入所者床定員は当初300床。防波堤、有毒、無毒地と区分され、見張り台がある施設だった。1934年9月、関西に室戸台風が来襲した際に、外島保養院は破滅的な被害を受け全壊した。設立から25年目であった。室戸台風以降、現地での再建はならず、保養院は、岡山県に「光明園」として

¹⁶ 海老澤有道「救癒事業」『切支丹の社會活動及南蠻醫學』富山房、1944、169-219 p

¹⁷ 森 幹郎『足跡は消えても ハンセン病史上のキリスト者たち』ヨルダン社、1996年

改名し移転・復興され、現在に至っている。

4 外島家族教会（現 邑久光明園家族教会）

外島家族教会は、外島保養院が開設されて 3 年後の 1912 (明治 45) 年頃、福田荒太郎 (大坂伝道同志神学館卒) が伝道活動を行い、外島キリスト教青年会が誕生した。同年クリスマス時期、A・D・ヘールが訪れ 12 名に洗礼を受けた。¹⁸ その後も福田の宣教活動を、ヘールは励まし、支援した。礼拝は、外島保養院の共同礼拝堂 (他宗教と共同) を使用。週に 2 回実施。発足式については、「日本基督教会本部より議長代行として浪花中会議長森田金之助牧師、A・D・ヘール宣教師 (大阪神学校教授) ら教師、保養院から院長ら、その他の来賓、教員が参加。日本基督教浪花中会所属、自給の外島家族教会として開設と教會長老 阿部礼治は記した。¹⁹ 浪花中会議事録によると 1915 年 4 月の第 38 回浪花中会にて、「中会直轄の団体として公認する事が決議された」と記録された。家族教会は、その後、日本基督教浪花中会に属する自給の協力ミッションの伝道地として教会形成がなされていった。家族教会草創期の信徒数推移は、大正 5 年 67 名、6 年 57、7 年 54、8 年 63、9 年 44 名、保養院定員 400 床 (大正 4 年) の 1 割近い教員がいた。

1913 年、福田は、家族教会内に聖書塾を開設し、四名が入学し、三年後、岩本定吉と藤本藤松の二名が卒業、伝道師資格を与えられ、ハンセン病者伝道者養成の先駆けとなった。和歌山の湯の峰温泉で活動した。岩本は、療養所内に出来た自治会の初代理事を務めた。²⁰ また、外島保養院で福田より入

18 『A・D・ヘール先生と外島家族教会』大阪女学院創立 125 周年
記念行事委員会編、2008、8-9 頁

19 阿部礼治『家族教会史』『おとうさん：阿部礼治長老 追悼記念文集』1967、33-34 頁

20 松岡弘之「キリスト教信仰と「自治」」『ハンセン病療養所と自治の歴史』みすず書房、2020、43-48 頁

信した武市久治は、草津に行き、ヘール師の支援を得て、「大阪家族教会草津支部」の看板を掲げ伝道した。最盛期は20名の参加者がいた。²¹

福田が、1923年牧師離職後、1926年に後任として石黒寅亀神学生（大阪神学院卒）が桑田繁太郎牧師より派遣され4年半奉仕した。ヘール逝き、福田が去った後、桑田、馬淵、堀井順次、後藤、石黒と六代の牧師が関わり、G・W・フルトン、A・オルトマンス（米オランダ改革教会宣教師、東山学院初代院長、好善社支援）、E.M.クラーク、マーチンなど宣教師が援助した。

1934（昭和9）年、前述した室戸台風来襲の風水害遭難で、教会信徒は、27名、その後の他療養所委託中に5名が犠牲。教会は、移転した光明園療養所内で、光明園家族教会として「家族」の名を継承して歩む。外島時代、日本基督教会浪速中会に所属していた家族教会であったが、いつごろか、浪花中会、日本基督教会からは記録が消え（日本基督教年鑑記載無）、教団に加盟するまで事実上、単立の教会であった。1949（昭和24）年、日本基督教団東中国地区（岡山・鳥取）に加盟所属した。1958年、播磨 醇を専任伝道師として迎えた。就任牧師は大嶋常治、河野進、播磨 醇、津島久雄で他代務者がおり、現在は岡山博愛会教会渡辺真一牧師が代務者である。

2022年現在、教会は設立110年。終末期を迎える会員は7名（内園外者2名）であるが、現在も家族教会は邑久光明園家族教会として継続されコロナ禍のなかでも月2回の礼拝が継承されている。家族教会草創期の大きな特徴は、一牧師 福田荒太郎の献身的な働きとヘール宣教師の援助、福田が教会役員と共に院内自治会活動に積極的な関わりをもっていたことである。

外島統計から、A・D・ヘールが関わった1912～1923年の外島家族教会に関わる部分は以下である。

²¹ 『湯之澤部落60年史稿』『日本ハンセン病学会雑誌』12号、1942、574頁

*第三区府立外島保養院発行『統計年表』『年報』現在患者宗教別表（人数）
と説教回数表より

| 年度 | 教会 説教 回数 | 教会 信徒 数 | 真宗 | 淨土宗 | 真言宗 | 禪宗 | 日蓮宗 | 天理教 | 他（宗教不明含） | 宗教合計 |
|------|----------------|---------------|-----|-----|-----|----|-----|-----|----------|------|
| 1912 | 15 | 14 | 122 | 27 | 42 | 26 | 23 | 39 | 8 | 304 |
| 1913 | 42 | 36 | 123 | 22 | 45 | 21 | 28 | 33 | 4 | 312 |
| 1914 | 30 | 57 | 117 | 22 | 42 | 18 | 19 | 28 | 4 | 307 |
| 1915 | 39 | 72 | 138 | 19 | 38 | 21 | 29 | 28 | 9 | 354 |
| 1916 | 22 | 67 | 143 | 24 | 62 | 29 | 30 | 26 | 8 | 389 |
| 1917 | 23 | 57 | 138 | 29 | 82 | 37 | 26 | 25 | 10 | 404 |
| 1918 | 27 | 54 | 124 | 27 | 74 | 31 | 27 | 24 | 11 | 372 |
| 1919 | 32 | 63 | 135 | 22 | 69 | 32 | 27 | 20 | 7 | 375 |
| 1920 | 30 | 56 | 133 | 23 | 59 | 38 | 27 | 18 | 5 | 359 |
| 1921 | 27 | 43 | 151 | 27 | 71 | 22 | 17 | 18 | 4 | 353 |
| 1922 | 26 | 36 | 152 | 26 | 74 | 30 | 29 | 16 | 6 | 369 |
| 1923 | 21 | 35 | 163 | 24 | 76 | 23 | 28 | 12 | 4 | 366 |

*合計は、宗教不明と当該年度の逃亡者も含む数値

療養所内教会を巡る人びととキリスト教会

5 福田荒太郎（1889–1956）

福田荒太郎は、岡山で生まれ、1898年植村正久から幼児洗礼を受け、受洗は1903年である。青年期に台湾に渡り、山岳民族伝道（生蕃）を志し、日本

基督教会南庄伝道所で伝道師として 1908 年 遠藤千浪と共に山岳民族伝道を開始したが、病のため内地帰還した。²² ハワイのハンセン病救済者ダミアン神父の伝記を読み、ハンセン病患者への伝道を決意、帰国して、1912 年に大坂同志神学館（大阪神学院と改称）を卒業した。

福田は、前述した通り、1912 年外島保養院にて伝道活動を始め、外島家族教会が形成されていった。周りの教職者が反対する中、その活動を A・D・ヘルが援助した。

6 日本基督教会のキリスト教社会慈善事業についての考え方

明治後期から大正にかけ当時の日本基督教会中心指導者植村正久は「たとえ米国に何らの慈善事業ありとも、英國にいかなる結社ありと聞くとも、わが国のキリスト教徒は^{みだる}に動くことなかれ。今日において吾人に不急なる事業を企て、^{みだる}妄りに微弱なる信徒の負担を重からしむるなかれ。……妄りに慈善事業に狂奔するなかれ。某の育児院、某の企業、果たして今日の急務なるか。これ我らの疑惑するところなり」²³ と述べ、社会事業は莫大な経費を要し、結果として宣教師たちからの支援を仰がざるを得ない、当面は伝道と教会形成に専念すべきと主張した。基盤脆弱な明治期の日本基督教会の現実を憂いての発言であり、植村自身は社会的な関心を有し、その必要性も理解していたが、影響力がありこの戦略が、その後の日本の教会の基本方針になった。それらの中でヘル師が福田荒太郎の働きを支援した意味は大きい。

7 大阪同志神学館（後の大阪神学院）

大阪同志神学館とは、米長老教会宣教師 D・マーレーが山口で私塾として始め、1903（明治 36）年、大阪にて自宅を提供して起居を共にする伝道同志

²² 「福音新報」 845 号 1911 年 9 月、教勢 台湾南庄伝道教会

²³ 「福音新報」 34 号 1891（明治 24）年

館を設立。その後、ウヰルミナ女学校（1904年浪華女学校と合併、現 大阪女学院）が移転した際、西区川口22番（元川口居留地）に残った校舎（隣接する裏地19番地Bにはヘール宅が、対岸に大阪府庁があった）に移転。1909年、金沢で宣教また金沢女学院（現 北陸学院）で教えていたジョージ・W・フルトン（米長老教会宣教師、下関梅光女学院初代理事長）が後を継ぎ、院長となり、1918年に豊中市に移転、1920年大阪住吉区（現 阿倍野区）へ移転し大阪神学院と改称、1927（昭和2）年に神戸神学校（S・P・フルトン校長（南長老教会宣教師））と合同して中央神学校となる。伝道同志館以来の歴史は25年で幕を閉じた。

大阪神学院の教師陣は、A・D・ヘール（組織神学、牧師養成指導など）、桑田繁太郎（大阪北教会牧師、教頭担当）、森田金之助（後の大阪女学院校長就任）、山本秀煌（『日本基督教會史』著、歴史家）、村田四郎（後の明治学院第五代院長就任）、馬場鉉作（築地大学校を経て一致神学校〔明治学院神学部前身〕卒）、川添万寿得（後の聖書改訳委員、日本神学校校長）等で、草創期は、昼間に聖書を学び、夜間は大阪市内講義所で伝道するという実践的な学校であった。明治学院神学部出身教師多く、明治学院大阪分校的であった。校長、教授、立地など、米長老教会の経済的支援での経営が示唆（明治学院神学部経営母体は海外長老教会ミッション）。

同館は、入学資格は中学卒業程度の学力、修学年限は最初3年のちに4年、1923（大正13）年より予科2年本科3年の5年制となった。卒業生によると、「川口旧居留地、クラスは3つ、学生数は20名ほどの小規模、2階学生寄宿舎、1階チャペルと5つほどの教室のモルタル塗りの二階建ての建物」²⁴であった。同神学院は、日本基督教会大会認定神学校ではなく、当時、関西では、同教会認定神学校として神戸神学校（後の中央神学校）があり、日本

²⁴ 石坂幸之助「同志館の思い出」『中央神学校の回想』中央神学校同窓会、1971年、152頁

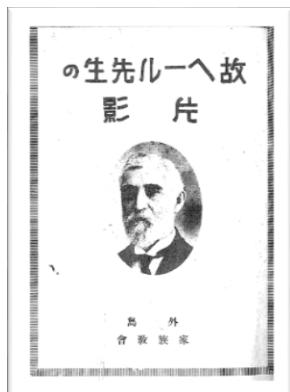
組合基督教会の神学校は同志社英学校、日本メソジストでは関西学院神学部、聖公会では大阪三一神学校が存在した。



大坂傳道同志館教員
及生徒の集合写真
(大阪女学院所蔵)

8まとめとして 弱者への愛の眼差しと握手

ヘール宣教師が、外島家族教員へ送った手紙を記す。そこにヘールの弱者に仕える、愛の精神が凝縮されていると考える。日付は5月26日で、召天(6月5日)の11日前、最後の訪問後の手紙である。



「昨日は御親切にお尋ね下さいましてまことに有難く御礼申し上げます。先日はキリストにある皆様方にお目にかかり有益なる集まりを持つことができてほんとうに嬉しく存じて居ます。そして私共各々は異なって居りましても、キリストによって一体となって、キリストを救い主として、あがめて居ります。私共はどこに居りましても、またどの様な境遇に居りましても、常にキリストは、私共の友であります。一番近

き親友で御座います。

私共が病床に居りましても、又以下に健全でありましても、又外島病院でも、又ほかの所でも、キリストは私共を見守って下さいます。私共はよろこばねばならないことがあります。私はこれによつていつも慰めを得て居ります。私はいつもあなた方の教会へ行くことが出来ません。

只今この手紙を病院へ送ることを感謝して居ります。

最後にキリスト、皆様とともにいまさんことを祈り奉る。

エー・デー・ヘール 愛する皆様へ」

この手紙は、先生が五月十七日にお出でになって、それから二階をお下りにならなかつたとのことであるから病氣でお書きになつて私共へ下さつたものである。日付は五月二十六日である²⁵。

A・D・ヘール師及び弟と息子の3家族は、明治中期から大正期にわたり長く関西で宣教活動を行い、この地に埋葬された。その活動を振り返ると、日本の教育、文化、社会に影響を与えた欧米プロテスタント宣教師たちの中で、僻地宣教、教育、主体的日本人育成のユニークさはピューリタン精神の表れとして改めて特徴的であり受取り直すべき記憶である。

ヘール師召天後、大阪女学院校長 森田金之助が中心となり「ヘール会」が継続的に催され、関わる多くの資料は、大阪大空襲で焼失したが、現在、清教学園中・高等学校所蔵の中山昇収集資料、大阪女学院学院史資料室に関係資料が保存されている。

晩年、ヘール師の足跡を調べた清教学園中高等学校長であった中山昇師（1925-2019）は、ヘール師の生涯を、「一途にいのちの種を持ち運び、石地の石を取り除くことで開拓の事業を担い切った人生であった。教会を立ち上げ、学校を建て、病人を見舞った、その人生を「キリストにある開拓」とい

²⁵ 『故ヘール先生の片影』、70-71 頁

う言葉として受け取り学びたい、まさにぞうりばきの心で開拓に立ち向かうことが、ヘール先生に続く者に与えられた神様の賜物だ」と記した。

2024年 改めて、コロナウィルス終焉の中、何事もなかつたようかに平時の生活が取り戻されている日本において、私たちは、神様から何を学び継承したら良いのか、ヘール師が一世紀前に取り組んだ宣教活動から、現代の田舎伝道とは何か、社会から忌み嫌われていた存在のハンセン病者への関りから学び、現代社会において無視されるマイノリティな存在へ仕え、そこから神の深い憐れみを知っていく信仰生活が実践できれば幸いである。ハンセン病患者を一人の人間とて愛し、仕えたヘール師の精神を受け取りたいと願う。

ヘール宣教師墓石に刻まれた言葉は「最も大いなるは愛です」である。

この報告は、2023年6月24日（土）宣教研究所講演会（国立のぞみ教会）、また 10月21日（土）高座教会の「道の駅」集会でお話した報告をもとに追加修正したものである。（10月21日は、A・D・ヘール師が、1878年、今から146年前、汽船北京号で横浜港に到着した日であった）

（本稿は、科研費 JSPS KAKENHI21H03873による研究の一部です。詳細は、東京基督教大学機関リポジトリ掲載論文をご覧ください。）

最後に、このような機会を与えてくださったカンバーランド長老教会の皆様に感謝を申し上げます。

「この方に信頼する者は、だれも失望させられない。」

（ローマ人への手紙 10章 11節 新改訳 2017）

III 附録 参考文献及び教会年史、療養所内教会及び詩、

1 ヘール兄弟の著作

1. A · D · Hail 『Japan and its rescue : A Brief Sketch of the Geography, History, Religion and Evangelization of Japan』 Cumberland Presbyterian Publishing House, 1898
2. エー・デー・ヘール撰、本間重慶訳『神学入門』大阪印刷、1884
3. J · B · ヘール 『日本伝道二十五年』大阪女学院、1978
4. J · B · ヘール『ヘール日本伝道記—1877-1903』大阪女学院創立 85 年記念、1969
5. ジエ、ビー、ヘール著『生命（いのち）の道（ことば）』米国聖教書類会社
6. J · B · ヘール、岩崎寛達訳『翁問答』米国聖教書類会社、1887

2 参考文献

1. 『大阪女学院のキリスト教教育—1884—2022 年』大阪女学院教育研究センター、2022
2. 『那賀地域の北米移民』那賀移民史懇話会、2021
3. 藤本大士『医学とキリスト教—日本におけるアメリカ・プロテstant の医療宣教』法政大学出版局、2021
4. 松岡弘之『ハンセン病療養所と自治の歴史』みすず書房、2020
5. 花木宏直「初期送出地域の成立と変容—和歌山県那賀郡田中村を事例に」『近代日本における海外移民送出地域の歴史地理学研究』、筑波大学博士論文、2018、77 頁
6. 『大阪にあったハンセン病療養所—外島保養院』大阪市外島保養院の歴史をのこす会、2017
7. 「自筆による A. D. ヘール来日までの経歴」『大阪女学院史研究』1 号、

2012、133–135p

8. 『祝福された手—宣教師ミセス・ドレナンの生涯』大阪女学院教育研究センター、2011
9. 『A. D. ヘール先生と外島家族教会』大阪女学院、2008
10. 高橋昌郎『明治のキリスト教』吉川弘文館、2003
11. 山内量平『信仰三十年基督者列伝』[警醒社編纂]日本図書センター2003、(近代日本キリスト教名著選集) 308–9 頁
12. 『日本福音ルウテル教会創設二十年記念史』日本図書センター、2003、(近代日本キリスト教名著選集) 14–21 p
13. 中山昇『わらじばきの宣教師 : A. D. ヘールに学ぶ』カナン文庫、2001
14. 坂井信生『山内量平—日本のルーテル教会初代牧師』中川書店、1993
15. A People Called Cumberland Presbyterians, Ben M. Barrus, Milton L. Baughn, and Thomas H. Campbell; Wipf and Stock, 1998,
16. 富山光一『富山光慶の生涯』1990
17. 『風と海のなか—邑久光明園入園者八十年の歩み』邑久光明園入園者自治会、1989
18. 曽野洋「福沢諭吉門下本多和一郎と共に修学舎—和歌山県打田町の『本多和一郎関係文書』に関する若干の考察」『地方教育史研究』19, 1987, 50–67 頁
19. Hearth and Chalice, James W. Knight; The Board of Missions of the Cumberland, Presbyterian Church, 1980
20. 佐波亘編『植村正久とその時代』教文館 1976、復刻再版、1 卷～8 卷
21. 中山昇『A. D. ヘールの生涯—大阪の使徒』ともしひ社、1965
22. 児玉充次郎『紀州の聖者—ヘール師物語』ともしひ社、1951
23. 『A.Oltmans』全生病院内秋津教會, 1930
24. 岩本清濤『故ヘール先生の片影』外島家族教会、1926
25. 山内量平『十字教会教理問答』、1894

3 ヘール兄弟が関わった教会の各個教会史、関連記念史

1. 『純神の家族—光明園家族教会の 100 年』日本基督教団光明園家族教会、2013
2. 『伊勢の伝道—山田教会の歴史』富山光一著；山田教会史編集委員会編、日本基督教団山田教会 2005
3. 『栄光神に在れ—日本基督教団河内長野教会創立 100 周年記念誌』日本基督教団河内長野教会 2005
4. 『福音』1-3、日本基督教団粉河教会、2002 復刻版
5. 『神の家族—光明園家族教会八十五年記念誌』1998
6. 『津における宣教 100 年のあゆみ—旧津・旧阿漕・現 津三教会の歴史を通して—1896-1996』日本キリスト教団津教会 1997
7. 『百年のあゆみ』日本キリスト教団愛知教会、1996
8. 『四日市教会百年史—1890 年～1990 年』井柳福次郎[編集著者]、日本基督教団四日市教会 1990
9. 『戦時下の田辺教会』(田辺教会史, 2, 1937 年-1946 年) 田所双五郎著、日本基督教団田辺教会 1985
10. 『新しい事に向かって』日本基督教団田辺教会 1985
11. 『日本基督教団河内長野教会八十年史—1905-1985』日本基督教団河内長野教会長老会 1985
12. 『日本キリスト教団愛隣教会教会創立百年記念文集』日本キリスト教団愛隣教会 1984
13. 『日本基督教会大阪西教会百年史』日本基督教会大阪西教会 1984
14. 『日本基督教会新宮教会百年史—1884-1984 年』日本基督教会新宮教会 1984
15. 『大阪東教会百年史』日本基督教団大阪東教会 1982
16. 『日本基督教団和歌山教会 100 年史—第 2 世紀への歩みの糧として』日本基督教団和歌山教会 1980

17. 『明治初期の紀南キリスト教』(田辺教会史, 1 1881年-1886年) 田所双五郎筆、日本基督教団田辺教会 1974
18. 『創立八十五年史』武田瑛四郎序文、日本基督教会大阪西教会 1964
19. 『八十年史、日本基督教団大阪東教会』日本基督教団大阪東教会 1961
20. 『日本基督大阪東教会五十年史』日本基督大阪東教会 1931

4 療養所内のキリスト教会について

各療養所には、宗教地区があり、29 教会（2020 年以降、コロナ下さらに減の可能性あり）聖公会 6、カトリック 12、日本基督教団 3、単立 6 新生基督教会 1 キリストの教会 1、合わせて 29 の教会が存在する。

| | 療養所名 (設立年) | 数 | 教会名（）内は教派、数字は設立（発足）・ 献堂年など |
|---|-----------------|---|--|
| 1 | 松丘保養園 (1909) | 3 | 松丘聖生会（単立）1920年発足、松丘聖ミカエル教会（聖公会）1912年発足、松丘カトリック愛徳会（1957年献堂） |
| 2 | 東北新生園 (1938) | 3 | 新生園伝道所（日本新生基督教会）新生園開所と同時に開拓伝道、キリスト教信交会（単立）1962年発足、カトリック新生園教会 1950年発会 |
| 3 | 栗生楽泉園 (1932) | 2 | 聖慰主教会（日本聖公会）1939年献堂、草津カトリック教会 1956年発会 |
| 4 | 多磨全生園 (1909) | 3 | 秋津教会（単立）1919年発足、日本聖公会聖フランシス・聖エリザベツ礼拝堂 1947年発足、カトリック愛徳会 1930年発足 |
| 5 | 駿河療養所 (1945) | 2 | 神山教会（日本基督教団）1951年発足、駿河カトリック教会 |

| | | | |
|----|-----------------|---|--|
| 6 | 長島愛生園 (1930) | 2 | 長島曙教会（単立）1931年発足、ロザリオ教会 (カトリック) * |
| 7 | 邑久光明園 (1938) | 1 | 光明園家族教会（日本基督教団）（元外島家族教 会）1912年発足 |
| 8 | 大島青松園 (1909) | 2 | 大島靈交會（単立）、大島カトリック聖心使徒會 1950年聖心使徒會発足 |
| 9 | 菊池惠楓園 (1909) | 2 | 菊池黎明教会（日本聖公会）1913年黎明会發 足 惠楓園カトリック暁星会 1953年獻堂大正初 期會員3名で創立。 |
| 10 | 星塚敬愛園 (1935) | 2 | 恵生教会（単立）1935年発足、星塚カトリック教会 暁の星会 1949年発足 2020年閉会 |
| 11 | 奄美和光園 (1943) | 2 | 名瀬教会 和光伝道所（日本基督教団）1948年發 足、ダミアノ教会（カトリック和光園教会）1953 年創立 |
| 12 | 沖縄愛樂園 (1938) | 2 | 沖縄祈りの家教会（日本聖公会）1915年発足、愛 樂園聖フランシスコサベリオ教会（カトリック） 1970年獻堂 1955年二人の受洗者を機に教会名愛樂 園聖心の使徒會の名称で出發し 1970年に改称 |
| 13 | 宮古南靜園 (1931) | 3 | 南靜園キリストの教会（聖公会）1962年獻堂、南 靜園聖ミカエル教会 1959年発足、イエズスの聖 心教会（カトリック）1962年獻堂 |

*療養所によっては上記以外にも少数の他教派信徒がいる。

好善社HP (<https://kozensha.org/>) を参照

療養所内教会信徒の信仰がよくあらわされていると思われる詩を記す。

5 療養所教会に関わりも持った牧師 河野進（1904–1990）の詩

「読む」

目が見えなくなれば点字を読み
指先がまひすれば唇で読み
それも利かなくなれば舌で読み
舌が使えなくなったら
きっと新しい方法をさがすであろう
ハンセン病患者が聖書に取り組む執念と熱愛を見て
わたしはどのように読んでいるか

『河野進詩集「母」』 聖恵授産所、1975年

「病まなければ」

病まなければ 捧げえない祈りがある
病まなければ 信じ得ない奇蹟がある
病まなければ 聴き得ない御言がある
病まなければ 近づき得ない聖所がある
病まなければ 仰ぎ得ない聖顔がある
おお 病まなければ
私は人間でさえもあり得なかつた

河野進詩集『祈りの塔』河野醫院、1949年、74–75頁

日本に派遣された宣教師（フォレスター、ディル、スタッツ各師）の意義

東小金井教会 牧師 関 伸子

はじめに

2013年度教職者試験の歴史神学の課題は「日本に派遣された宣教師（フォレスター、ディル、スタッツ各師）の意義を論ぜよ」である。小論はこれを受けて、第二次世界大戦後、カンバーランド長老教会の第二期海外伝道の始まり、3人の宣教師各自の働きについて各種資料を基に調べ、3人の宣教師の意義について考察する。

小論の基本的な資料は、海外宣教局機関紙である“Missionary Messenger”と宣教年次報告書である“Missionary Auxiliaries”²⁶、また、3人の宣教師が働いた、高座教会を初めとする日本中会の諸教会の記念誌を二次資料として用いた。

1 前史、日本におけるカンバーランド第二期の宣教師

日本におけるカンバーランド第一期宣教師の働きが1877年、弟のJ.B.ヘル宣教師が来日、1878年、兄のA.D.ヘル宣教師来日から始まり、およ

²⁶ “Missionary Messenger”とその中の特集“Missionary Auxiliaries”（「海外宣教補助」、当時、海外伝道を助けるために米国で宣教報告会が行われその報告書がMissionary Messengerに掲載された）から、戦後日本で働いた3人の宣教師に関する記事をベバリー・スタッツ氏(スタッツ氏の連れ合い)が切り抜き、ジェームス・マックレスキー氏(T.C.ストクトン師の連れ合い)が編集、リチャード・マグリル氏が製本し、“Cumberland Presbyterian Missions in Japan 1950-1975 Part 1”, CPC, 1975と“Cumberland Presbyterian Missions in Japan 1950-1975 Part 2”, CPC, 1975の二冊にまとめられた。

そ70年後の1950年、第二期カンバーランド長老教会の宣教師が日本における宣教を再開した。日本基督教団神奈川教区に所属していた高座教会が、1950年にカンバーランド長老教会に加入することによってである。日本基督教団を離籍しカンバーランド長老教会へ加入する当時のいきさつは、高座教会30周年記念誌『ただキリストの導きの中に』に詳しく記されている。

カンバーランド長老教会の海外宣教における新しい歴史が始まった。²⁷

この歴史的意義としては二つの面を持っている。まず、すでに宣教活動をしているコロンビア・香港について3番目の国、日本が与えられた。次に、明治期にカンバーランド長老教会の宣教師J.B.ヘール、A.D.ヘール師らによって紀州・名古屋を中心に伝道がなされ、教会が設立された。しかし日本基督一致教会に吸収されることによって中断されていた宣教活動が全く新しい芽として「カンバーランドキリスト高座教会」(原文ママ)が誕生したということである。²⁸

現在、明治期と戦後のカンバーランド長老教会の働きは、両者間のつながりが全くないという事実によって、別ものとして考えなければならないが、宣教師たちの伝道のスピリットには学ぶべきものが多くある。明治期における働きは宣教師たちの独力ともいえる働きによってであったが、戦後のカンバーランド長老教会の働きは、日本人の伝道者と信徒、そして宣教師とが協力して働きをすすめてきた。

カンバーランド長老教会に加入したことにより、宣教局からの財政的援助を受けるとともに、カンバーランド長老教会所属だったチャップレン・ケ

²⁷ Ben M. Barrus, “*A People Called Cumberland Presbyterians Vol.II*”, Wipf & Stock, 1972, P.507

²⁸ 『あゆみ——戦後カンバーランド長老教会日本宣教をふりかえって——』(以下『あゆみ』) 11頁

リーティス C. クレメンス (Chaplain Cleetis C. Clemens) や軍属として来日していた学校の先生ミス・ジュエル・ヘイグッド (Miss. Jewel Haygood) らの個人的応援を得て、伝道活動は活発になった。しかし、クレメンス師は 1951 年 3 月英国に移られた。そして 2 年後の 1953 年 2 月 20 日、初代宣教師トマス・フォレスター一家を迎えて、本格的なカンバーランド長老教会形成へと歩み出した。²⁹

1. 1 高座基督教会の発端

1945 年 8 月 15 日は、日本が無条件で連合国に降伏した日である。日本は都市といわず農山漁村といわず荒廃の極にあって、絶望と空白と飢餓が街を襲い、現在とは全く事情の違う状況であった。³⁰

それでも神奈川県大和町（現在の大和市）林間は空地があり、戦争中から畑を耕して、食糧自給が行われていた。米軍の進駐が大和市の区域内にある厚木飛行場に 8 月 25 日マッカーサー司令官が占領軍として最初に降下し、日本軍と戦った米海兵隊が占領軍として先ず駐留するということで、住民は大きな恐怖に陥ったのである。かつての軍人や外国に居た人達が次から次へと逃げ出すということもあったが、中央林間に住む、いわゆる知識人を自負する人達は米国人を信頼し、かつての勝利者の如くではないと確信して、説得に努めた。その予想は的中し、幾つかの事件はあったにしても、至極平和な進駐が行われた。³¹

当時、中央林間の小田急線より東側、南林間地区と近接する地区に、元衆議院議員中国在住 20 年という中国通で、幾つかの会社社長であり、アングラ兎普及に非常に力を注いた鷺沢与四二氏という人がいた。この人は敗戦の

²⁹ 『あゆみ』 14 頁

³⁰ 『カンバーランド長老高座基督教会二十年の歩み』（以下『高座教会 20 周年誌』） 11 頁

³¹ 前掲書、12 頁

厳しい現実の中にはあっても、日本の立ち上がりの底力を養うべき時期であるとして、日夜同志を集めて議論を重ねていた。³²

1946年、厚木基地進駐軍のチャプレンであった、チェード・E.ストレート(Chaplain Cleed Straight) 大尉が鷺沢氏を訪ねて、一冊の英文聖書（極小版皮表紙）を置いて行った。³³ そのいきさつは次の通りである。

基地の教会にオルガニストを捜していた進駐軍が、戦争中も宗教音楽の研究を続けていた鈴木次男氏（後に高座教会で長老を務める）のことを、ラテン語とグレゴリオ聖歌の先生、ポール・アヌイ氏から聞きつけ、一台のジープで林間を訪れ、クリスマス聖歌の指導依頼に来た。この時、ストレート師は「林間」という地名を「リンカーン」と結びつけて大変気に入り、この地に福音を伝えたいと願っていることを鈴木氏に話した。鈴木氏はそれを親戚関係にあった鷺沢氏に話し、ストレート師を紹介したのが一冊の英文聖書との出会いとなり、高座教会誕生の基となつた。³⁴

このようにして一冊の聖書が鷺沢氏の手元に届き、それを読んだ知識人の鷺沢氏は大きな感激を受けた。読物もない時にこの聖書は驚異と感動のうちに、読み続けられたのである。この一冊の英文聖書との出会いが、今日の高座教会の発端となつた。³⁵

1. 2 教会設立の機運

教会設立の機運について高座教会30周年記念誌は次のように記す。

³² 『高座教会20周年誌』13-14頁

³³ 前掲書、11頁

³⁴ 『ただキリストの導きの中で カンバーランド長老キリスト教会高座教会三十周年記念誌』（以下『高座教会30周年誌』）39頁

³⁵ 前掲書、14-15頁

鷺沢氏は、そのグループ（鷺沢氏の同志）を招いて聖書をかざして、「戦争をしたことは大きな間違いであったことは、万人が認めて反省している。なぜこんな間違いを起こしたかがこの聖書を読んで初めてわかった。僕達は、キリストを知らなかったからだ。僕達に『クリスチャニティ』がなかったからだ。これから日本が立ち上がって行くのにはクリスチャニティを身につけるよりほかにない。」……荒廃の中にある日本国土と日本人を立ち上がらせるのはキリストの愛を基本にすべきであると、興奮しながら語った。そして、前記グループの人々は、地域社会と共に教会でイエス・キリストによって生き、成長していくことを願い望んでいった。とにかくストレート氏のもたらした一冊の聖書によって、教会設立の機運が高められていった。³⁶

鷺沢氏と5人の同志（当時隣家に住んでいた小説家の浅原六郎氏、洋画家の根岸文雄氏、^{りょうたんじ}小説家の龍胆寺 雄氏、洋画家の田中清隆氏、田中氏の友人で洋画家の爾見信郎氏^{しがみ}）は、毎夜鷺沢氏の家に集い、鷺沢氏は牧師のような口調で講義をした。ストレート師も1、2度訪ねて来て鷺沢氏と話し、鷺沢氏は教会設立の確信を深め、教会設立の希望を語るようになった。5人の同志も異口同音に賛意を表したので、牧師を招聘し、日本基督教団に依頼することとなり、ストレート師に日本基督教団への連絡を依頼することとなった。³⁷

1. 3 高座コミュニティ教会、日本基督教団加入

このように、ストレート師を通じて日本基督教団に連絡がついた。当時、南林間に住んでいた田中清隆氏、鷺沢与四二氏、爾見信郎氏の3人は、神田の美花町にあった賀川豊彦師の事務所に行き、「是非南林間を中心にキリスト教の教会を開設し、伝道をはじめてもらいたい。いずれあの辺は、発展す

³⁶ 『高座教会30周年誌』39-40頁

³⁷ 前掲書、40頁

ることであろうが、私共はあの周辺をキリストの感化による、清潔な土地にしたいと願っているものである。協力をお願ひします。」と申し出た。³⁸ 賀川師は都田恒太郎師に南林間の視察を依頼し、都田師はその地を訪れ、田中氏、鷺沢氏や有志の人々を訪れて歩き、「どんな環境か見て回った……全くの森林地帯である」ことを確認した。田中氏たちは、教会の土地を寄贈し、先ず礼拝をはじめたいと申し出た。³⁹

1946年、秋の深まった雨の日、日本キリスト教団から都田恒太郎・藤田正武両牧師が南林間を来訪、その地で初めて祈りが捧げられた。⁴⁰ 聖靈に満たされた祈りに一同は感動を覚え、更に教会設立への歩みがなされた。その後、賀川師が1回、都田師が2、3回南林間に出て行つて、鷺沢氏宅で礼拝をもつた。その頃、賀川師・都田師は多忙を極めており、毎日曜ごとに、南林間へ出かけることが困難だった。その為、伝道者を探すことが急務であった。⁴¹ 銀座教会の三井 勇師が都田師に「吉崎忠雄師が中国から引き揚げてきたが、父に似て開拓伝道に適任であるから、彼を働かせたい」と提案して吉崎師を招聘することに決めた。吉崎師の父親も牧師でメソジスト教会時代に東京部長をしており、その前に各地の開拓伝道を始めた有名な人だった。⁴²

同じ年の12月25日、鷺沢邸で鷺沢氏をはじめとする有志でクリスマスを祝った。讃美歌は「聖しこの夜」しか歌えなかつたが、近所から集まつた人で家は一杯となり、琴を持ち出し、三味線が出て、隠し芸大会となつてしまつた。この様な教会の常識をはずれた祝会が高座教会の発端となつた。この祝会に高座教会初代牧師となつた吉崎師も参加していた。⁴³

³⁸ 『高座教会30周年誌』34頁

³⁹ 前掲書、34頁

⁴⁰ 『高座教会30周年誌』40頁

⁴¹ 前掲書、34頁

⁴² 前掲書、35頁

⁴³ 『高座教会30周年誌』40頁

1947年1月19日、後に教会員となった爾見信郎氏の12畳のアトリエで、吉崎師司式の下に最初の礼拝が行われた。⁴⁴ 次に教会の名称についてどうするかが問題となつた。「鷺沢氏を中心例の六氏が話し合いをする中『高座』という名にまず心ひかれる。それは『高座』とは『たかみくら（高御座）』であり、神が高く座していただぐのに適當ということ、次に『教会は地域の人々の心の寄り所でなければならない』との願いから『日本基督教団 高座コミュニティ教会』とすることに決定した」。⁴⁵ この年の6月27日、人々の切なる祈りは人智をはるかに越えて実現となつた。彼らは「高座コミュニティ教会 建設地」という看板を、与えられた敷地に建てた。「何とか礼拝堂を与えて下さい」と、全員礼拝の中で、集会の中で祈りを捧げ、この地域の人々が地下足袋のままで礼拝できる小さな掘立小屋であつてもよいと素朴な願いを続けた。それにはまず敷地が必要だった。それが現在の所有地二千坪である。⁴⁶

広大な土地を与えられた「高座教会」の次の課題は、礼拝堂の建設であつた。1948年5月2日、礼拝堂建設予定地で教会堂建設資金獲得と伝道を兼ねたバザーが開催され、大盛況であった。⁴⁷ この後、同年に礼拝堂建設、翌1949年に日本基督教団高座基督教会宗教法人を設立、そして1950年、日本基督教団を脱退し、カンバーランド長老教会に加入することとなる。⁴⁸

1. 4 礼拝堂建設

1948年3月、アメリカ・メンフィスに本部を持つ「カンバーランド・プレスピテリアン教団」(当時の日本での呼称) 所属の米軍のチャプレンであったクレ

⁴⁴ 『高座教会 30周年誌』41頁

⁴⁵ 前掲書、41頁

⁴⁶ 前掲書、42頁

⁴⁷ 『高座教会 20周年誌』31頁

⁴⁸ 『高座教会 30周年誌』217頁

メンス師がしばしば高座教会を訪れた。座間米陸軍基地チャップレンとして配属されていたクレメンス師は吉崎師に日本の教会を助けたい旨を申出た。吉崎師は教会で役員会を開いた。役員会は喜んでその好意を受けることを決議した。ここに初めてカンバーランド長老教会と高座教会は深い関係を持つこととなった。⁴⁹

1. 5 日本基督教団退団、カンバーランド長老教会へ加入

礼拝堂（クレメンスホール）の建設は、チャップレン・クレメンス師の絶大なる援助があつて完成された。建設資金の多くはクレメンス師個人の努力で援助されたもので、海外宣教局はクレメンス師に前後 22 回に亘って、総建築費の 3 分の 1 に及ぶ金額 (\$1400) と吉崎師の謝札を献金した。⁵⁰ 同師は、時間のある毎に教会を訪れて激励したと伝えられる。創立早々の高座教会にとって、幾多の困難を克服する途上にあって、同師の物心両面に亘る援助は大きな力でありまた感謝であったと当時のことを記した記念誌は伝える。⁵¹

当時の日本基督教団との関係では、「分担金は毎年納入しているが、ほとんど教会に対する援助は、期待すべきものもなく、役員は失望している時期でもあった」。⁵² そこに「クレメンス師より、カンバーランド・プレスビテリアン教団の話を聞く事になった。同教団はアメリカでは大きな教団ではないが、80 年前和歌山県全域と大阪に伝道し、後に日本基督教団教会に加入了カンバーランド・プレスビテリアン教団であったことを聞かされた。クレメンス師は、(高座教会が) 同教団に加入することによって、宣教師を日本に派遣して、高座教会を中心にして、その後の伝道活動に極力援助することを

⁴⁹ 『高座教会 20 周年誌』 35 頁

⁵⁰ Minutes of the General Assembly, 1950, P. 111

⁵¹ 『高座教会 20 周年誌』 47-48 頁

⁵² 前掲書、47 頁

申し出た。⁵³ 協議の結果、高座教会は日本基督教団を脱退し、カンバーランド教団に加入することを決定した。1950年8月、当時長老職にあった田中清隆氏が、横浜市紅葉坂教会を訪問し、日本基督教団神奈川教区長平賀徳三氏に退団の意志を伝え、退団の承認を得た。⁵⁴

1950年11月、正式に「カンバーランド・プレスビテリアン教団 高座基督教会」となり、日本唯一の同教団の外国宣教局太平洋教区（在カルフォルニア）に所属することとなった。⁵⁵

2 トマス・フォレスター師の働き

2. 1 来日まで

フォレスター師はジョージ・A.フォレスターの息子で、アーカンソー州で生まれた。後にテネシー州メンフィスに引っ越しして、教会で父と同様、長い間、長老として仕えた。フォレスター師は手紙に次のように書いていている。



T. フォレスター宣教師ご夫妻

父方も母方もクリスチヤンの家庭に生まれ、両方の家族は教会で奉仕した。わたしは毎日、益々、このことの良さが分かり、わたしが何者であるか、何が良いことであるかということをクリスチヤンホームで教えられた。⁵⁶

1943年、ベテル大学を卒業し、1947年、テネシー州ナッシュビルにある

⁵³ 『高座教会 20周年誌』48頁

⁵⁴ 『高座教会 30周年誌』64-65頁

⁵⁵ 『高座教会 20周年誌』48頁

⁵⁶ Thomas Forester, 'Missionaries to Japan', 'The Missionary Messenger', CPC, December 1952, P.4

ヴァンダーヴィルト大学神学部で学位取得。テネシー州マーティン（Martin）、テネシー州ナッシュビル近くのグッドレットスヴィル（Goodlettsville）とマウント・ハーマン（Mt.Herman）、テキサス州オルネイ（Olney）の教会で牧師として奉職した。オルネイ在住の間、ライオンズクラブと消防署のチャプレンとしても仕えた。フォレスター師の米国での牧師としての経験は短かったが、一生懸命に働きたいという意欲を示した。教会で、天の父に根差した深い忠誠を示し、大きな責任を受けた。

宣教局は日本に宣教師を派遣することを要請した。フォレスター師夫妻は日本における宣教師の必要性を知った時に、非常に関心を持っていたようであるが、日本に行くことが彼らの召しであるとは感じていなかった。

1952年に行われた“Missionary Auxiliaries”で日本宣教の必要と機会が提案された時、それはフォレスター師夫妻に向けられているようであった。彼らの召命は日本宣教に仕えることへと変えられた。

この頃、フォレスター師は次のように証ししている。

私は言葉と靈を用いてキリストを説く。日本の人々の中からリーダーを確立し、彼らが教会を始めることを手伝うのがわたしの日本宣教の目的である。キリストの力は彼らを勝利へと導くのに十分です。わたしたちは、可能な限りあらゆる方向に種をまきます。⁵⁷

フォレスター師夫妻は日本宣教に仕える召しに応え、日本に行く準備が整えられた。幼い子どもたちを連れて行くことには多くの困難があったであろう。

2. 2 日本での働き

1953年にフォレスター師家族が来日する。高座教会記念誌で次のように

⁵⁷ Thomas Forester, Ibid.,P.5

紹介されている。

本部最初の宣教師として、トマス・フォレスター師は2月20日横浜港に入港のプレジデント・クリーブランド号にて来日した。教会員多数出迎えて、夫人（フラン）及びゲイリー（7才）、ティモシー（3才）とケイ（生後6ヶ月）という一家に初会見をした。⁵⁸

当時、高座教会は教勢が伸びていた。毎週、礼拝にはおよそ50家族で礼拝を守っていた。教会学校には200人以上集い、教会は幼稚園を運営し、地域奉仕活動が必要とされていた。このような宣教の広がりから宣教師の働きが必要とされた。

宣教師から見た日本は常にキリスト教宣教の難しい国であった。古い文化、先進の文明、非常に高い識字率が本質的にキリスト者の信仰と対立するところがあり、それがフォレスター師の働きを複雑で困難ではあるがやりがいあるものとした。⁵⁹ フォレスター師は手紙に次のように書いている。

日本は、おそらく宣教が最も難しい地であろう。日本人は、習慣の変更を嫌う。日本人は国家主義的で、排他的である。そして、日本人以外の者をコミュニティに迎え入れない。コミュニティの生活は家族より問題がある」⁶⁰

1953年7月5日 クレメンスホール増築感謝礼拝に、フォレスター師が「彼を囲みし二人の囚人」と題して最初の説教を行った。礼拝103名、夕礼

⁵⁸ 『高座教会20周年誌』58頁、なおご家族の氏名は、『あゆみ——40周年記念誌—— カンバーランド長老キリスト教会日本中会』(以下『中会40周年誌』) 49頁 による。

⁵⁹ ‘Japan-1953 The Mission Staff How it grew’, ‘The Missionary Messenger’, CPC, September 1966, P.10-11

⁶⁰ ‘Japan-1953 The Mission Staff How it grew’, *Ibid.*, P.11

挙 14 名出席と記録されている。⁶¹

1955 年 2 月 25 日、渋沢で家庭集会がもたれる。その後、渋沢伝道所が開設される。

1956 年 1 月 26 日 フォレスター師は渋沢教会を建てるための土地を探しはじめた。その当時のことをフォレスター師は『渋沢教会 25 周年の歩み』の中で次のように記している。

それは町を見おろす、美しい場所で駅から歩いてわずか五分のところです。このことは日本においては非常に重要なことです。なぜなら交通はほとんど電車やバスによっているからです。⁶²

六月のはじめごろ私達は秦野市役所へいって何と二十七回も私の名前を署名したのです。……一九五六年八月二十四日に私達は石原さんにお金を払うことができ、教会の建物の設計をはじめました。……この教会に使われた材木の多くは一九五七年二月に私達が製材所に運んだ木材でした。⁶³

「私達は本部に幼稚園舎をたてるために援助を求めました。(一九五八年) 十一月十七日、二千ドルが承認され、最初の千ドルを一九五九年の春に入手しました」⁶⁴。

実際の建築は(一九六〇年) 八月三十日からはじまり、軍のブルドーザーが土地をならしはじめました。八月三十一日に私達は集まって土台を掘りはじめました。⁶⁵

私達の幼稚園建設がはじまってから長い時がたち、多くの事がおこりま

⁶¹ 『高座教会 20 周年誌』 60 頁

⁶² 『カンバーランド長老キリスト教会 渋沢教会二十五年の歩み ——神の恵みの継承のために——』(以下『渋沢教会 25 周年誌』) 24-25 頁

⁶³ 前掲書、25-27 頁

⁶⁴ 前掲書、29 頁

⁶⁵ 前掲書、30 頁

したが、一九六一年九月十七日午後三時……『フォレスター館』として私達はその建物をささげました。ディル先生が朝の礼拝で説教しました。その地域の人々も献堂式のためにやってきました。私達の子供達の訓練のために美しい場所が与えられたのですから、『私達の労苦がむだになることはない。』（コリント第一 十五章五十八節）ということができます。⁶⁶

1957年

吉崎師は渋沢教会で開拓伝道を始めるために高座教会を辞任した。1955年に中会神学生となった生島陸伸師が高座教会に招聘された。フォレスター師は教会の近くに建てた宣教師館に住み、高座教会敷地内にクリスチャン・センターが建設された。⁶⁷

その年の9月29日、渋沢教会が正式に教会として組織された。その当時、教員は12名であった。フォレスター師は、しばらくの間、南林間と渋沢を行き来して、高座教会と渋沢教会で説教奉仕をした。宣教は困難であったが、10名が洗礼を受けた。更にクリスマスに7名が洗礼を受けた。その年内に教員が23名となった。⁶⁸

1958年

5月25日、渋沢教会献堂式。この年の8月10日に生島師按手、高座教会において牧師に就任した。

1959年

1月、渋沢教会において教会付属幼稚園開設が具体化する。名称を「渋沢教会付属しらゆり園」とし、約40名（1年保育、2年保育）の園児を募集。幼稚園建設のために隣接地を借りる。

⁶⁶ 『渋沢教会25周年誌』31頁

⁶⁷ Paul Schnorbus, 'Missionary Auxiliaries', 'The Missionary Messenger', CPC, February 1963, P.23

⁶⁸ 'From Japan', 'The Missionary Messenger', CPC, April 1959, P.34

3月29日、宗教法人カンバーランド長老渋沢基督教会設立。

4月4日、渋沢教会付属しらゆり幼稚園第1回入園式。

1961年

1月、希望が丘伝道所が生まれる。

2月、フォレスター師は、米国本部の宣教局が主催する”Missionary Auxiliaries”（宣教補助プログラム）に出席して、「日本における宣教」というテーマで礼拝、活動報告が行われ、活動報告書の中で、「我々の日本での働き」という副題で次の8項目を記している。

- (a) 1953年に日本に遣わされ、そこで責任をもって宣教をしている。高座教会の近くに家族で住み、間もなく二人目の宣教師、トルバート・ディル師が遣わされる。
- (b) 高座教会の更なる土地購入と建築を助けた。2000坪の土地に松の木を配置した。
- (c) 指手を受けている吉崎忠雄師を高座教会のフルタイムの牧師として雇用した。吉崎師は1957年まで高座教会で奉職し、その後渋沢教会で仕えた。
- (d) 神学生の生島陸伸師を雇用し、後に高座教会員と結婚した。1958年、生島師は指手を受け高座教会の牧師となる。
- (e) 高座教会と渋沢教会の幼稚園に資金援助をした。高座教会の幼稚園には103名の園児がおり、渋沢教会の幼稚園には30名の園児在籍している。
- (f) クリストチャン・ソーシャルワークのために壁谷氏 (Miss. K. Kabeya) のスポンサーとなった。これはクリストチャン・センターの新しい働きであり、Japan Church World Service と将来共に働きたいと願っている。
- (g) 高座教会の敷地内にクリストチャン・センターを建設した。このセン

ターは日本における宣教活動の本部となる。

- (h) 小貫隆久氏、朝山正治氏、竹入悦夫氏、三人の神学生を金銭的に援助する。彼らはフルタイムの神学生で週末は教会で奉仕する。
- (i) 渋沢の街を見おろす場所に土地を購入し、2400sq（約 66.7 坪）の礼拝堂建設。1400sq（約 38.9 坪）の幼稚園舎を建設中。
- (j) 1700sq（約 47.2 坪）のショップ建設を助けた。このショップは建設資材を置く場所として利用する。
- (k) 高座教会の現在の建物を整える援助をした。もとの建物に加えて 8 つの建物がある。バーミングハム中会の援助により浄化槽と水洗式トイレを教会に設置した。これは幼稚園と教会に有益である。
- (l) 教会の子どもたちがより楽しいクリスマスを過ごすために援助した。毎年 100 ドルをこのために費やした。クリスマスパーティーには 600 から 800 人の子どもたちが集まる。センターは牧師や神学生に様々な方法で援助をした。⁶⁹

日本における宣教は牧師、宣教師の働きなのではなくキリストの働きである。キリストの日本における働きなのではなく、世界における働きなのである。米国での宣教は世界中で神の国の働きに影響を及ぼす。そして、わたしたちが日本でしていることは、ブラジルにも種をまいている。わたしたちの言葉は異なり、生活水準は等しくない。しかし、永遠の真実がある。それは、「あなたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選んだ」（ヨハネ 15:16）、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」（マタイ 28:19）である。日本の教会は人々がキリストの弟子となるために宣教を続けなければならない。

わたしたちは日本に大きな投資をした。多額の資金を用い、人々の働き

⁶⁹ Thomas and Fran Forester, Missionary Auxiliaries', *'The Missionary Messenger'*, CPC, February 1961, P19-20

と奉仕を要した。宣教のニーズは大きく資金はもっと必要だった。わたしたちは教会を築く助けをなし、自分達が成したこと忘れ、神の栄光に帰した。教会が成長し、キリストの栄誉ある証しとなるのはわたしたちが成すことではなく、キリストと聖霊が日本の素晴らしいキリスト者たちと共に働いてくださった証しなのである。⁷⁰

1961年

1月1日 希望が丘伝道所 最初の主日礼拝が石橋宅で行われる。1951年に高座教会員の石橋正治・わか夫妻の家（東希望ヶ丘20）に吉崎師と生島師が訪れ、高座教会の一集会として家庭集会を始めてから10年後のことであった。⁷¹

4月2日イースター 希望が丘伝道所においてフォレスター宣教師により最初の洗礼式が行なわれ、最初の受洗者が誕生した。

4月7日、竹入悦夫・寿美代夫妻、希望が丘伝道所専任になる。

5月7日、国立のぞみ伝道所、礼拝と教会学校開始、朝山神学生派遣。

7月、フォレスター師は米軍上瀬谷通信隊でルーテル教会のチャプレンJ.ピーターソンと親交があったことから、米軍上瀬谷基地教会の「教会を建てようキャンペーン」で集められた献金（2400ドル）を、希望が丘教会建設のためにいただくことが決まり、間もなく現在地に土地が購入された。

さらにカンバーランド本部からの建設資材費援助（180万円相当）が贈られて、鉄骨平屋の礼拝堂建設が始まった。フォレスター師は建築業に造詣が深く、当時宣教師館に勤務していた小山末吉長老を助手としてほとんど作業を二人の手作りで進めた。その頃のことを家庭集会の場所を提供された石橋家の長男、石橋正彦兄は希望が丘教会の記念誌で次のように記している。

⁷⁰ Thomas and Fran Forester, Ibid., P23

⁷¹ 『あゆみ』、7頁

その頃私は大学生でしたが、先生と小山さんがやっている大工仕事などを手伝いしたり、また当時わが国では珍しかった壁のレンガ積みなどもやりました。とくに壁や屋根裏に入れる断熱材の貼り付け作業は大変でした。当時の断熱材は細かいガラス繊維を綿のようにしたものだったので、ちくちくするガラス繊維のかけらのようなものが汗だらけの身体に細かく張り付いてしまい、痛かったり、痒かったり、それも懐かしい思い出です。

残された写真を見ると、六三年のイースター礼拝ではまだ壁材が貼っていない礼拝堂で、基地から頂いたパイプ椅子や壁材に座っています。六三年のクリスマス礼拝の写真では礼拝堂は完成し、椅子も揃った長椅子になっていますが、礼拝堂の後ろに二階建ての牧師館（？）が建築途上で写っています。そして六四年三月二二日に献堂式を迎えました。⁷²

9月3日 渋沢教会は「フォレスター館」を献堂した。⁷³ 当時、渋沢教会の教会学校には150名以上のこどもたちが集まり7名の教師の基で賛美歌を歌い、聖書の話を聞いた。⁷⁴

1961年12月、希望が丘教会用地売買契約が成立した。Y氏との間で、土地2百坪を本部援助金11250ドル（4百万円）で購入契約が行われた。⁷⁵

希望が丘教会建設時におけるフォレスター師のことを次のように紹介している。

フォレスター師の腕前はたいしたものであったとだれもが言う。宣教師の指揮で、高座教会、米国の有志、伝道所のメンバー、特に求道者の方々

⁷² 『希望の虹——五〇周年記念誌—— カンバーランド長老キリスト教会 希望が丘教会』6頁

⁷³ 『あゆみ』、5頁

⁷⁴ ‘Japan’, “The Missionary Messenger”, CPC, May 1962, P.41

⁷⁵ 『鐘の音にのせて——30周年記念誌—— カンバーランド長老キリスト教会 希望が丘教会』96頁

も、労働奉仕を捧げ、土台造り、レンガ積み、床から屋根まで、壁から窓天井まで、約二年掛かりで造り上げていったのである」。⁷⁶

フォレスター師の人柄については、『あゆみ』で次のように紹介している。

フォレスター宣教師は、体も声も人一倍大きく、日本語はさほど上手ではありませんでしたが、押しが強く、推進力のある宣教師でした。ついでに言えば、長老では、高座の田中長老が大変な手腕家でした。少しオーバーな言い方をすれば、フォレスター宣教師と田中長老は、カンバーランドのマッカーサーと吉田茂さんであったのかもしれません。⁷⁷

12月24日 国立のぞみ教会で始めて聖餐式が行われた。この教会は急速に成長した。1955年、フォレスター師夫妻が日本語を勉強していた時に日本のキリスト者フェローシップが形成され、そこで、フォレスター師夫妻は九州の別府の教会出身で国立に住んでいた青柳賢二・素子夫妻と出会った。青柳夫妻は、家で礼拝をしたいと希望していたため、フォレスター師と高座教会の牧師である生島師は青柳夫妻を訪ね、定期的にこの家を訪れる約束した。当時神学生だった朝山師がこの礼拝を任せられた。1961年12月、礼拝出席者は22名、教会学校出席者は39名だった。ディル師も時々ここでの礼拝で説教をした。土地が10,000.00ドルで購入された。建物には4,000.00ドルの費用が必要だった。米国のカンバーランドの青年達からの献金がこの土地と建物購入のためにささげられた。⁷⁸

⁷⁶ 『あゆみ』7頁。

⁷⁷ 『あゆみ』9頁

⁷⁸ Tolbert Dill, 'Preparation For Mission Work in Japan', "The Missionary Messenger", CPC, February 1963, P.12

1963年

フォレスター師は“New Frontiers in Japan”という題の日本宣教に関する記事を書き、その中で、宣教が困難な日本において家庭伝道が有効な手段となっていることに言及している。また当時の神学生は学業をしながら開拓伝道へと遣わされたことに言及し、学業と牧会の両方を担う大変さにも触れている。高座教会、希望が丘教会、国立のぞみ教会はそのような神学校で学んでいた青年がそれぞれの教会に派遣され、教会の歩みが始まったことを伝えている。

1964年5月16日、淵江淳一師・千代子夫妻（淵江師は当時、日本基督教団の牧師）、カンバーランド長老教会の礼拝に巡回出席を始めた。その後、7月26日に小金井市で家庭礼拝を開始する。12月23日には子どもクリスマス会を開く。続いて教会学校を開始した。

1964年5月17日、10年に及ぶ在日中、教会のため大きな働きをされた、トーマス・フォレスター師が任期を終え、後任のトルバート・ディル師に一切をゆだねて帰国されるので、同日の高座教会主日礼拝の説教をフォレスター師にお願いし、11時30分からホールで送別の茶会を催して感謝の意を表した。

5月23日、フォレスター師一家は午後9時の羽田発パンアメリカン機で帰国。高座教会員多数が見送った。

同師は高座教会礼拝堂のための本部への援助資金の尽力はもとより、渋沢教会、希望が丘教会を建設され、国立のぞみ教会の建設の基礎を作る、大きな働きをした。⁷⁹

1987年8月27日、召天。

⁷⁹ 『高座教会20周年誌』107頁

2. 3 意義

1958年から1994年まで高座教会の牧師として仕えた生島師は、フォレスター師のことを”The Memories of the Missionaries”と題する記事（2008年、カンバーランド長老教会の総会が初めて米国外（日本）で開催された時に、総会の中で3人の宣教師のことを話すように依頼されて書いた原稿の3頁⁸⁰に、次のように記している。

フォレスター師は人々を信用し、人々は彼を信用して、助けたいと思わせることのできる人であった。ある日、彼はわたしの部屋に来て、「材木を教会の庭に置かせてもらえますか？」と尋ねた。わたしは「はい」と答えた。材木を運ぶトラックが来たので門に出て、目を疑った。7~8台のトラックに松の木の材木が積んであったのだ。これらを購入したら高額の代金を払うことになったであろう。わたしがフォレスター師に「この材木をどうするのか」と聞くと、彼は「新しい教会を建築するために用いる」と答えた。木材を運んで来た若い軍隊によって木材が教会の庭の隅に積まれた。フォレスター師は明るい笑顔で彼らに感謝のことばを述べた。

この記事から分かるように、フォレスター師は教会の礎を築くことに尽力した。この木材は後に高座教会の幼稚園と希望が丘教会の基礎を築くために用いられた。

高座教会30年記念誌の「30年を省みて憶い起す人達」はフォレスター師のことを次のように記す。

最も実行力、特に教会建設に特別な才能を発揮された牧師であり、クレメンス師に次いで高座教会で働いて下さった忘れ得ない人である。クレメンスホールの増築……。希望が丘教会、渋沢教会もその当時フォレスター

⁸⁰ この原稿は日本語で書かれ英語に訳された。現在、日本語の原稿は生島師の手元に残っておらず、英訳がインターネットの検索で見つかった。

師によって建設された。⁸¹

米軍のブルドーザーのようなアメリカ指導型の宣教師であったとも表現されている。⁸²

また渋沢教会の記念誌には「フォレスター先生の思い出」と題して、次のような記事が寄せられていた。

異国である日本での宣教の業の背後には、ご夫妻の涙で綴られている頁がたくさんあろうと思います。でも、説教を通して知り得たフォレスター先生は、誠に楽天的な方であったと思います。単純明解でした。即ちイエス様は私のために十字架にかかるて下さったのです。だから、私はイエス様を救い主としてうけ入れるのです、と。時々口になさっていた事のひとつに、日本人は、とても理屈っぽい。イエス様をうけ入れるのにどうしてそんなに難しく考えるのですか?……と。

“教える事は、共に希望を語る事”(レイ・アラゴン)と、ある月刊誌の引用を思い起しますが、将にフォレスター先生は復活の希望を直接私たち日本人に語り続けられました。先生が日本に、まかれた福音の種を大切に育てなくてはと、心をあらたにしております。⁸³

フォレスター師は戦後日本において、一代目の宣教師として、偉大な指導力を発揮し、教会を言葉通り建てるために、宣教師として、また大工の息子として大工仕事の業を用いて高座教会、渋沢教会、希望が丘教会の礎を築いた。様々な人の文章に記されていることから、フォレスター師のダイナミックな人柄はまさにカンバーランド日本中会草創期にふさわしい宣教師であ

⁸¹ 『高座教会30周年誌』70頁

⁸² 『あゆみ』15頁

⁸³ 『主を求めよそして生きよ カンバーランド長老キリスト教会渋沢教会』45頁

ったと言ひ得る。伝道の進め方として、家庭集会を大切にしたことは後の開拓伝道につなげられた。日本で人々に愛され、カンバーランド日本中会の教会の基礎を築く働きに貢献したことが、フォレスター師の働きの最も大きな意義であると考える。

3 トルバート・ディル師の働き

3. 1 来日まで

ディル師は、1934年5月13日、カルフォニア州サンタアンナで生まれた。生後15ヶ月の時、ディル師の家族はアーカンソー州に引っ越しした。ディル師はカンバーランド長老教会の牧師の息子である。ディル師はポーター中会(Porter Presbytery)のカールクスヴィル教会(Caulksville Church)で信仰生活を送り⁸⁴、

1952年、カンバーランド長老教会の青年大会で牧師になる決意をした。その後、ベテル大学とカンバーランド長老神学校 (Cumberland Presbyterian Theological Seminary) を卒業した。お連れ合いのジェーンもベテル大学で学んだ。日本に遣わされる前、彼らはミズーリ州カンザスシティに住んでおり、ディル師はそこで第一カンバーランド教会の牧師をしていた。

1961年の総会で、トルバート・ディル師夫妻が日本で宣教師として仕えるよう任命された。



T. ディル宣教師ご夫妻

⁸⁴ Thomas H. Campbell, “Arkansas Cumberland Presbyterians 1812-1984 A People of Faith”, Arkansas Synod of the CPC, 1985, P.287

3. 2 日本での働き

ディル夫妻は1961年7月24日、サンフランシスコから渡航し、8月7日に横浜に到着した。彼らの緊急課題は東京で語学学校に行くことだった。⁸⁵ ディル師一家は来日後、国立市の宣教師館に住み、国立のぞみ教会（当時は伝道所）で礼拝に出席した。

ディル師は局への最初の手紙の中で幾つかの点に触れている。その一部分をここに紹介する。

わたしは神が日本においてどのように働かれているか、あるいはここでキリスト者にどのように働いて欲しいと願っておられるかが分からぬ。私は、我々がどのようにアメリカで仕事をしたかという多くの先入観に限定せず、米国での実績を日本に移行するということのないことを望む。わたしは主にあって信仰を持ち、忍耐強く、結果を神に委ね、しかし同時に、神が我々がなすべきことすべてのことに信仰と情熱を持つことを与えてくださることを希望する。⁸⁶

ここでディル師は大切なことを述べている。それは、ディル師は米国カンバーランド教会で経験した牧会や組織形成をそのまま日本で行うのではなく、日本における宣教を、神に祈り、神が示される事柄に従事してゆくという意志表明をしていることである。

1962年、ディル師は国際基督教大学の語学スクールに登録して日本語を学んでいたが、日本語は非常に難しく、落胆していた。2年間は日本語の勉強に多くの時間を費やしたが、日本語を書くことは不可能に思え、話すことも難しかった。しかし、ディル師夫妻はその後、日本語に精通して外国人の

⁸⁵ James W. Knight, “*Hearth and Chalice – The Story of Cumberland Presbyterian Women and World Mission*”, Frontier Press, 1980, P.212

⁸⁶ James W. Knight, P.213

ための日本語弁論大会で優勝するという実績を持つ。

ディル師は神奈川県とは違うところにミッション・ポイントとしてある東京都国立市と東小金井市にある二つの伝道所の宣教の働きを大切に思ったようで、宣教にふさわしい土地が与えられるや否や、教会の建設にとりかかった。⁸⁷

1963年2月の *Missionary Messenger* にディル師は日本における伝道の難しさを次のように記している。

日本で働く宣教師は、日本が宣教師にとって最も難しい国であるという印象を持ち、日本のキリスト教の進展が非常に遅いと言う。進展の遅さが絶望につながる。⁸⁸

ディル師はこのように日本における宣教師としての働きに時に絶望感を覚えながらも、忍耐強く日本語を学び、宣教の業に仕えた。この年、希望が丘教会と国立のぞみ教会を設立する働きが進められた。国立のぞみ教会の建設のために1962年に *Vacation Church Schools* から 5800 ドルが捧げられた。⁸⁹

1964年、この年の4月から東小金井の借家を借りて毎週土曜日の聖書研究会が始まった。これに並行して東小金井教会の淵江師は、当時の指導的宣教師ディル師との接触を深めていった。

ディル師は高座教会の30周年記念誌で、「私が高座教会を通して受けた神様の恵みの数々」と題して、メッセージを寄せているのでそれをここに紹介する。⁹⁰

⁸⁷ 『なお、あなたを待ち望む —— 献堂40周年記念誌—— カンバーランド長老キリスト教会国立のぞみ教会』(以下『のぞみ教会40周年誌』)
34頁

⁸⁸ Tolbert Dill, Ibid., P.8

⁸⁹ Tolbert Dill, Ibid., P.10

⁹⁰ 『高座教会30周年誌』差し込み

「私が高座教会を通して受けた神様の恵みの数々」

私達は昭和三十九年六月から昭和四十一年まで、高座教会で皆様と共に仕事をいたしました。この期間、高座教会や生島牧師を通して、神様から数々の贈り物を賜りました。次に書きしるした贈り物については、特に神様へ感謝を捧げたいと思います。

1. 人々がクリスチャンになっていくこと

神様を知らない人びとが神様に導かれていくのです。そして数週間、ないし数ヵ月の期間で、神様と唱和していく人々を目にしました。私達が聞いた証しの中でも、神様がキリストを通していかに自分達を新しい人生へと導いて下さったか、ということを話しておられた方々がありました。さらにクリスチャンとしてその生活の中で成長させられていることも感じることができました。

これらのこととは、いかに神様が人々をクリスチャンとして導き入れられているかということであり、私の今までの体験の中で最も輝かしいものであります。

2. 良い働きをしている小さなグループのこと

当時は約八つの小さな家庭集会がありました。私はこの集会に参加いたしまして、神様がこの集会をこよなく素晴らしいものとして成長させてくださっていることを感じました。

3. 聖霊が聖書に働きかけていること

人々がキリストを信じるように、聖書の言葉を通して聖霊が人々に働きかけていることを見ました。生島牧師は説教の中、又聖書の学びの中において聖書に基づいて、忠実に教えておられました。彼は単なる人間の努力に頼るのではなく、聖霊が聖書を通して働きかけていることにすべてをまかせているのです。人間の努力によってではなく、召し出されているものとして、神様の御業を見ることに対して純粋そのものでした。

4. クリストチャンの親しい交わりのあること

私は当教会で生島牧師や他のクリストチャンの兄弟、姉妹の方々と主に
ある兄弟としての深い絆をもちました。

これは神様からの豊な恵みでした。神様への信仰による共同体は、文
化や言葉の違いにも拘わらず私達クリストチャンに与えられた賜物です。
もし、神様が望まれるなら、私達はこのような共同体が、この世界中に
もっと多く見ることができるでしょう。

二代目宣教師 トルバート・ディル

1967年、テキサス大会の指令により日本に中会が組織された。当初は関東
中会として知られていたが、後に名称を日本中会と改めた。トルバート・ディル
師は再編成された宣教局の世界宣教部の書記として雇用されたため帰
国した。スタッフ師が日本で唯一のアメリカ人宣教師の家族となつた。⁹¹

3. 3 意義

高座教会30年記念誌の「30年を省みて憶い起す人達」では次のように記
されている。

この方の日本語の上手な事は、外人の日本語大会で徳川夢声賞をとられ
たことによっても証明されるが、落語などは本職はだしだった。アメリ
カから頂く手紙も日本語で便りを頂いている。それだけ活動力の強い方で、
信仰面の強さで教会をささえて下さった、日本人牧師のあり方についても
特に厳格でよく統率されたのは、何としても我々にとっては安心感をあた
えられたものである。……カンバーランド教会と高座教会との連絡は完璧
であって、よく応援の効を上げられた忘れ得ぬ人で、目下アメリカで活躍

⁹¹ Ben M. Barrus, “A People Called Cumberland Presbyterians Vol.II”, Wipf & Stock, 1972, P.508

されている。⁹²

ディル師は二代目宣教師として、流暢な日本語を用い、学者タイプの人であったようだ。ディル師は宣教の広がりをもたらすために用いられたと言える。ディル師夫妻は自宅を開放して英語教室を開いた。落語にも親しみ、日本人の心をつかみ日本人牧師のあり方も理解して、米国カンバーランドの宣教局と高座教会の仲介者としてもよき働きをなし、本部から必要な支援を得て、宣教が広がることのために働いたと言える。

4 メルヴィン・D.（バディ）

スタッフ・ジュニア師の働き

4. 1 来日まで

スタッフ師は1936年11月24日、テネシー州タルボットで生まれた。父親はカンバーランドの教会の牧師だった。スタッフ師はペテル大学、カンバーランド長老教会神学校を卒業。1956年牧師接手。1957年、ベバリー・ラスト姉と結婚。3人の息子と1人の娘（ブルース、ケール、ポール、ロバータ）、7人の孫を与えられる。日本に来る前はアーカンソー州ウォーカーヴィルにあるカンバーランドの教会で牧師として仕えた。

1964年の初めに海外宣教局は、スタッフ師夫妻が日本で宣教師として働くことを承認した。スタッフ師夫妻は数ヵ月、日本語を学んだ。

1964年6月にフォレスター師がカルフォニア州フレスノの教会からの招聘を受け、米国に帰国することが公表された。⁹³



M. スタット宣教師ご夫妻

⁹² 『高座教会30周年誌』71頁

⁹³ James W. Knight, P.225

1964年8月に2家族の宣教師が日本に到着した。アメリカで牧会中、カンバーランド長老教会の世界宣教月刊誌「ミッショナリー・メッセンジャー」の初代フォレスター宣教師による日本宣教の記事を興味深く読み祈り求めるうちに、日本への宣教師として立つことの召命が神から与えられた。本部の外部宣教局からは当初、コロンビアの宣教師としての緊急な要請があつたが、3男ポールの出産が予定日より1ヶ月半も遅れた結果、他の牧師がコロンビア宣教師にあてられ、スタッット師は第一希望の日本への出発をじっくり待つことになり、ついにその時が来た。

4. 2 日本での働き

東京オリンピックのあった1964年、メルヴィン・スタッット師の家族がサンフランシスコからプレジデント・クリーブランド定期船で日本に到着した。ディル宣教師の家族と4つの教会から25人の出迎えがあった。スタッット師の家族はディル師の家族に入れ替わり、国立に落着いた。⁹⁴ ディル師の家族はフォレスター師の家族が引き払った南林間の宣教師館に引っ越した。

赴任して最初の2年間はスタッット師が国立のぞみ教会で説教をし、朝山師が通訳をする。こうしてスタッット師の奉仕が国立では礼拝で、東小金井では家庭集会でと毎日曜交互に続いた。おかげで、日本式に座ることも覚えた。英語のバイブルクラスも開いた。⁹⁵ お連れ合いのベバリーは日本滞在中ずっと国立のぞみ教会の教会員であった。

1967年、家族で南林間に引っ越す。生島師の願いにより教会の午後の祈祷会を手伝う。

1968年3月～11月、教区（現在中会）の指示で渋沢教会の担任牧師になり、そこで働く。

⁹⁴ James W. Knight, P.228

⁹⁵ 『のぞみ教会40周年誌』34頁

1971年4月～1973年3月、希望が丘教会で2年担任教師となり仕える。それまで希望が丘牧会をされていた竹入師が辞任され、1973年3月、瀬底正義師就任までの期間であった。

1973年6月～11月、東小金井教会で淵江師が入院され6ヶ月間、この教会において第一回目の担任教師を務める。

1973年12月～1974年5月、渋沢教会において第二回目の担任教師となる。館岡 剛師が召天された後のことであった。

1977年9月～1979年3月、渋沢教会において幼稚園の臨時園長を務める。渋沢教会での働きに関して、スタッフ師は『渋沢教会25周年の歩み』で次のように記している。

すべてのことに教員が私を協力者として受け入れてくれましたので、こつこつと働きました。出来ないことや失敗がたくさんありましたが、皆様の親切と思いやりのある愛をもらったことを感謝いたします。本当に皆様の信仰の進行することと、みなによって実を結ぶことを見せて下さったことが忘れられません。教会が主にある成長がありますようにと祈っております。⁹⁶

1978年3月～1979年3月、栗原伝道所(後のさがみ野教会)で一年、担任教師となる。濱崎 孝師が渋沢教会へ転任したことであり、潮田健治師が1979年4月就任の間のことであった。

1979年5月～1981年12月、成瀬教会において担任牧師を務める。吉崎忠雄師が入院され、1982年1月に香月 茂師就任までの間のことであった。

1983年1月～1985年2月、東小金井教会で第2回目の担任教師を務める。淵江師が定年退職され、1985年3月に萩生田 明師就任までの間のことであった。

⁹⁶ 『渋沢教会25周年誌』33頁

1987年、富士峰山伝道所開所。荒瀬牧彦師が遣わされ、スタッツ師は側面支援牧師として約2年間、毎週土曜日にBuddy Clubという英会話教室を、近くの青少年の家を会場として開き、こどもクラスと大人クラスを教えた。土曜の夕方に、荒瀬師の家で夕食をとった後、大人クラスを開く。「南林間の宣教師館に帰り着くのは夜11時だったのではないか。体力的にもきつい務めだったと思いますが、文句ひとつ言わずに、明るい笑顔で奉仕されました。」と荒瀬師は言う。⁹⁷ この時、スタッツ先生の生徒だった女性からは、今でも毎年めぐみ教会のバザーへの寄付が届き、その娘もBuddy Clubと教会学校の生徒だったが、今は富士で英会話学校の先生をしているということだ。教会で、英語と世界への関心をひらくてくれたことに感謝していると聞く。

1988年 椎間板ヘルニアで東海大学病院入院・同年夏に一時帰国。

1989年 本部宣教局より1990年4月最終帰国決定の旨が伝えられる。⁹⁸ この年12月から各教会・バイブルクラス・料理教室で感謝会が行われた。3月25日、日本中会が主催してスタッツ師夫妻感謝会が行われた。

1990年3月 宣教局責任者マトロック師とブラウン師が事務処理のため来日して、次のことを行った。

1. 宣教師館を売却し、世界宣教の基金を日米双方に設置する。
2. 今後も本部と日本中会はさらに豊な関係を築くことを約束する。
- 3.スタッツ師は帰国後、椎間板ヘルニアの治療のうえ、牧師復帰に備える。

4月17日、成田空港を出発して帰国。帰国後、テネシー州ブランズウイック教会、フロリダ州イーストサイド教会、テネシー州ドレスデン教会で牧会。

2005年8月28日 召天。

⁹⁷ 2013年9月26日、荒瀬牧彦師からのメール

⁹⁸ 『スタッツ宣教師在日25年の歩み』3頁

4. 3 意義

スタッット師について戦後カンバーランド長老教会を振り返る『あゆみ』に次のように記されている。

米軍のブルドーザーのようなアメリカ指導型フォレスター宣教師から、温厚謙遜なスタッット宣教師へのバトンタッチは、現地人指導者の育成という宣教方策の鉄則を踏まえたところの極めて適切なものであったようと思われる。スタッット宣教師の愛と忍耐と祈りに深く感謝しなければならない。⁹⁹

スタッット師は三代目の宣教師として、宣教局からの指示の一つには、中会を充実させるということがあった。その指示に基づき日本で宣教活動をされた。『あゆみ』で次のように述べている。

フォレスター先生の働きを例えで言えば、教会という家（礼拝堂を意味していない）を建てる事。そして皆さんを指導して引っ張っていく働きをされる立場の宣教師だったと思います。ディル先生は家を建てるという働きもありながら、立てられた家の改築といいますか、より整えていく働きです。そのためには、やはりある程度の指導性は必要だったと思います。そして、私の働きはお二人の宣教師が育てられた牧師や長老の方々と共に、同労者として中会を具体的に作り、中会が出来たときはそこの会議に服して働いていくということです。ですから、私の立場は、先輩の二人の宣教師のように上からとか、やや上から指導するというのではなく、共に日本中会に服する者として横若しくは下にあるといった表現になります。¹⁰⁰

スタッット師は牧師や長老と共に、同労者として中会を具体的に作り、中会

⁹⁹ 『あゆみ』 15 頁

¹⁰⁰ 『あゆみ』 30-31 頁

が出来た後には、その会議で決定したことに基づいて、牧師としての働きをした。スタッフは健康管理もよくされ、朝早く歩きながら、道路に落ちている空き缶を拾って歩いた。自分が住む町の環境にも気を配っていた。米国に戻っても朝早く散歩をしながら空き缶を拾う習慣は変わらなかったとお連れ合いのベベリーから聞いた。

1990年3月25日付けスタッフ先生感謝会実行委員会が発行した「スタッフ宣教師在日25年の歩み」(文責 萩生田明師)という印刷物最終頁でスタッフ師のことが次のように紹介されていた。

25年の歩みの中で、このようなキリストの謙遜を帶びておられる先生御夫妻を通して、神の御顔を仰がせていただいた兄弟姉妹は少なくないことでしょう。とくに教会にとって痛みの時であったところの年表の①～⑧¹⁰¹の8つの場面で担当牧師をされたスタッフ先生に接してこられた方はなおさらでしょう。また当初わずかに2つの自立教会しかなかったこの中会の群れが大きく成長し、25年後の現在は8つの教会と整えられつつある中会組織やFCCを加え、香港やブラジルをも含めた世界宣教の視座をも模索するまでに至らせていただいたことは驚くべき主の恵みです。先生御夫妻のキリストの謙遜を私達も模範としながら、主から与えられた使命を全うしていきたいものです。先生御一家のお働きに心から感謝を申し上げます。

この記事から分かるように、スタッフ師の働きは、フォレスター師、ディル師が育てた牧師や長老たちと共に、上からの指導者というよりは、同労者として中会の組織を具体的に作り上げて行くために働き、中会会議で決議されたことに従って働くことにより、中会主義を築くことを、身をもって人々に示し、そのために貢献した。教会や人に寄り添い、真の意味での牧会者と

¹⁰¹ 担任牧師がない期間に8回、担任牧師を務めた。

して忍耐強く、日本で宣教師として骨を埋める覚悟で働いたと言える。本部の決断で日本から米国に居を移してからも、日本における宣教が広がることを祈り、人々とつながり、日本中会で牧会に疲れた牧師がいれば、その人を米国で自分が仕えている教会に招き、しばらくの間共に生活して、心身共に回復することの助けとなつた。

5 日本中会の転換期

1950 年に、高座教会がカンバーランド長老教会の一員として受け入れられてから、宣教 30 周年を迎えた 1980 年頃から、日本中会は将来を展望し、信仰に基づく積極的なビジョンを描き、計画を立て、実際的に行動して行かなければいけないということを考えるようになった。

日本中会宣教 30 周年記念誌には次のように記されている。

まず第一に、日本中会が自立教会として歩み出さなければならない時が来たといえます。日本中会とアメリカの教会との関係についていいますならば、それは従来の関係とは完全に違ったものになって来ていることを認識することが大切です。アメリカの教会がわたしたちの教会の母胎であることには変わりありませんが、今やわたしたちの教会は、アメリカから物質的援助を一方的に受ける教会としてではなく、対等のパートナーとして、相互に助け合い、主から託された共同の宣教の業を広く世界に向けて遂行して行くべき時期に来ていると思います。(アメリカの教会と日本中会という観点からすれば、わたしたちはアメリカへ宣教師を派遣するようになつてもよいと考えます)。¹⁰²

スタッフ師の任期期間中に採択された決議の結果、スタッフ師が海外宣教

¹⁰² 『宣教三十周年記念特集 カンバーランド長老教会の歩み ——今後教会はどうあるべきか』 25-26 頁

局からの最後の宣教師となった。スタッフ師が日本で宣教師として働いた結果、中会主義は充実したものとなった。

6　まとめ

ここまで三人の宣教師の働きを見て、フォレスター師、ディル師、スタッフ師、それぞれの宣教師が、時宜に適って、それぞれ神から与えられた賜物を用いて日本で宣教のために仕えたことが確認できる。

高座教会が一冊の英文聖書との出会いから、土地が与えられ、礼拝堂が建設され、牧師が招かれた。日本キリスト教団からカンバーランド長老教会に移籍した開拓期に、戦後一代目の宣教師フォレスター師が米国のカンバーランド長老教会から派遣され、教会形成が困難を抱えていた時に二代目宣教師ディル師が派遣され、牧師が必要だった時に三代目の宣教師スタッフ師が派遣された。

戦後一代目のフォレスター師は戦後間もない日本において、一代目の宣教師として、偉大な指導力を発揮した。教会を言葉通り建てるために宣教師として、あるいは大工の息子として大工仕事の業を用いて高座教会、渋沢教会、希望が丘教会の礎を築いた。様々な人の文章に記されていることから、フォレスター師のダイナミックな人柄はまさにカンバーランド日本中会草創期にふさわしい宣教師であったと言い得る。伝道の進め方として、家庭集会を大切にしたことは後の開拓伝道につなげられた。日本で人々に愛され、カンバーランド日本中会の教会の基礎を築く働きに貢献したことが、フォレスター師の働きの最も大きな意義である。

二代目のディル師は流暢な日本語を用い、学者タイプの人であったようだ。ディル師は宣教の広がりをもたらすために用いられたと言える。ディル師夫妻は自宅を開放して英語教室を開いた。落語にも親しみ、日本人の心をつかみ日本人牧師のあり方も理解して、米国カンバーランドの宣教局と高座教会の仲介者としてもよき働きをなし、本部から適切な支援を得ることによって、

宣教が広がることのために働いたと言える。

三代目のスタッフ師は、フォレスター師、ディル師が育てた牧師や長老たちと共に、上からの指導者というよりは、同労者として中会の組織を具体的に作り上げて行くために働いた。中会会議で決議されたことに従って働くことにより、中会主義を築くことを、身をもって人々に示し、そのために貢献した。教会や人に寄り添い、真の意味での牧会者として忍耐強く、日本で宣教師として骨を埋める覚悟で働いたと言える。本部の決断で日本から米国に居を移してからも、日本における宣教が広がることを祈り、人々とつながり、日本中会で牧会に疲れた牧師がいれば、その人を米国で自分が仕えている教会に招き、しばらくの間共に生活して、心身共に回復することの助けとなつた。

3人の宣教師をアメリカの宣教局、とりわけ女性宣教局が献金と祈りで支えたことは、宣教師たちにとって大きな支えと励ましであったと考える。

国、言葉、生活習慣が全く違う日本において、それぞれの宣教師は苦労しながら、神の栄光のために犠牲的な奉仕を捧げ、日本のカンバーランド長老教会の宣教が地道に進められることを、時には指導的立場から、共に労する同労者として、また下から支えることにより、すべての働きを神の栄光に帰した事実を様々な文献から読み取ることができる。

1990年には宣教師派遣を打ち切られ、日本中会自立が始まったが、これまでの宣教師の働きがなければ、自立はもっと遅かったであろう。

おわりに

フォレスター師の連れ合いであるフラン・フォレスター氏は、宣教師館と土地売却による基金が「FDS 基金」と名付けられたことを、カンバーランド長老キリスト教会日本中会 40周年記念誌に寄せたメッセージで感謝してい

る¹⁰³。この名称はフォレスター師の F、ディル師の D、スタッット師の S の頭文字を取ったものである。これを日本中会は大切にした。なぜならフォレスター師、ディル師、スタッット師の労苦があり、またアメリカの兄弟姉妹の祈りに支えられて、日本中会に属する教会が増え、宣教が進められたからである。

戦後、カンバーランド長老教会日本中会に派遣された 3 人の宣教師はそれぞれ、ふさわしい時期にそれぞれに与えられた異なる賜物を用いて日本宣教の広がりに貢献した。そのことにより、日本中会に属する教会は着実に増え、現在の日本中会が小会・中会・(大会)・総会というカンバーランド長老教会の組織が構築されたことは三人の宣教師の働きの実りであると言える。

「収穫は多い」ことを信じ、3 人の宣教師が神に従い、教会に仕えたことをいつも心に留め、宣教の業へと押し出されたい。

¹⁰³ 『中会 40 周年誌』49 頁

<参考文献>

- James W. Knight, “*Hearth and Chalice – The Story of Cumberland Presbyterian Women and World Mission*”, Frontier Press, 1980
- Ben M. Barrus, “*A People Called Cumberland Presbyterians Vol.II*”, Wipf & Stock, 1972
- Thomas Forester, ‘Missionaries to Japan’, “*The Missionary Messenger*”, CPC, December 1952
- Japan-1953 The Mission Staff-How it grew’, “*The Missionary Messenger*”, CPC, September 1966
- Paul Schnorbus, ‘Missionary Auxiliaries’, “*The Missionary Messenger*”, CPC, February, 1963
- ‘From Japan’, “*The Missionary Messenger*”, CPC, April 1959
- Thomas and Fran Forester, Missionary Auxiliaries’, “*The Missionary Messenger*”, CPC, February 1961
- ‘Japan’, “*The Missionary Messenger*”, CPC, May 1962
- Tolbert Dill, ‘Preparation For Mission Work in Japan’, “*The Missionary Messenger*”, CPC, February, 1963
- ‘*Minutes of the General Assembly*”, CPC, 1950
- Mrs. Paul Schnorbus, Missionary Auxiliaries, “*The Missionary Messenger*”, CPC, 1963
- 『あゆみ 一戦後カンバーランド長老教会日本宣教をふりかえって—』、カンバーランド長老キリスト教会日本中会、1987年
- 『宣教三十周年記念特集 カンバーランド長老教会の歩み 一今後教会はどうあるべきか—』、カンバーランド長老キリスト教会日本中会広報委員会、1980年
- 『あゆみ—40周年記念誌—』、カンバーランド長老キリスト教会日本中会、1993年

- ・『カンバーランド長老高座基督教会二十年の歩み』、宗教法人カンバーランド長老高座基督教会、1967年
- ・『ただキリストの導きの中で カンバーランド長老キリスト教会高座教会三十周年記念誌』、カンバーランド長老キリスト教会 高座教会、1977年
- ・『カンバーランド長老キリスト教会 渋沢教会二十五年の歩み 一神の恵みの継承のために——』、連合印刷センター、1980年
- ・『主を求めよそして生きよ』、カンバーランド長老キリスト教会渋沢教会、1987年
- ・『鐘の音にのせて ——30周年記念誌——』、カンバーランド長老キリスト教会 希望が丘教会、1994年
- ・『希望の虹 ——50周年記念誌——』 カンバーランド長老キリスト教会希望が丘教会、2011年
- ・『なお、あなたを待ち望む ——献堂40周年記念誌——』、カンバーランド長老キリスト教会 国立のぞみ教会、2004年
- ・『スタッフ宣教師在日 25 年の歩み』スタッフ先生感謝会実行委員会、1990.3.25

【説教】

1983年11月13日 希望が丘教会

吉崎忠雄 牧師 (2005年召天)

説教題 「そのうちのひとりは、感謝した」

聖 書 ルカによる福音書17章11-19節（口語訳聖書）



おはようございます。

「そのうちのひとりは、感謝した」

今日のテキストは、ルカによる福音書17章11節以下、この御言葉から共に考えたいと思うのであります。この記事は、十人の重い皮膚病人¹⁰⁴がいやされたことを記す、この物語であります。

我々は「そのうちのひとりは、感謝した」と、こう告げていることを、注目したいのです。多くの人々は、神に感謝するということは、何も特別に重大な事柄ではないと思っておられることでしょう。神への感謝に、特に深い思想が秘められているとも考えられないでしょう。しかし、主イエスは、感謝したひとりのサマリヤ人にだけ、「あなたの信仰があなたを救った」 こう言われた。これはほかの九人はただ、肉体の病気がいやされたという一時的な救いを得たに過ぎず、その存在の最も深い本質においていやされなかつたことを意味しているのです。それに対して、神をほめたたえながら帰ってきて、感謝した、このサマリヤ人は、病気のいやしと共に、身体と魂を含めた永遠的な救いを、その全存在の、最も深い本質までに、素晴らしい救いが

¹⁰⁴ 口語訳聖書の「らい病人」を、日本聖書協会が2002年に「重い皮膚病」に変更した。それにあわせて吉崎牧師の説教中の「らい病人」を聖書からの引用の場合は「重い皮膚病人」に変更した。そのほか現代の視点からすれば、問題とされ得る表現があるが、歴史的な文書であることを考え、そのままにしている。ただし、気づいたかぎり、(ママ)としてある。

もたらされたということです。ここから、我々の人生の救いが、神を賛美しつつ、感謝することにかかっているということに、我々は、心を注ぎたいのです。我々はその生活、また人生を、このような神への感謝をもって、感謝の内に、果たして本当に生きているかどうか、聖書は私たちに告げている。「そのうちのひとりは、感謝した」この小さな小さな言葉は、我々からこの一つのこと、すなわち、神への感謝を、主が私たちに求めておられる。

さて十人の重い皮膚病人たちは、この御言葉のルカによる福音書17章13節に、「遠くの方で立ちとどまり、声を張りあげて、『イエスさま、わたしたちをあわれんでください。』」とこう言った。これは重い皮膚病人は律法によって、健康な人々から離れ、孤立して生活し、そして人々に向かって、重い皮膚病人たちは「汚れた者、汚れた者」とみずから、彼らに呼ばなければならなかつたのである。旧約聖書のレビ記の13章の中にその御言葉がござります。レビ記の13章45節に、「患部のある重い皮膚病人は、その衣服を裂き、その頭を現し、その口ひげをおおつて『汚れた者、汚れた者』と呼ばわらなければならな」かつた。

わたくしがかつて若い時から、今もそうであります、愛読している本があります。それは藤井武全集という無教会の先生の説教集ですが、その中にこういうことが書いてある。これはイエスの人格という題の「或る癱病人とイエス」¹⁰⁵という記事があります。「^(マ マ)癱病人 人のうちでも、いとも恵まれざる者よ、肉体にも、精神的にも彼らほど不幸な者はない、その臍は指先から身体へとむしばみ、遂には骨までも腐らせてしまう。高熱、不眠、その他様々の苦痛、それらはなお、忍びうるとしても、すべての人より愛を拒絶せらるる、精神的苦悩は果たしていかばかりか」。さらに詩編のいくつかを、彼はここに特に取り上げて言っている。「隣り人には恐れられ、知り人には、恐るべき者となり、ちまたで我を見る者は避けて逃げます」、詩篇38篇11節（文

¹⁰⁵ 藤井武全集 第五卷 第四章 123—132 頁

語訳)に「わが友、わが親しめる者は、わが痕きずをみて遙かにたち、わが隣もまた遠ざかりてたてり」と。この藤井武全集のこの問題のあの説教をわたくしはいつも、何度も何度も読むのであります。

この重い皮膚病人に、主イエスが出会われた時、彼らは「汚れた者、汚れた者」と呼ばなければならなかったのに、「汚れた者」と叫ぶ代わりに、「イエスさま、わたしたちをあわれんでください」こう叫んだ。この「わたしをあわれんでください」という、この祈りは、実は神の本質としてのあわれみに向かはれ、その慈愛に望みをおいた切実な祈りであります。十人の重い皮膚病人たちは、この神の御性質としてのあわれみに、このあわれみが同時に、主イエスのあわれみであることを信じて、「わたしをあわれんでください」とこう祈ったのである。

このルカの17章14節に「イエスは彼らをごらんになった」とこう記されている。「イエスは彼らをごらんになった」主イエスはまず、あわれみの心を向けられた。彼らの祈りを聞かれた。我々が、「主よ、あわれんでください」と謙遜に祈るときに大いなる愛の耳は、我々の声を聴くのです。しかし、ここでは、ごらんになったとある。彼らの祈りがその耳に達すると共に、必死に祈る彼らをごらんになったのである。大いなる愛の耳を持って聞くと共に、大いなる恵みを求めて祈る我々をごらんになったのである。

彼らをごらんになった主イエスは、14節に「祭司たちのところに行って、からだを見せなさい」と言わされたと御言葉にある。このルカ福音書5章14節に、こう書いてある。「イエスは、だれにも話さないようにと彼に言い聞かせ、『ただ行って自分のからだを祭司に見せ、それからあなたのきよめのため、モーセが命じたとおりのささげ物をして、人々に証明しなさい。』とお命じになった」これは、いやされた人がなすべき務めであります。「祭司たちのところへ行って、からだを見せなさい」こう言われた。主イエスが彼らの祈りに耳を傾け、彼らをごらんになった時にすでに、主イエスによって彼らはいやされ始めていたのである。そして、「行く途中で彼らはきよめられた」

と 14 節に記されている。

ところで、我々は今、この時代、この社会にあって、なによりもまず、神との交わりを破壊する、多くの力のもとに生きていかなければならぬ。神との交わりが、神との交わりから我々を引き離す強い力の、ただ中にあるのではないだろうか。このような力のもとで、我々は、いかにも様々な罪、悪や恥、醜さ、そしてみじめさを負わなければならぬことか。またそのような力のただ中で、我々は、どんなに骨の髄まで、自己中心的であり、また肉欲的であるか。したがってまさに我々自身ひとりひとりが、「汚れた者、汚れた者」と言わざるをえない我々ではないだろうか。それゆえに、我々もまた、あの十人の重い皮膚病人のように、「イエスさま、わたしをあわれんでください」と祈らざるをえないのである。

しかし、感謝したい。そのような我々に、我々の罪、悪、恥、醜さ、みじめさの一切をご自身に負わされた主イエス・キリストが、出会って下さったからである。「この主イエス・キリストの傷によって、われらはいやされた」と御言葉は私たちに告げている。「わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかるて、わたしたちの罪を、ご自分の身に負わされた。その傷によって、あなたがたはいやされた」と第一ペテロ 2 章 24 節に記されている。しかも我らの肉体に必要な多くの恵みがいかにも豊かに与えられていることか。であるから、我々は常に、神の御名をほめたたえつつ、ピリピ 4 章 6 節にあるように「事ごとに、感謝を……ささげ」なければならないのである。

しかし、十人がいやされ、大いなる恵みに答えるはずであるのに、そのうちのひとりだけが、こう書いてある。15、16 節に「自分がいやされたことを知り、大声で神をほめたたえながら帰ってきて、イエスの足もとにひれ伏して感謝した」「感謝とは思うことから生じる」と、ある説教者は申しました。「感謝とは、思うことから生じる」と言われる。十人のうちのひとりだけが、自分がいやされたのは、汚れた者に出会わされた主イエスのあわれみ以外

のなものでもなく、主イエスに現された神の愛の奇跡であることを知り、またそれを真実思ったのである。それで、「汚れた者、汚れた者」と叫ぶことに慣れていた彼の声は、ここでは幸いな賛美の声に変えられてしまった。

彼ひとりが、彼ひとりが、大声で神をほめたたえながら帰ってきて、主イエスに感謝したのである。それは、九対一である。そしてこの九人とは誰か、他ならぬこの我々ではないのか。我々もいやされた、清められた、しかしその恵みを知り、それを真実心から思うであろうか。たとえ思ったとしても、神に感謝するであろうか。ことに、一つの悩みが、多くの恵みを忘れさせるということはないだろうか。一つの憂いが多くの感謝を隠してしまうことはないだろうか。暗い面だけ、目が向けられて、日の当たっている面を思わず、つぶやいたり、不平、不満を鳴らしたりし、さらに神に反抗的になり、不従順に陥るのではないかろうか。その時我々はあの九人のようになり、「ほかの九人は、どこにいるのか」17節、「ほかの九人は、どこにいるのか」と主ご自身を悲しませることになるのである。

特に我々は気をつけたい。我々は、悩み苦しみが過ぎ去った後、後に悩み、苦しみが過ぎ去ったことを思い、心から、本当に感謝するであろうか。悩み苦しみがあるうちは一生懸命に、神に近づき、祈り求める。しかしそれが過ぎ去った後、過ぎ去ったことにも気づかず、したがって神への感謝を忘れるのではないかろうか。そこに、「ほかの九人は、どこにいるのか」主イエス・キリストの悲しみがそこに起こるのである。しかし、忘我の我々自身が「そのうちのひとりは、感謝した」と告げてくる。このひとりだけが悩み苦しみが過ぎ去った後も、それにもかかわらず、否、それゆえにこそ、帰ってきて、主のみ前にひれ伏して、感謝したのである。

もう一つのことを注目したい。それは九人が賛美せず、主イエスに感謝しない道を歩いていった時、そのひとりのサマリヤ人が、「あの九人が、神を賛美せずに、主イエスに感謝しない道をいくのだから、わたしもまたその道をいこう」と言うことができたであろう。そして、我々はまたしばしばそうす

るのではないだろうか。しかし、このサマリヤ人は、九人に従わない。集団に同調しないのである。たとえ、自分ひとりだけでも、神を賛美し、感謝したいという自分の心の欲求、自分の靈の思いに従うのである。そして、欲求、その思いを、他の九人によって妨げられず、遂行するのである。これが自主的な信仰である。まことに我々に与えられた、すべての恵みは九人が別の道を行くとき、たとえ我々は、ひとりでも、賛美的道をいくこと、そのためには神に帰っていくことを主が求めていらっしゃる。そして、この悩み苦しみが過ぎ去った後にたとえ、ひとりだけでも賛美と感謝のために、神に帰ったことを告げるこの物語の大きな慰めがある。

その時、主イエスはその人に、19節「立っていきなさい。あなたの信仰があなたを救ったのだ」こう言われた。あなたの道とはどういう道であるか。それは人々と同調せず、この世と同化せず、自分ひとりだけでも神に帰っていった、あの賛美と感謝とをささげる、あの道ではなかったか。もちろん、このあなたの道には様々な困難がある。障がいがあるであろう。我々の賛美と感謝の道は、肉体を持ってこの世に生きる限り、平坦で、安楽なものではない。しかし、それにもかかわらず確かに、この道を、かかる道に行くことができるるのである。その理由を主イエスはサマリヤ人に告げられた。「あなたの信仰が、あなたを救ったのである」これは、あなたの信仰が単にあなたを救ったという過去の救いを指すだけではない。過去の救いが、現在継続していることを意味しているのである。すなわち、彼が信仰を持ってその道を行く限り、キリストの救いが永遠に続くのである。そうだとすれば、たとえ我々の道が、道に、困難や障がいがあっても、その道は賛美と感謝の道に変えられるのではないかろうか。そうだから、我々は、あの十人のうちのひとりのような、主イエス・キリストに信頼と望みとをおく信仰、感謝する信仰を持ちたいものである。そして、神が我々に与えて下さった恵みのすべてを忘れることなく、神に対する感謝と賛美をもって、またそこから、我々の道を進み行こうではないか。

この感謝の月になっている。来週の木曜日はいわゆる、サンクスギビングデー、「すべてのことについて感謝しなさい」というこの御言葉を、ピリピの1章29節にある「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じることだけではなく、彼のために苦しむことをも賜っている」とあるように、たとえ、どんなに苦しみや悲しみ、困難な問題も主よりの賜物、プレゼントとして、喜んで受けていきたい。なぜなら、神はこのことを通してでなければ学ぶことができないたくさん恵みを与えて下さるからである。

「そのうちのひとりは感謝した」

祈りましょう。

いやされた十人の中にたったひとりのサマリヤ人が主イエスのもとに帰ってきて、賛美し感謝した。そのことを、本当に心から思い、主の御名を賛美しましょう。



神様、あふれるばかりの恵みがわたしたちに与えられております。もっともっと、感謝し、賛美していく、私の生活でありますように。ひとりひとりの魂が、心の底からこみあげて主を見上げてゆく、ひとりひとりの信仰でありますように。どうぞ顧みをお与えください。神様、しっかりと、どのような道を備えられていても、主を見上げ、「そのうちのひとりは、感謝した」というその思いを、ひとりひとりにお与えください。あなたが、わたしたちに、さらに大きな恵みを与えて下さることを信じ、これらの願い、感謝、尊き救い主、イエス・キリストの御名によってお祈り致します。アーメン

祝福を告げる者¹⁰⁶

——伝道師の祝祷について——

引退教職者 濱崎 孝
はまさき たかし

はじめに

伝道師が、祝祷をしてはいけないのかということは、20年ほども前に牧師会の席上で問われたことを記憶している。しかし、まだ若い伝道師は、重要な問い合わせかけたのだが、それを神学的に問うことはなかった。また、私を含め、牧師たちは、その問い合わせに真剣に向き合うことはないまま、今日に至ってしまった。そして、去る1997年4月21日、日本中会教職委員会から、牧師会宛てに「伝道師の祝祷について」という文書が出された。さがみ野教会から、「伝道師が祝祷できないのはなぜか」という質問があり、それを受けた運営委員会も回答を求めていたことであった。¹⁰⁷ 今や牧師会は、あの問い合わせに誠実に応え、「祝祷の神学的な理解を明らかにする」ことを強く求められているのである。

『キリスト教礼拝辞典』によると、祝祷は、「神の祝福を求める祈り、ある

¹⁰⁶ 日本中会は第45回中会会議（1999年2月28日）において議案5「伝道師の祝祷の件」について審議し、承認した。本件は神学的な背景を検証しなければならないため、教職委員会は、牧師会に検討を依頼した。牧師会では濱崎牧師に論文作成を依頼し、後日、本論文「祝福を告げる者——伝道師の祝祷について——」が提出された。これをもとに牧師会、教職委員会は、伝道師に祝祷ができると結論を出し、中会会議に本件を上程した。

¹⁰⁷ 日本中会教職委員会の議事録（1997年3月17日）には、議題4.③に、「『伝道師には祝祷していただきたい。できないならその理由は』答：今の段階では、慣例を尊重する。」と記されている。

いは神の祝福が近いことを確認することである」¹⁰⁸ と説明されている。「神による『祝福』は、おそらく聖書中で最も重要な主題である。」¹⁰⁹ 小生は、力のない者であることを思わないわけにはいかない。けれども、大きな忘れものをしてきた負い目がある。敢えて、牧師会の神学的な検討作業のために、この拙論を提出させていただく次第である。遅すぎて恥ずかしい限りではあるが、これまでの不誠実を謝罪する祈りをもって。

1998年3月 洋沢教会牧師室にて。

旧約聖書における祝福

旧約聖書の冒頭にある天地創造の物語（創世記1：1～2：4a）は、祭司資料（P）によるものであるが、「これは、創造主なる神と被造物なる世界に関する、イスラエルの救済史的体験に基づく信仰告白である」（傍点筆者）¹¹⁰。したがって、神がこの世界を祝福しているという信頼に満ちている。

先ず1：22には、「神はそれらのものを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。』」とある。「神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造されし」（21）、彼らに繁殖力を与え、魚や鳥を「産めよ、増えよ……」と祝福されたのである。

1：27には、神が人を創造されたこと、男と女に創造されたことが語られ、次のようにつづく。「神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に

¹⁰⁸ 北村宗次『キリスト教礼拝辞典』p.174

¹⁰⁹ 大野恵正『聖書と教会』1988年12月号p.4)

¹¹⁰ 城崎進『聖書雑誌』1966年4月号p.1 なお、モーセ五書を構成する資料文書の一つは、祭司たちによって書かれたと考えられ、それを祭司資料（P）と呼ぶ。その成立年代については諸説があるが、ゲルハルト・フォン・ラートは紀元前538～454年の間と見ている。

満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。』」(28)——男と女、この両性の創造が、神の祝福の下に与えられ、「人間はとくに神の祝福によって生殖の機能を与えられている」¹¹¹。人間は、この神の祝福に生きて、神の祝福が世界に及ぶための使命を果たすことが求められているのである。

ヤーウィスト（J）による創造物語（創世記2：4b～3：24）には、「祝福」という語は見出されないが、「主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた」(2：8)ことを語る。エデンの園は、人間が神の祝福に生きる場であり、「人がそこを耕し、守るようにされた】(2：15) 使命も、神の祝福の下に与えられたものであって苦役ではない。

2：19以下には、神は、名づけるという意味深い事柄を人間に与えたことが語られている。人間は、家畜、鳥、獸に名前をつけ、人間（女・イシャー）をも名づけたのである。創世記5：1b～2（P）には、「神は人を創造された日、神に似せてこれを造られ、男と女に創造された。創造の日に、彼らを祝福されて、人と名付けられた」と記されている。ヤーウィストの語る人間は、神の祝福の事態の中で生きるのである。

祭司神学から語られた両性の創造の祝福についても、ヤーウィストは、「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」(2：24)と語り、共通認識を持っている。こうしてヤーウィストもまた、神が人間や世界を祝福しているという信仰に立っていたのである。

創世記12：1以下には、アブラハムを「祝福の源」にするというヤーウェの祝福と、地上の氏族はすべて、アブラハムによって祝福に入るという約束が示されている。ヤーウィストは、祝福というものを歴史化した貢献を持っている。「ここで祝福……は、もはや古い時代のように祭儀や儀礼に結びついた出来事ではなく、最も普遍的な意味で、すなわち歴史を導く神の、恵み

¹¹¹ 城崎 進『聖書雑誌』1966年5月号p.4

に満ちた庇護の行為と……という意味で語られている」¹¹² のである。

それでは預言者はどうだったか、「旧約聖書は預言者の証言によって決定的に規定されていると言うことができる」¹¹³ のである。

紀元前 8 世紀の預言者イザヤは、19：24～25 で、次のように預言している。「その日には、イスラエルは、エジプトとアッシャリアと共に、世界を祝福する第三のものとなるであろう。万軍の主は彼らを祝福して言われる。『祝福されよ／わが民エジプト／わが手の業なるアッシャリア／わが嗣業なるイスラエル』と。」——旧約聖書学者の浅野順一は、かつて、「われわれ信仰者が神は天地の創造者、支配者だとほんとうに信じているならば、このイザヤのようなビジョンをわれわれも持たなくてはいけない」¹¹⁴ と語った。預言者イザヤは、神が小さなイスラエルを祝福し、その祝福を神の民は、アッシャリアやエジプトと分かち合うという、「歴史に対する、人類平和についてのビジョン」を語ったのである。

紀元前 7 世紀の預言者エレミヤは、主なる神から、「立ち帰れ」と呼びかけられていたイスラエルに向けて、「もし、あなたが真実と公平と正義をもって／『主は生きておられる』と誓うなら／諸国の民は、あなたを通して祝

¹¹² ゲルハルト・フォン・ラート『創世記』 p.278 これに関連する記述が『旧約新約聖書大事典』の「祝福」の項にある。すなわち、「本来歴史的性格を全く持たない祝福概念が、ヤハウイストにより祝福の約束のうちで<歴史>と結びつけられていること（創 12：1～3）。このように祝福が、ヤハウェと、ヤハウェが彼の民イスラエルと共に歩む歴史とに従属せしめられることにより、祝福の概念はその本来の呪術的性格を失っている」と。なお、J 資料もモーセ五書を構成する資料文書の一つである。ヤーウェという神名を用いるのでその著者をヤーウイストと呼ぶ。フォン・ラートは、紀元前 950 年頃に成立したものと推測している。

¹¹³ TH・C・フリーゼン『旧約聖書神学概説』 p.76

¹¹⁴ 浅野順一『静かにして恐れるな預言者イザヤ』 p.100

福を受け／あなたを誇りとする」(4:2)と預言した。このように預言者たちは、神は世界を祝福する方であり、神の民は、神の祝福と共に生きる人々に伝えるよう召されているのだと語った。そして、神の民が本来の自己を取り戻すということは、「祝福の源」(創世12:2)になるということなのである。

ところで、民数記6章22節以下には、新共同訳聖書が「祭司による祝福」という小見出しをつけた箇所がある。ここには、「アロンの祝祷」と呼ばれるものが記されており、注目しないわけにはいかない。なぜなら、16世紀の宗教改革者たちがそれをキリスト教礼拝の中に位置づけたからである。¹¹⁵

22～23節には、次のように書かれている。「主（ヤーウエ）はモーセに仰せになった。アロンとその子らに言いなさい。あなたたちはイスラエルの人々を祝福して、次のように言いなさい」。——このように、人々を祝福する特権がアロン系の祭司に与えられているのだが、「それは、捕囚後の神殿の状況を反映している」と言われる。「王国時代には、レビ族とたちが祝福をとなえ（申命記10:8）、王さえ時にはそれをなすことができた（サムエル記下6:18）」。¹¹⁶

そして、24～26節にアロンの祝祷がつづく。「主（ヤーウエ）があなたを

¹¹⁵ 後藤憲正『改革派教会の礼拝——第一部・礼拝式の構造——』p.71～72には、改革者ブツツァーによる聖晚餐リタージが紹介されている。「アロンの祝祷」が用いられているので参照。また、『季刊 教会』N0.7(1992年5月) p.6には、W・D・マックスウェル『キリスト教礼拝史』から、藤掛順一がジャン・カルヴァンのストラスブル式文を紹介しているので参照。やはり、「祝祷（アロンの祝祷）」が見出される。

¹¹⁶ J・L・メイズ『レビ記・民数記』p.139 なお、申命記10:8は、後代の挿入と見られている聖句であるが、次のように記されている。「そのとき、主（ヤーウエ）はレビ族を選び分けて、主の契約の箱を担ぎ、主の御前に立って仕え、主の名によって祝福するようにされた。それは今日まで続いている」。

祝福し、あなたを守られるように。／主（ヤーウエ）が御顔を向けてあなたを照らし／あなたに恵みを与えるように。／主（ヤーウエ）が御顔をあなたに向けて／あなたに平安を賜るように」。アロンの祝祷は、ヤーウエが「作物、家畜の群れ、実り多い季節、子供、財産という主の良き賜物を与えて下さるようにと、主に願い求めている。そしてまた、主がイスラエルを『守って』下さるように、つまり、悪い収穫、敵、子供のない状態などからイスラエルを保護して下さるようにと、主に願い求めている」。25節の「輝く顔とは、それによって照らされる人たちの喜びのしるしである（詩篇31：16、80：3、7、19）。言い換えれば、主は、イスラエルをその心にじかに受け入れて下さるようにと願い求められているのである。（中略）主はまた、『恵み深く』（25節）あって下さるように、つまり、民は主の恩恵に値しない者ではあるけれども、民に主の恩恵を示して下さるようにと願い求められている」。アロンの祝祷の結びは、平安（シヤローム）を賜るように……というのだが、シヤロームは、「聖書では、困難と呪いから人生が守られ安全であるという意味や、人生で出会うもろもろの出来事が申し分なく円満だという意味、また、心が調和し均衡がとれているという意味など、この語には深い意味がある」。したがって、「ある人のためにシヤロームを願うことは、その人のために人生の最も良きことを願うことになる」のである。¹¹⁷

アロンの祝祷につづいて、27節には、「彼らがわたしの名をイスラエルの人々の上に置くとき、わたしは彼らを祝福するであろう」というヤーウエの約束が語られている。私どもは、礼拝の終わりの部分に「祝祷」を位置づけてきたのだが、祝祷とは、神の民の上に主の名を置くことなのである。その意味で、次のような言葉を私どもの心にとめ、思いめぐらすことは大切である。「旧約聖書において、主の名は、主の人格的な臨在と力との、口で語られた現実である。信仰と崇敬のおもいをもって用いられた主の名は、神の臨在

¹¹⁷ W・リガンズ『民数記』p.106～108 参照。

と力をひき起こした」（J・L・メイズ）。¹¹⁸ また、オランダ改革教会の牧師であり、旧約聖書学者だったB・マールシンクの次の言葉も、傾聴に値するものである。「祝福の言明によって神の名がイスラエルの人びとの上に置かれるというのであるから、ここでは決して自然の成りゆきや魔術的な言葉などの働きが言われているのではないのは明らかである。神が事を行なわれる。そして神ひとりが事を行なわれる」。¹¹⁹

以上のように、私どもは旧約聖書の中に「祝福」を概観してきた。神は、良い意図をもって世界を創造し、人間は神が祝福された世界に生きるようにされたのである。人間は罪に墮ち、神の祝福をだいなしにしてしまったが、神はそれを回復しようとしておられる。ことに神の民は、祝福の源となる人生を回復することが期待されているのである。そして、私どもに与えられた課題から見るなら、祝福は、様々な立場の人によって願い求められてきたのである。祭司アロンによる祝福（レビ記9:22以下）ばかりでなく、族長ヤコブによる祝福（創世記49章）、神の人モーセによる祝福（申命記33章）などがある。また、ルツ記2:4には、農夫たちがボアズを祝福したことが伝えられている。先見者（預言者）サムエルの祝福（サムエル記上9:13）が見出され、ダビデ王による祝福（サムエル記下6:18）とダビデの家臣ヨアブによる祝福（サムエル記下14:22）も見出される。列王記上8:66では、民がソロモン王に祝福の言葉を言い表した。歴代志下20:26などは、ヨシヤパテとその民（軍隊）が「主を祝福した」（口語訳）と伝えている。このような場合は、祝福を与えてくださる神が賛美されていることを考慮し、新共同訳聖書のように「主をたたえた」というように訳される。しかし、そこで使われているヘブライ語は、ベラカー（祝福）の動詞バーラクの能動強意態が使われているのである（同様なケースとして、創世記24:48、申命記8:

¹¹⁸ J・L・メイズ『レビ記・民数記』 p.139

¹¹⁹ B・マールシンク『民数記』 p.76

10を参照)。山崎 亨は、『キリスト教大事典』の中で「祝福・呪」を説明しつつ、「旧約において神の祝福を伝達する者は、祭司であった。その理由は祭司が儀式的に、仲保者的立場に立っていたからである(レビ9:22)」と述べている。¹²⁰ しかし、事実は、私どもが見てきたとおり、祭司以外の人たちも神の祝福を伝達し、隣人を祝福したのである。

新約聖書における祝福

使徒言行録の著者ルカが、3章 12~26節などに記した使徒ペトロの説教は、ごく初期の教会の宣教^{ケリュグマ}を知る極めて重要な聖書箇所である。C・H・ドッドは『使徒的宣教とその展開』の中で、原始教会の宣教について論じているが、使徒ペトロの説教の中に含まれている初期のケリュグマの内容を、次のように要約している。

第1、「成就」の時代の曙光がきざしたこと(2:16、3:18、24)。預言者たちの預言は、「メシヤの日」を指すものであること、すなわち、この日は神が幾世紀にわたる待機の後に、審判と祝福とをもってその民を訪れて、歴史における神の民との折衝を終局に導くあの待望の時期を指すものである……。したがって、使徒たちはメシヤの時代の曙光がすでにきざしたことを宣言する。

第2、このことはイエスの伝道、死、および復活によって生じた。これらに関する簡略な記事が、すべては「神の定めた計画と予知とにより」起こったことの、聖書よりの証明とともに記されている(2:30、31、2:22、3:22、2:23、3:13-15、2:24-25、3:15、4:10など)。

第3、復活によりイエスは高く引き上げられ、新しいイスラエルのメシヤ

¹²⁰ ジャン・カルヴァンもまた、「人々を祝福することは、律法の時代にあつては祭司の役目の一部であった」と言っている(『新約聖書註解 V 使徒行伝 上』 p.117)。

的支配者として神の右に坐していること（2：33—36、3：13、4：11、5：31など）。

第4、教会における聖霊はキリストの現在の力と栄光のしるしである（2：33、2：17—21、5：32）。

第5、メシヤ時代はキリストの再臨により、間もなくその完成に達するであろう（3：20—21、10：42）。

最後にケリュグマはいつも、悔い改めの奨め、罪の赦しと聖霊のたまもの、そして選民の集団にはいる人に対する「救い」の約束、すなわち、「来たるべき世の生命」への約束を持って結んでいる（2：38—39、3：19、25—26、4：12、5：31、10：43など）。¹²¹

このようなケリュグマは、新約聖書全体の基礎であり、「本質的にパウロの中に現われていないものはほとんどない」¹²² という。そして、そのようなケリュグマの中に、「神は御自分の僕を立て、まず、あなたがたのもとに遣わしてくださいましたのです。それは、あなたがた一人一人を悪から離れさせ、その祝福にあづからせるためでした（エウロゲオー）」（3：26）と語られているのである。そうして私どもは、カルヴァンが註解しているように、「キリストのみが祝福の本源であり、源泉である。イエス・キリストはまずユダヤ人に祝福をお与えになり、次にまた私たちにも与えるためにおいてになった」¹²³ ということを知るのである。

マタイは、彼の福音書の5～7章にキリストの山上の説教を記している。そして、新共同訳聖書がそれに「幸い」という小見出しを付けた5：3～11は、「祝福を告げる言葉」であることが容易にわかる。R・ボーレンは、そこをテキストにして、9回にわたるみ言葉の説教をしているが、「第1の祝福」、

¹²¹ C・H・ドッド『使徒的宣教とその展開』p.24以下参照。

¹²² 前掲書p.32～33

¹²³ ジャン・カルヴァン『新約聖書註解 V 使徒行伝 上』p.117

「第2の祝福」、……「第9の祝福」というように取り上げていくのである。原始キリスト教会のケリュグマには、キリストが祝福をもたらす方として来臨されたことが語られていた。私どもは、山上の説教においてそのことを再確認できるのである。そして、ここに私どもが注目しておきたいことがある。それは、キリストによって語られた祝福（マカリオス＝「幸いである」は、マカリオイというギリシア語が使われている）が、どのようにして世界に及んで行くかということに関わるものである。「マタイ神学からみた山上の説教」という論文において、小林昭雄は次のように述べている。『『幸いである』とは神の側の祝福の行為であり、約束であり、人間の中に新しい実存をつくり出す』。ルカ福音書ではこの「幸いである」はすべて「あなたがたは」と二人称複数で弟子たちに対して直接的に語りかけられている。恐らくこの方がイエスの状況を反映しているであろう。ここで、貧しい者が幸いである、ということはイエスを離れて妥当する一般的普遍的真理と解せられてはならない。貧しい者、飢えている者、悲しむ者が幸いであるのは、彼らがイエスを通じて『悲しむ者を慰め』『貧しき者を富ませ』『罪人を義人にする』神の恵みと力にふれるからに他ならない。この事はキリストを通じてのみ起こり、経験された神の国の現実、信仰の現実であった（パウロも同様なことを語っている。第2コリント4:7-6:10）。さらに小林は言う、「弟子たちが祝福と選びを受け、『み国の子ら』（13:38）『義人』（13:43）とされているのは、『実を結ぶ民』（21:43、7:19）となり、彼らの『よき業』により父の栄光をあらわし、父の御名が崇められるためである、という弟子たちの使命的存在を示すものといえよう。そしてこれは他の新約聖書にも共通している（エペソ2:20、第1ペトロ2:9他）」。¹²⁴ これによって私どもは、旧約聖書において「祝福の源」になるようアブラハムたちを召し出した神の祝福が、キリストによって新しく語られたのを知るのである。そうであればこそ、「私

¹²⁴ 『聖書と教会』1971年2月号p.3~5

たちの……教会もまた、神さまがイエス・キリストの口をとおしてお語りになつた祝福の先触れになりたい。小さな声、頼りない声かも知れないけれど、先触れになって、このさいわいな、祝福された、救われた事実を人々に伝える、そういう群れになりたい、そう思います」¹²⁵ というようなことが説教壇から語られるのである。

マルコ 10:16 には、キリストが「子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された」と伝えられている。これなどは、後述するつもりではあるが、祝福の所作まで教えられる聖句である。また、ルカ 23:43 の、十字架上のキリストの言葉は、旧約聖書のヤーウィストが伝えた楽園の祝福を、キリストが、悔い改めた罪人に、より深い意味で回復するという意義を持つものであった。キリストはそこで、「はつきり（アーメン） 言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言わされたのである。マルコ 11:9～10 に保存されている人々の叫びは、「ホサナ。／主の名によって来られる方に、／祝福があるように。／我らの父ダビデの来たるべき国に、／祝福があるように。／いと高きところにホサナ。」というものであった。これは、キリストのエルサレム入りに際して上がつた歓呼の声だが、それは詩編 118:25～26 a の引用であり、「これは本来はエルサレム神殿を訪れる巡礼者たちに祭司がのべる祝福の言葉である」¹²⁶ と指摘されている。私どもは、こうした聖書箇所をとおして、「イエスは人間に対する神の祝福にその主体を賭けた」¹²⁷ ということを認めないわけにはいかない。

コリントの信徒への手紙 二 13:13 の聖句にふれておこう。これは、主日礼拝の終わりの部分で、祝祷として最もよく用いられているものである。使徒パウロは、コリントの信徒への手紙 二を、「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共ににあるように」という、

¹²⁵ 徳善義和『マカリオス』 p.84～85

¹²⁶ 川島貞雄『マルコによる福音書 十字架への道イエス』 p.172

¹²⁷ 大野恵正『聖書と教会』1983年8月号 p.7

「三項定式の『祝福』Segenswunsch〔祝福の願い〕」で結語としたのだった。

H・D・ヴェントラントは、「それは人間的な仕方で願うこと (wünschen) と解すべきではなく、むしろ祈り (Gebet) なのである」と説明している。そして、「それは『聞き届けられる確信に満ちて発せられる』(P・ブルンナー) ゆえに、その祈りの中に覚えられた人にとっては、同時に現実に受ける祝福である。それはキリストの全権の中で起こるものである。それゆえ、『恩恵を願うこと』は靈的な行為として理解されなければならない」¹²⁸ と言っている。

コリントの信徒への手紙 二は、パウロの使徒職をめぐって書かれたものである。そして、「彼の使徒たることの合法性と彼の宣教とに対して向けられた攻撃は、本当は事柄自体に、つまり、十字架にかけられ、復活した主自身に向かられており、そのことによってまた、終局的な意味での救いと滅びとに向けられていた (2:15 以下、他)」。そしてこの手紙は、「福音自体のための、たぐいのない戦い」から書かれたものであった。¹²⁹ そのような手紙の結語が、三項定式の祝福となっている意味は大きい。「新約聖書は、三位一体の教理を形成してはいない」¹³⁰ のだが、主イエス・キリスト、神、聖霊というこの「三位一体の一致と交わりが教会共同体に反映するとき、パウロがあれほど願っていた教会の一致と信徒の交わり (コイノニア) が実現するからである」。¹³¹ カルヴァンは、「そこにわたしたちの救いの大綱のすべてが存する」¹³² と言っている。私どもは、このような祝福の祈りを、主日礼拝の祝祷の言葉として用い、教会に仕えてきたのである。この祝祷に与かっている人々に、ヴァルター・リュティの言葉を紹介したい。「私には、諸国民の

¹²⁸ H・D・ヴェントラント『コリント人への手紙』 p.523

¹²⁹ ギュンター・ボルンカム『新約聖書』 p.171~172

¹³⁰ A・リチャードソン『新約聖書神学概論』 p.200

¹³¹ 石川康輔『新共同訳 新約聖書注解II』 p.155

¹³² ジャン・カルヴァン『新約聖書註解 IX コリント後書』 p.234

使徒パウロの祝福の手が、数千年をこえて伸ばされているのを見るように思える。海や砂漠や山の頂や峡谷や村や工場の煙突や高層建築や教会の塔や砦の壁をこえて、私の小さな頭に向けて、伸ばされているのを見るように思える。そして、そのように伸ばされた使徒の手は、決して空ではない。その手は、すべての者の上に、天の豊かさを注ぎ出す。恵みと平安と父・子・聖霊の交わりを注ぎ出す。使徒が、自分自身に基づいて、そのような豊かさを所有しているというのでは決してない。パウロは、聖晚餐をコリントの人々に伝える箇所で、『わたしは、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである』（I コリント 11：23）と書いた。彼は、主から——活けるキリストから、使徒として選び出され、権能を与えられ、装備されたのである。キリストは、彼の手に、使徒の祝福を与えられたのである。彼が同じ祝福を、聖霊において、すべての国民に、すべての国語に、すべての民族に、すべての時代に伝えるために』。¹³³

決して十分とは言えないが、私どもは、旧新約聖書全体にわたって祝福の問題を見つめてきた。これによって、聖書は、一貫して私どもに「祝福」を語ってくるものであることが確認できたと思う。聖書の「創世記」第一章は、被造世界に対する神の承認と祝福を語り、新約の最後の書ヨハネの黙示録21－22章は、神の祝福の完成を描いており、その間に、イエス・キリストの十字架と復活という聖書全体の中核的出来事が位置して、罪と死の呪いから、祝福された生への導き出しの出来事が語られるという構造になっている」¹³⁴のである。私どもは、この聖書に立つ信仰に生きて、祝福の源となる人生を祈り求め、神の祝福を宣教する共同体をかたちづくっていく使命を果たそうと願うものである。その意味ですべてのキリスト者は、祝福の祈りや祝福の言葉を豊かに持つことが事柄にふさわしい。

¹³³ W・リュティ『この日言葉をかの日に伝え』 p. 209

¹³⁴ 大野恵正（『聖書と教会』1983年8月号p. 6）

主日礼拝と祝福

私どもは、祝祷とは「神の祝福を求める祈り」だと説明されてきたことを手がかりに、聖書における祝福について考察した。そこで、あのアロンの祝福や使徒の祝福は、主日礼拝の中でどのように位置づけられてきたんだろう。私どもが問われているのは、主日共同礼拝の終結部分で、牧師によってなされてきた祝祷にかかわることだったのである。

主日礼拝における祝祷については、それが「祝福」を内容とするものであるという認識では一致していると思われる。しかし、祝祷が祈りであると説明されたり、宣言であると説明されたり、また、その両方であるような説明もある。このことは、かつて、私どもの牧師会においても話題になった。例えば、『キリスト教大事典』は、祝祷を「礼拝や結婚式・葬儀などの儀式の終に牧師が会衆のためにする祝福の祈り」だと説明する。だが、今橋 朗は、「祝祷は『祷』(祈り)という字が用いられていますが、神に向かって述べられる祈祷のひとつではなくて、神から会衆(神の民)に向けて発せられる宣言であります」¹³⁵ と言われる。そして、森野善右衛門は、「祝祷は、礼拝はこれでおしまいという宣言ではありません。祝祷は、この礼拝から私たちがこの世における一週間の生活の中へと派遣されていく、その派遣の始まりの宣言なのです。つまり、教会における主日の礼拝の終りは、この世における一週間の生活の始まりであり、祝祷とは、すなわち私たちのからだを神へのささげものとして生きる生活のための祝福の祈りなのです」¹³⁶ と説明す

¹³⁵ 今橋 朗『礼拝を豊かに 対話と参与』p.99。なお、加藤常昭は、『教会生活の手引き』の中で、「祈りではありません」と指摘している。

¹³⁶ 森野善右衛門『礼拝への招き』p.38。なお、さがみ野教会の「礼拝案内」(改訂版 1987 年)も、「祝祷(祝福の祈り)は、礼拝において、魂の養いを受けた一人一人を、再びこの世に遣わすという派遣の言葉です。神が会衆をこの世に遣わすに当り、祝福を宣言されるのです」と語り、森野氏と同様の理解を示している。

るのである。

祝祷を祈りと理解するか、それとも宣言と理解するか、これは小さな問題ではなく、祝祷の言葉や所作において大きな違いが現れる。清水恵三は、祝祷を祈りと受けとめ、独特な仕方を実践した。清水の証言である。「毎日曜の礼拝で、私は説教をします。礼拝の最後に祝祷をします。「願わくは、キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、我ら一同の上に限りなくあらんことを」と叫びます。壇の上には、上がりません。みんなの最前列で、前をむいて叫びます。祈りです。この祈りにすがらなければ、礼拝ができないからです。説教ができないからです。礼拝全体を、神さまにゆだねて終ります。イエスさまが私たちのために祈っていて下さることを仰ぎ見て、終ります。そこから出発して、再び生活の中に帰って行きます。私たちの根拠が、イエスさまの祈りの中にあることを感謝して、生きましょう」¹³⁷。他方、祝祷を、この世への派遣の言葉（宣言）として認識すると、対照的な形が現れることもある。「ある教会では、会衆は回れ右をして戸口の方を向き、背後から祝祷を受けて、この世へと散らされて出て行く姿勢をあらわしています」¹³⁸ というのである。私どもは、祝祷の言葉や所作をよく吟味し、事柄にふさわしい有り様を見出すことが大切ではないだろうか。

主日礼拝における祝祷は、「教会から神の言葉を語るように務めを委ねられた牧師が、神の名において祝福を告げる」¹³⁹ ものである。聖書に教えられているように、祝祷は、神の民の上に主の名を置くことなのである（民数記6:27）。コリントの信徒への手紙 二 13:13 から、多くの教会で用いられている祝祷も、三位一体の神の名によって祝福を告げているのであって、やはり、神の民の上に主の名を置くという意味を持つ。私どもが、主の約束に

¹³⁷ 清水恵三『手さぐり信仰入門』 p. 195

¹³⁸ 今橋 朗『礼拝を豊かに 対話と参与』 p. 46

¹³⁹ 加藤常昭『教会生活の手引き』 p. 123

信頼してそのようにするとき、主ご自身が祝福をもたらされるのである。それは、牧師に神秘的な力が与えられているというようなことではない。ローマ・カトリック教会などには、祝福を与える者がその内に「一種の聖化の力」(J・A・ヤングマン)を持っているというような認識があるらしい。しかし、私どもは違った理解に立っている。主の名をとおして、神ご自身が人格的に働くのである。¹⁴⁰ そして、この主の名を「人々の上に置く」ということは、祭司が手を上げるという所作によって示された。レビ記9:22に、「アロンは手を上げて民を祝福した」と記されているとおりである。¹⁴¹ この聖句の新英訳聖書(N. E. B.)訳は、「それからアロンは、民に向かって両手をあげて、彼らに祝福を述べた」(傍点筆者)である。そして、G・A・F・ナイトは、次のように註解している。「アロンは高い祭壇から階段を下り、両手を挙げる。しかし人々を祝福するのはアロンではなく、アロンを通して神がそうなさるのである。アロンの挙げた手は、言わばすべての人々の頭の上に同時に置かれているのである。このように、彼の両腕は天から地へ

¹⁴⁰ 私どもは、旧約聖書におけるヤーウェの名が持つてゐる深い意味を見てきたが、新約聖書においてはどうだろうか。私どもは、直ぐ使徒言行録3章の出来事を想起することができる。使徒ペトロが、足の不自由な人に、「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」(6)と告げると、彼は歩き出した。「この人を、イエスの名が強くしました」(16)ということが起こったのである。コンツェルマンが言うとおり、「このゆえに、その(キリストの)名を呼ぶこと、その名を唱えることが意味を持つ」(『時の中心』p. 295)のである。

¹⁴¹ 『聖書と教会』1983年5月号p.34参照。旧約聖書続編のシラ書〔集会の書〕50:20~21には、次のように記されている。「それから、(大祭司)シモンは降りて来て、イスラエルの全会衆の上に両手を差し伸べ、自らの唇をもって主の祝福を与え、誇らかに主の御名を唱えた。民は再びひれ伏し、いと高き方の祝福を受けた」。なお、シラ書の成立年代は、紀元前190~170年と見られている。

神の恵みを伝える一種の避雷針として働くようになるのである」。¹⁴²

また、ナザレのイエスが子供たちを抱きあげ、「手を置いて祝福された」（マルコ 10：16）という聖句も見出される。キリストのこの手を置く祝福の所作は、旧約聖書における祝福にならったものであろう。こうして、牧師は、礼拝出席者すべての上に、主の名を置くことを示すような所作を選ぶことが大切である。¹⁴³

また、神ご自身が働かれるという信仰を適切に表現するためにも、祝祷の言葉は、聖書からアロンの祝福や、使徒の祝福を用いるのが良いであろう。ただし、聖句を基本にして多少の変化をつけることは許されると思う。例えば、アロンの祝福は、「あなた」と単数になっているので、主日礼拝の場を考慮し、複数に代えることなどである。このようなことは、現実に行なわれている。¹⁴⁴

¹⁴² G・A・F・ナイト『レビ記』 p. 101

¹⁴³ 祝福の所作は、手を上げ、手を置くばかりでなく、他に、「ラバンは孫や娘たちに口づけして祝福を与え……た」（創世記 32:1）というのもある。

J・A・ヤングマンは、『古代キリスト教典礼史』の中で、「祝福の際に十字を切る」（p. 92）ことを紹介している。ドイツ語の segnen（祝福する）が、「十字を切る」という意味を持っていることと思い合わせて、考えさせるものがある。私どもが心にとめ、思いめぐらしてきた「祝福」は、キリストの十字架の出来事と深い結びつきがあるものだから……。なお、手をあげる所作といつても、掌が上に向いていたり、逆に下に向いていたり、様々なヴァリエーションが認められる。

¹⁴⁴ リマ式文による感謝の礼拝（ユーカリスト）の「祝福」を見ると、アロンの祝福を基本にした言葉になっている。そして、「あなたがた」と複数にしている（『洗礼・聖餐・職務』 p. 228～229 参照）。今橋 朗や加藤常昭たちにも同様の実践が見られる。例えば、今橋は、エフェソ 6：23～24 を「祝福」（祝祷）に用いたが、「兄弟たちに」というところを、「兄弟姉妹たちに」に変えている（『信徒の友』1994 年 3 月号 p. 34 参照）。

祝福を告げる者の声であるが、「聖霊の照明を求める祈り」や「聖書朗読」の声が礼拝出席者の耳に明確に届くよう求められているようなことは、当然考慮していなければいけない。創世記 27:7 で、イサクは次のように語った。

「獲物を取って来て、あのおいしい料理を作つてほしい。わたしは死ぬ前にそれを食べて、主の御前でお前を祝福したい」。イサクは、息子を祝福しようとして、「力を強める食物」を求めたのである。そして、これは事柄にふさわしいことだった。

「聖書において祝福は、人がそれを支配できないもの、むしろ祝福こそがその人を支配する力である。人間界においてのみならず、人間を越えて全ての生き物——被造物において活動する力である。祝福は成長のための力である」¹⁴⁵。祝祷は、そういう力を思わせ、礼拝者から「アーメン！」と健やかな応答を導き出すようなものであることが期待されると思う。

祝祷という表現は、どうしても「祈祷」を連想させる。主日礼拝の終結部分の祝祷は、やはり普通にいう祈りではないから、礼拝プログラムに「祝福」と表示するのも一つの選択肢であろう。加藤常昭が仕えてきた鎌倉雪ノ下教会では「祝福」と表示しているという。実は、「礼拝終了時の『祝祷』はもともとは『祝福』と言わわれていました」¹⁴⁶という指摘がある。

祝祷をする場所も、多様である。詩編 118 : 26 には、「祝福あれ、主の御

¹⁴⁵ C・ヴェスターマン『千年と一日——旧約聖書と現代——』 p. 52

¹⁴⁶ 古屋治雄『信徒の友』1995年9月号 p. 34。キリスト教礼拝史を回顧してみれば、初期の教会の礼拝の終結部分は、祝福の宣言、あるいは派遣の意味を持った祝福だったようである。J・G・デーヴィスは『現代における宣教と礼拝』の中で次のように述べている。「ローマ典礼においては、閉会部分（Dismissal）はひじょうに短く、『主、ナンジト共ニイマサンコトヲ』（Dominus vobiscum）という初めの言葉と、『神ニ感謝シタテマツル』（Deo gratias）という応答を伴った、『ユケ、コレデ終ワッタ』（Ite, missa est）という言葉で終わる」（p. 220）。

名によって来る人に。／わたしたちは主の家からあなたたちを祝福する」と語られている。牧師は、礼拝堂のどの場所で祝福するのであろうか。レイモンド・アバは、「祝祷のためには聖餐卓に進む」¹⁴⁷と指示している。中世後期に、聖餐式において祝祷が用いられるようになつたから、アバの言葉は、そういう伝統をふまえてのものであろう。牧師は、見識を持ってその場所を選ばなければならない。

祝福と職制

「旧約聖書における祝福」の項で明らかにしたように、本来、神の祝福の伝達は、様々な立場の人間によってなされた。しかし、やがて、歴史の経過にともない、神の民の生活の座が変化し、神の祝福の伝達と職制が深いかかわりを持つようになった。そのことについて、荒井章三は次のように述べている。「祝福を語るのは、親（創世記24：60、ベン・シラ3：9）、族長（創世記27章）、王（サムエル記下6：18、列王記上8：14、55）等、個々の人間であるが、古代イスラエルの場合、彼らがけつして自らの権威によって語るのではなくて、ヤハウェの名において祝福を与えるのである（申命記10：8、歴代志上23：13、民数記6：27）。しかし、時代が進み、氏族・部族的社會が解体し、宗教が、それとの結びつきから解消されるにつれ、祝福もまた祭儀の場においては、犠牲奉獻の場合と同様、祭司の職務となつていったと考えられる」。¹⁴⁸ そして、このようなことの実例として、私どもはあのアロンの祝福を見てきたのである。だが、この職制の歴史は、単純ではなさそうである。申命記10：8には、「そのとき、主はレビ族を選び分けて、主の契約の箱を担ぎ、主の御前に立って仕え、主の名によって祝福するようにされた。それは今日まで続いている」とある。また、21：5には、「それから、レビの子

¹⁴⁷ レイモンド・アバ『礼拝 その本質と実際』 p. 132

¹⁴⁸ 荒井章三『聖書と教会』1983年5月号 p. 31

孫である祭司たちが進み出る。あなたの神、主が御自分に仕えさせ、また主の御名によって祝福を与えるために、お選びになったのは彼らであり……」とある。こうした聖句は、新屋徳治などによって「二次的な挿入」と指摘されているものであるが、明らかに、「主の名によって祝福する」という大きな特権がレビ人たちに与えられたと主張している。そこで荒井は、「アロンは手をあげて民を祝福した。彼が贖罪の献げ物、焼き尽くす献げ物、和解の献げ物をささげ終えて、壇を下りると、モーセとアロンは臨在の幕屋に入った。彼らが出て来て民を祝福すると、主の栄光が民全員に現れた」（レビ記9:22～23）という記述をふまえ、民数記6:22以下の編集者が「アロンの子らが、アロンのみならず、モーセの権威を継承して、「祝福」の職務に携わることの正当性を強調していると考えることができる（歴代志上23:13も同じ。民数記3:6、8:13以下……参照）」というのである。¹⁴⁹ 興味深いことではあるが、今はこれ以上深入りすることはできない。¹⁵⁰

さて、職制についての私どもの基本的な理解は、カルヴァンが「ジュネーヴ教会信仰問答」の中で明快に述べている。次のとおりである。

問366 洗礼をさずけることと聖晚餐をつかさどることとは誰の権限ですか。
答 それは教会において教えをなす公の職務を負うているものの権限であります。なぜならば、み言葉を説教することと聖礼典を行なうこととは、結び合わされた事柄でありますから。

問367 それについて何か証拠はありませんか。

答 あります。われわれの主はその使徒たちに、説教をすることと同様に、洗礼をさずけるべき任務を特にお与えになったからであります（マタイ28:

¹⁴⁹ 荒井章三『聖書と教会』1983年5月号p.32

¹⁵⁰ レビ人と祭司の職務について、R・E・クレレメンツ『神の選民——申命記の神学的解釈』（船水衛司訳 教文館1984年）に興味深い叙述がある。

19～20)。また聖晚餐については、すべての人が主の手本にならって行なうべきことを命じておられます。また主は他の人々にこれを与えるために、教職の務めを作られたのであります。¹⁵¹

私どものカンバーランド長老教会も、聖書をとおして、神がこうした職制を与えてくださったという理解に立っている。教会憲法の 2.61 には、「みことばと聖礼典に仕える者の職務は、教会生活の中で、その責任と有用性において、独特である。神は人々を召し、このつとめに聖別される」(傍点筆者) と言い表されている。そして、この「みことばと聖礼典に仕える者」は、教会憲法において「教職者」と表現されている者、すなわち牧師のことである(教会憲法 2.62)。この牧師が、各個教会に招聘された場合、どのような責任を負うのか、教会憲法 2.63 に記されているところを一部列挙してみよう。

「a) 共同の礼拝を司式する。 b) 会衆の口として、彼らのために、また彼らと共に、神に祈る。 c) 会衆に向かって、聖書を読み、神のみことばを宣べ伝える (proclaims)。 d) 聖礼典を執行する。 e) 神からの祝福を人々に与える (bless the people from God;)。——牧師が、主日礼拝において祝祷 (blessing) をすることは、教会憲法に記されていることと合致している。問題は、伝道師が祝祷をすることができるかということである。

そこで、伝道師とは何かということを教会憲法によって確認しておきたい。それによると、教職志願者が神学の履修など、十分な準備期間を経、み言葉(福音)の説教をする資格を与えられると、彼は伝道師 (licentiate) と呼ばれるようになる。そして、この「伝道師が教職者の接手を受けるためには、その適性についての更に十分な証明を提示することが求められる」(6.13) と記されている。伝道師は、各個教会の「代務者」として奉仕することが可能であるが(6.205)、その場合、「小会議の議長、聖礼典の執行、結婚式の司式はできないが、そのほかの務めと働きを遂行することができる」(7.04) の

¹⁵¹ ジャン・カルヴァン『ジュネーヴ教会信仰問答』 p.136

である。¹⁵²

結 語

伝道師は、主日礼拝において、み言葉の説教をする資格を中会から与えられている。そのみ言葉の説教は、それが内包している事柄が深く、限りなく豊かであるため、様々に表現されているのであるが、教会憲法のように「キリストの福音を公に宣言する (proclaims)」ことだということも出来る(2.62 参照)。そして、「会衆に向かって、聖書を読み、神のみことばを宣べ伝える (proclaims)」(2.63 の c) ことと「祝福」は、密接な関係にある。ルードルフ・ボーレンは、次のように述べている。「聖書こそ、祝福を告げる言葉に満ちている……。このことは、キリスト者として生きていくためにも、説教というものにとつても、よく考えるべきことなのです。詩篇も山上の説教も、祝福を告げることから始めます。ヨハネの黙示録は、祝福を告げる言葉で始め、それで終わっています(1:3, 22:14)。祝福を告げる言葉の中に、福音が凝縮しているのです。なぜならば、『主イエスを通じて、あらゆる種類の人

152 日本基督教団には、その職制をめぐって激しい対立があった。それは、「二重教職制」の問題である。同教団では、伝道の准允——み言葉の説教資格を与えること——のみで聖礼典執行を許されない「補教師」と、按手をうけた「正教師」を、共に「教師」としてきた。補教師は、教会担任教師として働くことができ、そうなると「伝道師」と呼ばれる。そして、同教団には、生涯、伝道師として奉仕する人が出てきた。そのようなことが職制の理解に混乱を生じ、対立をもたらしたようである。他方、私どもカンバーランド長老教会は、いわゆる二重教職制というものを持ってはいない。その点、み言葉の説教資格を与えられた者を「伝道師」と呼ぶのであるが、互いに誤解のないようつとめたい。

教会憲法 6.203 の IV や、6.207 をとおして、伝道師は、教職者として按手されることを期待され、その準備期間を持つてはいる者なのである。伝道師と祝祷の問題を判断する際、考慮しなければならない事柄である。

間がしあわせになった』(ツヴィングリ) からです。ということは、つまり、キリストを語る説教とは、その性格からして、しあわせを告げること、お祝いを述べる挨拶だということなのです。¹⁵³ 私どもは、伝道師が代務者として各個教会に招聘された場合、主日礼拝において、祝福を内容とする「祝祷」を伝道師に認めて良いのではないだろうか。

日本基督改革派教会の『教会規程』の中の、「政治規準」第十九章説教免許のところを見ると、「第百十三条（説教免許を取得した教師候補者）」には、次のように記されている。「教師候補者は、中会より説教免許を得る。説教免許を取得した教師候補者は、説教及び祝祷を行うことができるが、礼典は執行できない」。——「説教及び祝祷」という把握の仕方に深い意味があるのである。

ところで、牧師が共にいるようなケースではどうだろうか。そのような場合は牧師と伝道師とが真摯な対話を持つようであって欲しい。そして、牧師が祝祷をするのも選択肢のひとつである。それによって、神から与えられた職制を大切にするという信仰を表現出来ると思う。また、伝道師には、牧師が、「牧師の靈的な指導性は、何かできるということにおいてではなくて、むしろできることにおいて、正直に自分の欠けを知って神にゆだねることにおいて、まさに土の器としての存在において神の力を表わす、そういう意味を含めて（教職の）機能を捉えていかないといけない」（東海林 勤）というようなことを思いながら、切実な折りをもって礼拝のつとめに仕えていることを理解して欲しいと思う。伝道師が主体的に自己抑制するのは、意味のあることである。私自身は、伝道師の時に主日礼拝における祝祷をした経験はない。

私どもは、しばしば考えさせられているのだが、提示された事柄を思いめぐらし、決定を下したりする場合、あれかこれかの二者択一的な視点だけで

¹⁵³ R・ボーレン『祝福を告げる言葉』 p.258

は生命力が失われてくることがある。その都度、relevance（適切性）を見出していく視点も持たなくてはいけない。日本中会には、伝道師を代務者として招聘した教会に、牧師たちが交代で聖餐執行の奉仕をしてきたあかしがある。これなどは、聖礼典を重んずるとはどういうことかを誠実に語りかける意味を持っていたと思う。そして、それはまた、職制を神からのものとして大切にうけとめる心をも問いかける、小さなあかしだったのではないか。伝道師と祝祷の問題も、新しく捉えなおしていく姿勢を保持していくことが大切である。

最後に、主日礼拝における祝祷や、人々の上に神の祝福を祈ることを教会全体で大切にしていくよう呼びかけたい。「礼拝で最後に祝祷がなされる時には、私たちは、キリストが、この二千年を貫いてその教会を祝福しておられるということを知るべきです。その祝福の力によって、教会は今までこの世のただなかにあって生きているのです。教会は風にそよぐ弱い葦です。その信仰は、弱い、ほのぐらい光を出している灯心 [イザヤ書 42 : 3] であり、もし彼が祝福しなければ、とっくにもう消えてしまっているでしょう」。¹⁵⁴ 教会が祝福の源としての使命を果たし、人々を祝福していかないなら、世界もまた闇になってしまうのではないだろうか。そのようなことを謙遜に思い、また大胆に祈り求めていきたい。「祝福を祈りなさい。祝福を受け継ぐためにあなたがたは召されたのです」（ペトロの手紙 一 3 : 9）。

キリストにあって。

¹⁵⁴ H・ゴルヴィツァー『イエスの死と復活——ルカの報告による』 p. 187

参考文献

- 岸本羊一・北村宗次編『キリスト教礼拝辞典』
(日本基督教団出版局 1977年)
- 大野恵正「いのちと自然 旧約神学的考察」、
『聖書と教会』(日本基督教団出版局 1988年12月号)
- 城崎 進「創世記釈義」、
『聖書雑誌』(日本基督教団出版局 1966年4月号、5月号)
- ゲルハルト・フォン・ラート『創世記』
(山我哲雄訳 A T D・N T D聖書註解刊行会 1993年)
- T H・C・フリーゼン『日約聖書神学概説』
(田中理夫、木田献一共訳 日本基督教団出版局 1969年)
- 浅野順一『静かにして恐れるな 予言者イザヤ』
(日本基督教団出版局 1974年)
- J・L・メイズ『レビ記・民数記』
(生原 優訳 日本基督教団出版局 1974年)
- W・リガンズ『民数記』(石川 立訳 新教出版社 1990年)
- B・マールシンク『民数記』(登家勝也訳 教文館 1995年)
- 『新共同訳 旧約聖書注解』(日本基督教団出版局 1997年)
- 荒井章三「民数記釈義」、
『聖書と教会』(日本基督教団出版局 1983年5月号)
- 後藤憲正『改革派教会の礼拝——第一部・礼拝式の構造——』
(新教出版社 1987年)
- 藤掛順一「カルヴァンにおける礼拝の改革」
『季刊 教会』(日本基督教団 改革長老教会協議会
NO.5 1991年11月、NO.7 1992年5月)
- ジャン・カルヴァン『新約聖書註解V 使徒行伝 上』
(益田健次訳 新教出版社 1968年)

- C・H・ドット『使徒的宣教とその展開』(平井 清訳 新教出版社 1970年)
- R・ボーレン説教集『祝福を告げる言葉』
(加藤常昭訳 日本基督教団出版局 1979年)
- 小林昭雄「マタイ神学からみた山上の説教」
- 『聖書と教会』(日本基督教団出版局 1971年2月号)
- 徳善義和『マカリオス——至福』(聖文舎 1990年)
- 川島貞雄『マルコによる福音書 十字架への道イエス』
(日本基督教団出版局 1996年)
- 大野恵正「子らは祝福されているか 教育の旧約神学的考察」
- 『聖書と教会』(日本基督教団出版局 1983年8月号)
- H・D・ヴェントラント著『コリント人への手紙』
(塩谷 饒、泉 治典 訳 NTD新約聖書註解刊行会 1974年)
- ギュンター・ボルンカム『新約聖書』(佐竹 明訳 新教出版社 1972年)
- 『新共同訳 新約聖書注解 II』(日本基督教団出版局 1991年5月)
- ジャン・カルヴァン『新約聖書註解 IX コリント後書』
(田辺 保訳 新教出版社 1963年)
- W・リュティ『この日言葉をかの日に伝え』
(井上良雄訳 新教出版社 1995年)
- 新屋徳治『申命記』(聖文舎 1972年)
- ジャン・カルヴァン『ジュネーヴ教会信仰問答』
(外山八郎訳 新教出版社 1974年)
- 『キリスト教大事典 改定新版』(教文館 1968年)
- 今橋 朗『礼拝を豊かに 対話と参与』(日本基督教団出版局 1995年)
- 森野善右衛門『礼拝への招き』(新教出版社 1997年)
- 加藤常昭『鎌倉雪ノ下教会生活の手引き』(教文館 1994年)
- 清水恵三『手さぐり人生入門』(日本YMC A同盟出版部 1977年)

- コンツェルマン『時の中心 ルカ神学の研究』
(田川建三訳 新教出版社 1972年)
- G・A・F・ナイト『レビ記』(水谷八也訳 新教出版社 1994年)
- J・R・ポーター『レビ記』(樋口 進訳 新教出版社 1983年)
- J・A・ユングマン『古代キリスト教典礼史』
(石井祥裕訳 平凡社 1997年)
- 『洗礼・聖餐・職務 教会の見える一致を目指して』(日本キリスト教協議会信仰と職制委員会 日本カトリックエキュメニズム委員会 翻訳
日本基督教団出版局 1985年)
- J・G・デーヴィス『現代における宣教と礼拝』
(岸本羊一訳 日本基督教団出版局 1978年)
- C・ヴェスターマン『千年と一日——旧約聖書と現代——』
(岩崎 修訳 聖文舎 1971年)
- レイモント・アバ『礼拝 その本質と実際』
(滝沢陽一訳 日本基督教団出版局 1983年)
- 「特集 なぜ教職なのか」
- 『聖書と教会』(日本基督教団出版局 1979年11月号)
- 「特集 現代の教職制の問題」
- 『聖書と教会』(日本基督教団出版局 1985年11月号)
- 『教会規程』(日本基督改革派教会 1976年)
- H・ゴルヴィツァー『イエスの死と復活——ルカの報告による』
(岩波哲男・岡本不二夫訳 新教出版社 1986年)
- 『旧新約聖書大事典』(教文館 1989年)
- 『聖書大辞典』(キリスト新聞社 1971年)
- 山崎順治『礼拝の守り方』(いのちのことば社 1982年)
- 「特集 礼拝」 『福音と世界』(新教出版社 1998年1月号)

長老のつとめ¹⁵⁵

引退教職者　うしおけんじ　潮田健治

序

この1ヶ月ほど講演の準備をしながら、私はここちよい緊張感を味わってきました。今回のお招きは、これから長老が選ばれ、小会（長老会）を形成していこうとしている泉伝道所に対する、皆さんからの励ましであると、受けとめています。

教会の質は長老で決まる

泉伝道所は、まだ長老、執事がいません。ですから、教会の運営は、現在、近隣の教会の長老たちによる泉伝道所運営委員会が担っています。その委員のお一人、希望が丘教会のK.O.長老が昨年、GA（カンバーランド長老教会総会）に出席されました。非常にご多忙の身で、「よく一週間も休みがとれましたね」と話をしましたら、ご本人は「GAから帰ってきたら机がなくなっているかもしれない」と笑って話しておられました。私はその時、半分は冗談だと思いました。しかし、半分は本気だらうと思いました。あれだけ忙しくお仕事をされていて、一週間も会社を休んだら、かなり危ないところまでいっているのではないかと思ったわけです。長老として、それだけ教会のことを大事に考えている。今年もまた二年目ということでGAに行かれますが、その調整がどれほど大変だらうと思います。昨年、一週間空けた“しわよせ”というか、す

¹⁵⁵ この原稿は、2002年3月21日、くにたち郷土文化館において行われた東京3教会（東小金井教会、国立のぞみ教会、めぐみ教会）主催「リーダー研修会」での講演をK.S兄（国立のぞみ教会）がリライトしてくださったものです。ご本人から快諾いただき、『紀要』への掲載となりました。心から謝意を表します。

べてが押せ押せになって、それをまだ引きずっているかもしれない想像する中で、今年もまた一週間は、本当に大変だと思うのです。しかし中会の代表として「私が行きます」と意思を表してくださった。そういう長老と一緒に、泉伝道所運営委員会をさせていただいていることは、私にとって本当に光栄なことだと思っています。

さて、いろいろと長老について書かれた本はたくさんありますが、ここに多田 素しろし牧師が書かれた『牧会百話』があります。牧会について書かれています。この中に、多田牧師のおられた高知教会の片岡健吉長老のことについて書いてあります。彼は衆議院議長をされた人ですが、初めて衆議院議長に推薦された時に、推薦をする人たちが、彼が教会の長老をしていることは当選の妨げになるのではないかと、暗に長老職の辞退を勧めました。そうしたら彼は、「私は衆議院議長であるよりは、教会の長老でありたい」と答えたと、伝えられています。¹⁵⁶

自分の仕事はいったい何なのか。確かに私たちの場合、ほとんどの時間は会社に、片岡長老の場合でしたら衆議院議長の仕事に割かれるかもしれません。そしてその仕事をまっとうしていくわけですが、同じ事をしていても、その出発点がどこにあるのかということは、これは、ものすごく違うのですね。

片岡長老は、礼拝の当番長老になりますと、日曜日の朝、教会の玄関で草履をそろえて、そしてその草履の縫つぐらいまでしていたそうです。教会の質は長老で決まるなあ、と思いました。教会の命は説教、御言葉ですが、教会の質は、その御言葉によって生かされている人たち(特に長老)によって決まっていくということを、私はこの講演の準備をしていてつくづくと思いました。

はじめにこういう話をもう少し続けますが、辻 宣道つじ のぶみちという牧師がい

¹⁵⁶ 『牧会百話』多田 素、新教出版社 1980 年、3 版 P. 497

ました。この牧師は、お父様を戦争中、当局の弾圧を受けて亡くされています。ホーリネス教会の牧師をしていて捕らえられ、拷問を受け、獄死されたのです。息子であった宣道牧師は、とても辛い思いをされています。教会が時の権力によって解散させられて、食べるものにも困って、役員だった人の家に行って、農家であったのでしょう、かぼちゃをひとつ分けてくれないかと頼みに行ったのですね。そうしたら、何という言葉が返ってきたか。「お宅にわけてあげるかぼちゃなんてないねえ」と、その家で言われたのです。その人は以前、教会役員でもあり、子ども心に本当によくなついていた人だったのに、そう言われて、手ぶらでとぼとぼ帰っていく、その子どもの気持ちが分かりますか。そして、彼は絶対に牧師になんかならない、そう思いながら……。しかし、やはりお父様と同じ、牧師になっていくのです。ここが神のなさることだと思いますが、牧師になった時に決意したことは、「ちょっと何かあった時に倒れてしまうような、そんな教会ではない、本当に教会と言える教会をつくらなければいけない。しっかりととした役員を育てていかなければいけない」ということでした。自分の原体験から、「何があっても倒れない教会をつくるのだ」という決意が、ここにある『教会生活の処方箋』に書かれています。¹⁵⁷

何があっても倒れない、そのような教会を建てるのは、役員の質にかかるている、そのことを思いながら、前置きが少し長くなりましたが、今日の学びを皆さんと分かち合っていきたいと思います。

何を話さないか

今日は時間が限られていますので、はじめに、何を話さないかを断つ

¹⁵⁷ 『教会生活の処方箋』辻 宣道、日本キリスト教団出版局 1981年 P8

ておきます。長老制の歴史について、お話する時間がありません。また、長老制とか長老主義とは何かという原理的なこと、システムについて、あるいは聖書の釈義的なところについても、今日のお話では触れることはできません。

今日のお話は、長老、執事のつとめ、今自分が役員をしている、その役目は何なのか、というところに焦点を絞ってお話していきたいと思います。ですから、今日お話しないところは、また機会を改めて皆さん、勉強されるとよいと思います。

定住のつとめ

そうは言っても、長老という仕事がどのように生まれてきたのか、なぜ長老という職務があるのかということは、これは最低限お話しておかなければならないことです。

聖書—福音書や使徒言行録—を読んでいきますと、最初は、教会形成における“使徒のつとめ”というものがありました。その使徒たち12人が初期の教会を形成していくのですが、使徒だけでなく他にも「福音宣教者」「牧者」「教師」という職があったようです。エフェソの信徒への手紙4章11節を読みますと、当時の教会の中でそういう原初的な職制があったのだ、と思います。あるいはローマの信徒への手紙12章6節以下を読みますと、「預言（する者）」「奉仕（する者）」「教える人」「勧める人」「施しをする人」「指導する人」「慈善を行う人」と、このように並べられていて、これも教会のつとめとして考えられて、やがて整えられる教会の職制というかたちへと進んでいく芽生えなのかなと思われる部分があります。その他、コリントの信徒への手紙—12章27節以下も参照していただきたいと思います。いずれにしても教会の基礎を作った人々は、初め12人でした。この12人が各地を転々とし、そこで御言葉を宣べ伝え、さまざまな奉仕をします。やがてそこに教会がつくられ

ていきます。そうして次第にその土地に生きる人たちが、使徒のつとめを担っていきます。12人が担っていたものが、その土地に生きる者たちの中に委譲されていく、ことになるのです。いずれ12人が全員いなくなるわけですが、そうしますと、その土地ごとに12人の使徒たちが担っていたつとめを担う、いわば“定住のつとめ”が生まれました。このように自然なかたちで移っていくわけです。

つとめの分化

それではこの“定住のつとめ”は何かということが、たとえば皆さんよくご存知の、使徒言行録の6章に出てきます。教会に「日々の分配」のことで問題が起こってきました。食事の問題、食べ物の分配、やもめの生活、これをどうするのかということが起ってくるのです。祈りと御言葉の奉仕とは別に、日々の分配のことで食事の世話をする者たちを立てていくという消息が、そこに書かれています。

最初は使徒たち（御言葉に仕える者たち）が、食事のお世話も合わせてていたのでしょう。しかしぬく次第にそれができなくなってしまったので、そのつとめを分けていく。そういうことになったわけです。“定住のつとめ”と言うからには、そこに住んで、御言葉に仕える。そこで教会を建てていく時に、その土地で具体的な諸問題に仕える者も、出てきたということです。

それから使徒言行録20章28節を見ますと——これはエフェソの長老たちを招いて、パウロが告別の言葉を伝えるというところですが——その中で、「神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命」されたのだとあります。この「あなたがた」は、長老のことです。長老を呼び寄せた、と書いてあります。“定住のつとめ”として、長老がいたということですが、この長老たちはここで「監督者」とも呼ばれるわけです。あるいは「世話ををする」人、つまり「牧者」だ

とも呼ばれています。さらに、「神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねる」(使徒 20:32)とも書いていますから、神とその恵みの言葉とに仕える者、すなわち「教師」とも、ここは読んでもよいところだと思います。恵みの言葉、神の恵みの言葉に仕える者、教師として、長老が立てられています。そうしますと、長老が監督者であったり、世話をする者(牧者)であったり、教師であったりすることになります。

最初は使徒たちが一身に担っていたつとめが、やがてそこに住んでいた人に様々なかたちで分けられていった過程が、この使徒言行録を読んでいくと見いだされます。つとめの分化が起こった、ということが分かります。

つとめの豊かさ

さらにテモテへの手紙一5章17節には、「御言葉と教えのために労苦している長老たちは、二倍の報酬を受ける」と、同じ長老でも少し役割の違う職務がここで前提されています。そうしますと、日々の分配、食事の世話をする者、それから御言葉の教えのために労苦している長老たちがいると思えば、そうでない長老たちもいます。教会の働きを豊かに担っていく、何か仕組みのようなものがあるのです。“つとめの豊かさ”と言ったらよいかもしれません。まだこの最初の時点では「執事」とは呼ばれていませんが、生活面で仕える者、配慮する者がいました。御言葉に専念して仕える者もいれば、ただ長老と呼ばれる者もいました。時には監督とも呼ばれる、生活面で仕える者、配慮する者もいました。そのような“つとめの豊かさ”があることが、聖書を読むと、私たちに伝わってくることです。

重ねて言いますと、この“つとめの豊かさ”ということが、だんだん

“つとめの一本化”になっていきます。¹⁵⁸ 長老がやがて「司祭」と呼ばれるようになります。そして長老の中でも監督の仕事をする者は司祭より上に置かれて、「司教」とか「主教」と呼ばれるようになっていきます。それではあの食卓の世話をする者はどうなったかというと、彼らは司祭の下に位置付けられる「助祭」と呼ばれるようになるのです。司祭を助ける者、補助者ですね。上から順に司教があって、司祭があって、助祭があります。やがて教会の歴史の中で、上はさらに「大司教」、そしてその上にさらに「教皇」がおかれるようになります。下は助祭の下にさらに四段階の位がおかれるようになっていきます。こうして本来豊かであった一つのつとめを、上から下への一本化する傾向が起こってくるわけです。教皇は、キリストの地上における代理人になります。そのかたちが一番上で、そこから一本に筋を通す流れ、位階制いきいせいが生まれてくるわけです。元々のつとめの一つの豊かさからすれば、何と言つていいでしょうか、人間がむきだしになってくるといつていいでしょうか。制度化です。そのようなかたちになるのです。

すると、そういうかたちに反対する人も出てくる。たとえば、日本でいうと「無教会」と呼ばれる人たちが出てきます。制度なんていらない。私たちは神の言葉に聴くのだ。それで充分なのだ、と。ところが、そのように制度を否定した人たちの中でどういうことが起こってくるかと言いますと、これが非常に人間っぽくなります。

最近のキリスト新聞に、矢内原 忠雄やないはら ただおの集会の回顧が書いてありました。これを書いた人が、矢内原の集会に参加したい、入門したい、とお願いするのですが、断られます。しかし、空いたら入れてあげると言わ

¹⁵⁸ 『教会の政治』吉岡繁、小峯書店 1872 年 P50-54、
『長老のつとめ／長老制の歴史』久保義宣、渡辺信夫、改革社 1976
年、P39-41

れました。こうして、あきらめずにお願いし続けるうちに、ついに「空きができたから入れてあげる」というわけで、矢内原の自宅で行われた集会に出席しました。講義に出席すると、「命がけという感じでした。先生が二階へ上がってこられる音を聞くと、みなシーンとなるのです」。そう書かれていました。¹⁵⁹ 制度を否定して、神の言葉だ、と始めたこの無教会ですが、このように非常に人間的な権威が前に出てくるのです。先生が「おいでになる」と皆、シーンとなる。集会に入っていいかどうか、みな先生が決めるわけです。

ですから、お話してきたように制度がすべて整っているとしても、あるいは制度が全然ないかのようにしても、いずれにしても人間がむきだしになってくるのです。そこに、つとめの豊かさは失われていくのです。

そういう中で申しあげたいのは、私たちが教会で長老、執事を立てることは、神の言葉の豊かさ、神の働きの豊かさをしっかりと受け止める“かたち”なのだということです。そこのところをふまえておかないと、どんなに長老のつとめだ、執事のつとめだ、と言っても、意味のないことになってしまいます。教会は初めから御言葉に仕えるつとめしか知らなかつたのです。

先ほど、使徒言行録6章のところで、食事の「世話」と、祈りと御言葉の「奉仕」がありましたけれども、実は両者は同じ言葉です。食事の世話という「世話」は、ディアコネオーという言葉で、これが人間になるとディアコノス、「奉仕する者」という意味です。祈りと御言葉の「奉仕」という言葉も、これもディアコニアという言葉が使われています。

つまり、かたちは違っても御言葉に仕える仕方は、色々あるというこ

¹⁵⁹ 『キリスト新聞』2002年3月16日2768号、『教会と長老－東神大パンフレットNo.21』竹森満佐一、東京神学大学出版委員会1986年』P76

とです。御言葉に仕えるディアコニアには色々あったのです。

しかしその豊かなものを、いつのまにか上下に一本化してしまう、あるいは人間中心にしてしまう、こういうかたちが歴史の中にあることを私たちはよくよくふまえておかなければなりません。御言葉に仕えるつとめ、それは、生活のお世話をするにしても、あるいは牧師として説教するにしても、共に同じ御言葉に仕える、つとめの豊かさの中にあるということを、受け止めておきたいと思います。

そしてそのつとめは制度によって支えられるものではありませんし、何か人格的に優れた人が支えていくことでもありません。神が御言葉で私たちを召されるのに対して、私たちの方では信仰告白をもって応答していく時（神が私たちを召されたのだという確信がある時）、そこにディアコニアという、神に仕えるわざが展開されていくという理解が、とても大切なことだと思います。

教会憲法に従って

さて、ここからカンバーランド長老教会の『教会憲法』に従って長老のつとめについてお話を進めていきます。長老のつとめについて触れているところをざっと見ていくことにします。

教会憲法**2. 3 1**では、長老は「役員」であると書いてあります。執事とともに、役員です。

同**2. 5 1**は「各個教会の政治」のところですが、役員である長老たちがかたち作る「小会」のつとめには、共同の礼拝、キリスト教教育、交わりと活動、証しのわざ、見舞い、家庭への牧会的配慮、スチュワードシップと教会財産に対する責任、訓練、各個教会の範囲を超えるつとめへの参与、と書いてあります。これは、あの**4. 5**に、具体的に小会の責務ということで展開されています。

それから長老個人については、**2. 7 1**「教会の政治と指導にたずさ

わる」「牧会監督に当たる」人である、とあります。それから**2. 7 3**のところで再び、長老はすべてのキリスト者と共に召しに与っているが、特に「人々を指導する責任」が委ねられている、ことが書かれています。また「長老は善良な人格」をもっているということも。

こうなると、私たちはこういうことに耐えられる人はいないだろうと思うのですね。恐れてしまう。しかし**2. 7 4**に、こうあります「この職にふさわしい学び……をしなければならない」「学習を続けなければならない」。

初めからこの仕事に耐えられる人はいない。しかし学習する者、学習し続ける者というところが大事で、自分は何か持っている、分かっているとあぐらをかいているのではなく、常に開かれた心をもって学習する者こそが、結果的にこのつとめにふさわしいということなのだろうと思います。

長老のつとめ

さて、具体的に今日、長老のつとめを考えるにあたっては、**4. 0 0**「小会」、ここにあるつとめの内容を見るのがよいと思います。

4. 1「長老は少なくとも2名いなければならない」。長老は1人では長老の仕事ができないのです。牧師と共に2名以上の長老がいて、「小会」という会議を通して、長老の仕事をするのです。

その仕事の内容はどういうものであるかと言うと、**4. 5**に書いてあります。私は、今日、これを3つにまとめてみました。

第1に、御言葉が正しく語られるためのつとめ。

第2に、御言葉が正しく聴かれるためのつとめ。

第3に、御言葉が正しく宣べ伝えられるためのつとめ。

このようにまとめてみました。そのようにひとつの流れとして理解すれば理解しやすいかなと、こう思ったのです。

I. 御言葉が正しく語られるために

御言葉が正しく語られるためのつとめにはどのようなつとめがあるかと言いますと 4. 5 では a) 牧師招聘のつとめ、g) 長老執事を任命するための接手、k) 無牧のときにどうしたらいいか、などがあります。それを以下、お話したいと思います。

① 牧師の招聘

はじめに、牧師の招聘についてです。

招聘と言うからには、そこに牧師不在という現実があります。いろいろな状況の中で牧師が不在となるのです。牧師が不在になってしまっても、小会はあります。牧師が不在でも、小会はあります。長老たちは、その土地に住んでいます。

すると、そこにひとつの誤解が生まれます。錯覚が生まれるわけです。牧師を招聘するにあたって、牧師、イコール「使人」という意識（潜意識）です。自分たちはずっとそこに住んで、土地の人間である。教会のことはよく知っている。たまたま、いろいろな理由で牧師がいなくなってしまったので、次の牧師を招聘するのですが、牧師は後から来る者です。後から来る者を、先にいて教会のことをよく知っている自分たちに奉仕させるというか、何か使人のように牧師を考えてしまう錯覚というか、誤解というか、そういうものが生まれるわけです。

「先生、うまくやってください」 こんなふうに言った時に、「うまく」とはいったい何なのか。招聘した牧師にうまくやってくださいというのは、「自分たちの気に入るように」ということでしょうか。あるいは「先生におまかせします、先生の思い通りにやってください」 こういうふうに言った時に、そこにどういう思いがあるのか。思い通りに牧師にやってもらって、うまくいかなかったら、牧師が思い通りにやった結果うまくいかなかったのだと。人数が集まらないと、先生、もっとしっかり

伝道やってください、と。何か、「先生」に責任をかぶせるようなことになってしまいます。

小会はそこで何をしたのか、ということですね。はじめにもお話したように、教会に委ねられたつとめは、多様性があるにしても、御言葉に仕えるつとめでした。小会はここで、招聘した教職者、牧師から、日々、自分たちが御言葉を委託された者だということを確認しながら共同的なつとめにあたるのが、小会のつとめ、長老たちのつとめです。

それを何か、「うまくやってください」「思いどおりにやってください」というように言うことで、ひょっとしたら小会の（長老の）つとめを回避、または逃避している、ことを考えておかなければならぬのです。長老は、牧師とともに御言葉に仕えるという共同のつとめにあたるのであります。小会という会議を通して、その構成員として共同的につとめを担っていくのが、長老です。

共同的とは、まず対等であるということです。長老も教職者と対等に議論ができます。対等とは、向き合う関係と言い換えてもいいかもしれません。向き合う関係、論じ合う関係です。ですから招聘したらあとはおまかせとか、うまくやってくださいとかいうのではなくて、小会の構成者がお互いに向き合い、論じ合うことが（もちろんその中心には御言葉があつて、御言葉がこの教会に何を求めているのか、そのことを真剣に論じ合っていくことが）、まず長老のつとめの第一だということを申しあげておきたいと思います。¹⁶⁰

¹⁶⁰ 辻 宣道、前掲書 P26 以下 『カルヴァンの教会論』 渡辺信夫、改革社 1976 年、P264-268

② 説教（御言葉）への責任

それから、継続的な御言葉への責任を考えなければいけません。牧師を招聘したら、もうそれでつとめが済んだということではなくて、継続的に御言葉の責任を担っていくことも、長老の大切な役割になっていくわけです。

竹森 満佐一牧師がオランダの教会に行ったら、二階くらいの高さに説教台があり、二階への階段のところまで長老が牧師を案内していくそうです。そこで握手をしたあと、牧師は説教台まで上がっていって、長老は席の方へ戻っていく。説教が終わると長老は迎えに行って握手をして席の方へ戻る、ということを体験したそうです。その教会の人からあとで聞いた話では、その日の説教が福音的でないと、長老は迎えに行かないのだそうです。もちろん握手しない。この教会はそういう教会ですよ、と聞かされて、竹森牧師はびっくりしたということです。¹⁶¹ 実際はどうなのか私は分かりませんが、それだけの気迫を我々は持っているのだということを、その人は伝えたかったのではないかと思います。牧師に対して、御言葉に対して、それだけの責任を長老は持っているというのでしょうか。

そうすると、今日ご参加の皆さんの中に長老さんは何人いらっしゃるでしょうか、自分はそんなことはできない。素人の自分にそのような能力はない。礼拝が終わったあとでそういう意味で握手できるかできないか、そのような判断をしなさい、と言われても自分はできない。だいたい牧師に対してそんな失礼なことはできない。そういうことがいろいろ出てくると思うのです。

少し極端なお話を紹介しましたが、しかし長老が持っている御言葉に対する責任は、やはり、そこにある、と思うのです。「今日のお話よか

¹⁶¹ 竹森満佐一、前掲書P98

ったですね」 そういう、人を褒めて終わりにすることではなく、その語られていることが、教会が大切にしてきたことを大切にして語っている。それを自分たちもまた大切に受け止めたところで握手ができるかどうか、ということです。握手をすることは、それだけ御言葉に対する責任があるということです。

御言葉への責任ということですが、たとえば、皆さんの中から中会の代議員になる方が出でますね。今、中会代議員になっている方もいらっしゃいます。中会会議に出て行きますと、新しい教職者が誕生した時に按手あんしゅ（頭に手を置く）をする。教職者の按手なら中会の教職者たちが按手すればよいのかというと、そうではないのです。「中会代議員」の手が置かれる（6. 3 6）。つまり、皆さんが教会で長老に選ばれるということは、やがて中会の代議員になる時、教職者の任職に際して教職者になる人の頭に手を置くのです。それが皆さんのつとめになります。中会の代議員になる、ならないに関わりなく、長老には、こうして御言葉に仕えるつとめがあります。

「治会長老」という言葉があります。教会憲法では「治会長老」とは訳されていません。それでも、勉強された方が用いるかもしれません、私はこの言葉には、「？」をつけて受け止めています。「治会」という言葉について、説教は牧師にしていただいて、長老は群れを監督、管理するほうをしましょう。そういう意味で「治会」、つまり教会を治めるというように理解しているとしたら、ずいぶん違うのではないかと思います。

長老には、管理の責任と共に、御言葉の責任があります。ですから、「自分は治会長老だから……」と言う時、その意味が自分は監督、管理する者であって、御言葉については素人であるととらえているとしたら、それは違うのです。教会憲法の中では「治会長老」とは翻訳されていません。他教派でこの言葉を使うとしても、そして実際、長老に監督、管

理する責任がかなりの比率であるにしても、長老のつとめは御言葉に仕える責任と一緒にになされるものです。また牧師も、御言葉に仕えること、説教だけをしていればよいのではなくて、教会の管理、群れを治める責任もあります。両方のつとめがあるわけです。

では、御言葉が正しく語られるための責任を、長老として実際、どのように果たすことができるのでしょうか。

平生あまり意識していないので、難しい問題と言えば言えますが、たとえば牧師の思想とか、一方的な主義主張、好みによって、聖書が解釈されるかもしれない。あるいは不勉強、いかにも勉強していないということが起こるかもしれない。あるいは、老齢によって神学的な思索が充分にできなくなる時が来るかもしれない。いずれにしても、ポイントは、聖書が「正しく」説かれているかどうかということです。自分に納得いくかどうかではありません。^{ため}為になるということでも、分かりやすいということでも、ありません。「正しく」説かれているかどうかということです。

それをどうやって見分けるか。それが小会の責任です。もし自分がいつも聖書を読み、信仰の生活をし、礼拝に出席しているならば、そういうことは自ずとできると思います。神学校に行くとか行かないとかではなくて、自分で聖書を読み、礼拝を大切にすることによって（礼拝を休まないことによって）そこで語られている言葉が何か、見えてくる。私はそういうふうに思っています。このように小会（長老たち）には、御言葉に仕えるという、大事なつとめがあります。

③ 礼拝の招集

「無牧のときのつとめ」をお話します。無牧のとき、すべてのつとめを小会は行います（4. 2）。特に、礼拝の招集をするのは、小会です。

礼拝の招集者は誰なのかということです。もちろん、礼拝の式次第の

最初に招詞があって、そこで御言葉が読まれる。これは、神が礼拝を招集するという考え方です。でもそこに具体的には礼拝計画があり、礼拝式が用意されている。そこにはばらばらの時間に集まるのではなく、その教会には教会の礼拝時間が決められているとなると、いったい誰がそういうことを決め、用意するのかとなります。主催者がいるはずですね。礼拝の主催者は誰なのか。そこで、無牧のときには小会が礼拝を招集する、となっています。つまり、牧師がいる場合でも、牧師が礼拝を招集しているということではないのです。牧師がいてもいなくても、礼拝は小会が招集している。そういう意味においては、こういう言い方が適切かどうかは分かりませんが、礼拝の主催者は小会です。

神の言葉を見るかたちにする、神の民がそこに集まることができるようになるのは小会の責任です。ですから、当たり前のことですが仲間が礼拝にきたら、もう長老たちは時間前にはそこにいて、祈る者、礼拝する者としての模範とななければなりません。

しかし、一般に主催者というイメージは、どのようなものかと言うと、集会が始まっても中に入らずあれやこれや動き回っている。辺りをキヨロキヨロ見回している。そうではありません。礼拝の招集者、主催者は、誰よりも祈る者、よき礼拝者であるという意味です。

II. 御言葉が正しく聴かれるために

長者の仕事の二つ目は、「御言葉が正しく聴かれるため」です。正しく語られた言葉は、また、正しく聴かれなければなりません。これには、会員受け入れと転出の問題、教理と訓練に解決を与えること、子どもの洗礼と育成が含まれます。こういうことが、御言葉が正しく聴かれるための長老たちのつとめだと思います。(子どもの洗礼と育成については、今日は触れる時間がありません。改めて学ばれるとよいでしょう。)

① 会員の入会、退会

まず会員の受け入れのことですが、教会憲法 2.72 に次のように書かれています。

「長老は、その奉仕する教会の人々の世話をし、また指導するのであるが、特に、イエス・キリストを主または救い主と告白していない人たちや、靈的に弱い人たち、信仰の指導が必要な人たちを心にかけなければならない。家庭を訪問し、家の人たちと共に、またその人たちのために祈らなければならない。特に、病気の者や、近親者を失った者、困窮者のために祈らなければならない。ことばとよい模範によって人々を励まし、人々がそれぞれの時間や賜物、そして金銭の忠実な管理者として教会における礼拝、学び、証し、奉仕に参加できるようにするのである」

皆さんはこの言葉を使うかどうか分かりませんが「問安」という言葉があります。安否を問う。電話するにしても、手紙を書くにしても、訪問するにても、安否を問う。主にあって元気に生きているかどうか、生かされているかどうか、問うことです。長老のつとめは、一言で言って問安です。会議をやっていれば、それでつとめが済むのではありません。一人一人と出会い、会話したり顔色を見たりして、健康はどうか、信仰は豊かに養われているか。あるいは家庭はどうか、仕事はどうか。そういういた事柄を感じ取っていく。その大切なつとめがあると思います。

皆さんは、聖餐の時にどのようにされるでしょうか。たぶん長老たちが皆さんのところを回ってパンとぶどうジュースを配っていくのではないでしょうか。これは便宜上そうしているとしても、私は、しかしこのことで人々の間を行き巡るという長老の大切なつとめをそこに体現しているのではないかと思うのです。一人一人にキリストの言葉を届けていく、その人に触れていく、そういう人々の間を行き巡るということが日常的になされることの、これはとても象徴的な行為ではないかと思っています。

それで、そのように皆さんの中を、礼拝者の中を長老が行き巡る時、はじめて、会員の受け入れのつとめを行うことが可能になるのです。あるいは転出の問題ですが、その事情を、長老としていつも群れの中を行き巡っている時に、はじめてその事情が分かるのです。行き巡ることがなく、その人と話したこともないまま、または名前と顔が一致しないまま、会員の受け入れとか転出の手続きは、できないわけです。長欠者、病む者、信仰の危機にある者、夫婦の危機にある者、遠隔者、高齢者に配慮する、いろいろなことがあります、この行き巡っていることが大事です。誰を会員にするのか、誰が会員にふさわしくないのか、これは、日ごろ行き巡っていることなくしては、判断しようのことだと思います。

会員の受け入れにあたって、長老たちは「しもん」をします。¹⁶² この「しもん」は、私は「試問」（試験をするという意味）とは書かない。議論はあると思いますが、文字にするなら「しもん」もしくは「洗礼面接」と書きたいと思います。何か試験のように、あなたは何点以上とったからあなたは洗礼を受けることができるわけではないのです。むしろ、その人が教会生活の中でどう生きてきたのか、聖書をどう受け止めてきたのか、どう受けとめて行こうとするのか。その受け止め方が大事です。点数の問題ではない。きちんと答えられなくてもいいのです。これから

162 「試問」が伝統的には正しいと思いますが、教会憲法には、いずれの言葉もでてきません。礼拝指針では「洗礼の執行」の中で「牧師と小会から指導を受けるようにすることが望ましい」とされています。そういうわけで、私の牧会的な想いでは「試問」ではない、と考えています。ちなみにインターネット上を見ると、「面接(諮問)」と書く教会もあります。（日本基督教団 椎名町教会、2024年3月27日確認）

主イエスの前に、教会の中で、どういう姿勢で生きていこうとしているのか、そこで遣り取り（指導）をして、信仰の初めと方向を確認するのです。その時だけではない。これからもその遣り取りは続く、その初めです。それをするのは長老たちです。つまり、そのことで信仰と不信仰を見分けていく、非常に重たい責任があるのです。

そして、その「ものさし」、決まった評定項目があるかというと、ないのです。では、どうしたらそのような大事な判断ができるのか。もう一度言いますが、長老自身が正しく説教を聴いていること。正しく説教を聴いている人が、これから洗礼を受けたいという人がその事柄にふさわしいかどうか、彼／彼女が正しく説教を聴いているかどうかということの判断ができるのです。そういうことは、自分もその人と一緒に説教を聴いていなければ判断できない。自分自身が礼拝者であり、他者と共に礼拝を大事にする時に、おのずと判断ができるのです。のために「問安」という言葉を使えば、まさにその通りです。いつも群れの中を行き巡っていることがとても大切なことです。「信仰は聞くことによって」（ローマ 10：17）とパウロは言っていますけども、だから人がどのように聴いているかということを、一緒に聴いていくことで、初めて理解することができるわけです。長老自身、「正しい聴き手」であるかどうか。

② 教理と訓練

御言葉が正しく聴かれるために、長老が負っているつとめの二つ目にお話したいことは「教理と訓練」教理と訓練に対して解決を与えることです。これは、『カンバーランド長老教会信仰告白』に含まれている『訓練規定』の最初のページを見ていただくと分かります。「訓練」は、

ここに書いている内容を指しています。¹⁶³ いま具体的に読みませんが、ああこういうことなのだと。ここは改めて読んでいただけたらと思います。

昔は、「戒規」と言っていました。「戒める規則」で「戒規」。ただし、いずれにしてもそこで何かこの世の基準を持ってきて、あなたはどうのこうのと裁くことではありません。会員の間で御言葉が正しく聴かれているかどうか、もしそうでないとしたらどうしたらいいのか。そういう手続きが書かれています。そういうつとめを、また長老たちが担っています。これも、御言葉が正しく聴かれるために大切な事柄です。

「訓練」は、魂への配慮の問題です。本当にその一人の人が御言葉を正しく聴いて、そして生活をそれによって成り立たせているかどうかに配慮するのです。

たとえば初めにもご紹介した『牧会百話』に、小会の記録が載っています。そこにこういうことが書かれています。¹⁶⁴ 「ある人のことですが、信仰がだんだん冷めているような感じがあった。神だけがご存知と思って委ねてずっと祈っていたが、今年10月、こういうことがあった。水害地の視察のために一緒に10日間の旅行をした。日夜寝食を共にしたわけですが、何とその人は朝夕、お祈りをしなかった。聖書も携帯していなかった。そして話が信仰のことには及ぶと、本人いわく、自分はキリストを神の子と信じることが最近非常に難しく感じているという話

¹⁶³ 訓練規定 1.1 「教会における訓練とは、違反者と教会の双方への配慮を、愛と援助の精神をもって建徳的に表現するものである。訓練の目的は、教会の生活と働きを秩序正しいものとし、また、教員の靈的成長を導き、個人や教会会議の欠点や過失、違反を正すものとなることである。(以下略)」

¹⁶⁴ 多田素、前掲書 P63

になった」。これを聞いた小会はどうしたか。この人のところに誰々さんを訪問させて、信仰上の有様を調査し、勧告した結果、適当な処置をとったことが、書いてあるのです。その人の信仰のあり方が、小会で話されている。ただし旅行に聖書を持って行ったかどうかは本質のことではなく、その人の生活の中で神によって生かされている姿勢が弱くなっていないかどうかという問題が、小会で大切にされています。そしてどうしたらいいか、小会で話して、人を送って、その人とよく話をするわけです。これは明治の時代の話ですが、そのようにして教会はつくられてきたということ。そしてその大切なつとめに長老は遣わされていることを、私は皆さんと共に受け止めておきたいのです。

III. 御言葉が正しく宣べ伝えられるために

お話の流れとして次に長老の仕事の三つ目、「御言葉が正しく宣べ伝えられるために」ということをお話をします。教会憲法4. 5で長老たちの責務に、執事会の牧会・監督、スチュワードシップ、教会の働きの進展と拡大、上位会議との関係などがありますが、私はこれを小会の一員であること、および中会の一員であること、この二つにまとめて、お話をします。

① 小会の一員であること

『罪なき者の血を流すなかれ』という本があります。第二次大戦中、フランスのある村に、ナチスの迫害を逃れてユダヤ人が逃げてくるのですが、村人は彼らを受け入れて、国外脱出させました。その村の出来事が書かれています。村の名前は、ル・シャンボン・シュル・リニヨン。1998年朝日新聞に「20世紀からの伝言 第3部 — 七つの村の記憶」という見出しがつけられた記事がありましたが、この本で紹介されている村のことでした。そこに逃れてきたユダヤ人は一時ここで受け入れら

れ、そしてナチスの軍隊が来る前に村人は彼らを逃がしていくのです。本の最後のところですが、ル・シャンボン・シュル・リニヨン村が、周りのル・マゼ、その他の村と共に「コンシストワール・ド・モンタギュー」に属していたと書かれています。「コンシストワール」を「教区」と、そこでは訳されていましたが、私たちが言う「小会」のことです。¹⁶⁵このような緊迫した歴史的状況の中で、小会（長老たち）がひとつの會議を機軸にして、そこで命がけの決断をするわけです。そして小会の指導のもとにこの村が動いていたのです。その決定がこの村の家々に伝わって、最初に難民がこの村に来た時、それは牧師館での会話から始まりました。「夜でした。……入ってもいいかと訊くので、『もちろんですとも、さあ、どうぞお入りください』と答えました。雪まみれでした」。これが、やがてこの村のどの家でもきかれる事になりました。「もちろんですとも、さあ、どうぞお入りください」¹⁶⁶

これは「台所闘争」と呼ばれています。家の台所に迎える、そしてその台所から立ち上がりっていく人々の物語です。特に身構えるわけではない。そこは台所です。しかしそこから物語が始まった。會議の場で何ごとか長老たちが決めて、それで終わるのではなく、それが次に当たり前のように台所に移されていく、「もちろんですとも、さあどうぞお入りください」という言葉、生活になる。そして、その中に小会のつとめがあったということです。御言葉が宣べ伝えられる、御言葉がこの世の中で生きて働く、ことのまさにその中に、小会のつとめがありました。長老が一人頑張って、一人だけで孤軍奮闘するのではなくて、會議に連なり、そしてその會議が家庭の台所と結びついていたことが、これ

¹⁶⁵ 渡辺信夫、『カルヴァンの教会論』P. 250

¹⁶⁶ 『罪なき者の血を流すなかれ』フィリップ・ハリー、新地書房 1986
P146 以下

は本当に大切なことだと、私は思います。

皆さんよくご存知の『嵐の中の教会』という本があって、その中で、やはり当時の教会が世の中の動きとの関わりの中でどのような行動をとったのか、礼拝の、聖餐式の場面で、非常に強烈な印象をもって迫ってくるところがあります。

一方、辻 宣道牧師が書いた『嵐の中の牧師たち』という本があります。『嵐の中の教会』と、『嵐の中の牧師たち』はずいぶん違うわけで、それが日本の教会だったと、厳しく指摘する本です。『嵐の中の牧師たち』は、ホーリネス系の牧師たちの殉教とその背景が書かれています。一人一人は殉教するが、教会の戦いには少しもならなかつたのが、日本の教会でした。

「嵐の中の教会」なのか、「嵐の中の牧師たち」なのか。教会で一人、牧師が、あるいは一人、長老が孤軍奮闘しているのではなく、「嵐の中の教会」をかたちづくる、ことがまさに大事なことです。そしてその「教会」をかたちづくるのは皆さん、長老たちのつとめです。その要に、小会の一員としてのつとめがあることを、ここで言いたいことです。長老は（もちろん牧師も）この小会の一員です。小会の一員ということは、会議に連なり、会議を通して御心があらわされることを信じるのです。会議はお互いが言葉を通して真剣に向き合う関係です。牧師と向き合い、論じ合い、あるいは長老たちがお互いと向き合い、論じ合っていく過程で、嵐の中も揺るぎない教会がつくられていくものだと思うのです。

② 中会の一員であること

御言葉が正しく宣べ伝えられるために、長老はまず小会の一員であることが大変大事だということを話しました。しかし、このことは、小会が一つあればいいのではなく、皆さんの教会でもそうですが、小会から中会の代議員として代表者が出て行きますね、この中会との関わりが、

次に大事なこととして考えられなければなりません。今日はシステムには触れないことを言ったので、時間的にも不十分ですが、教会に長老がいれば、それで長老教会ができるかといえば、そうではない。その長老が地域の他の教会の、他の長老たちと一つの会議（中会会議）をかたちづくっていくという、そういう教会のありかたを非常に大切にしていく、これが長老教会の要になっていくのです。

中会の代議員として出ていくことは、可能性としては、長老でも中会議長になる可能性があるということです。長老の皆さん、中会議長なんてどこか違う世界の話だと思っていた。そうしたら今は自分たちの教会の荒瀬牧彦牧師が中会議長になった。しかし日本中会の歴史の中で、長老で中会議長になった方が何人かいらっしゃる。国分豈侯^{かなめ}長老もそうですね。長老は、こうして中会議長になる可能性があるのです。

あるいは、先ほどもお話しましたが、教職者が生まれる時、代議員としてその場にいる長老は、その新しい教職者に按手します。新しく任職される教職者の頭に手を置き、その人を教職者に任じていく。その場所が中会です。長老には中会の一員としての、そういう大事なつとめがあるのです。

同様に、新しい教会が生まれる時にはそれを中会決議しますが、代議員としてそのことに関与するわけです。皆さんの教会も、中会決議によって生まれました。新しい牧師が生まれる時に長老はそれに関わり、新しい教会が生まれる時にも、長老はそこに関わり、また中会議長になる可能性もあり、あるいは、中会から派遣されてカンバーランド長老教会の総会（G A）に行けば、カンバーランド長老教会の議長になる可能性だってあるわけです。朝山正治^{まさはる}牧師はG A議長になられましたけれど、それは牧師だからではありません。中会会議で議長になる長老がいるように、今まで何人の長老たちがG A議長になりました。

私がアメリカのある田舎の教会を訪問した時に、一人のご婦人が「こ

れはお土産です。テネシー州の花です。婦人会で作ったのですよ」と言って、布製の造花ですが、よくできたアイリスをくださいました。今も我が家に飾ってありますが、私の記憶違いでなければ、その方はベバリー・セントジョンさんでした。教会の婦人会で一緒にお花を作った、お客様さんが来たら、これは婦人会で作ったものです、とプレゼントする、その人が、やがて長老としてGA議長をつとめるようになりました。つまり、皆さんは長老として各教会でおつとめになっていますが、カンバーランド長老教会の議長になる可能性もあるということです。もちろんGA代議員になるためには英語の能力の問題がありますから、自分は100パーセントその可能性はないと言う方がいらっしゃっても、それはそれでいいわけです。共同のつとめとして、カンバーランド長老教会のGA議長になる「可能性がある」ということです。そうなる、ならないは別にして、「可能性がある」ことで私は何を言いたいかというと、皆さんが長老をされているその教会は、そこだけで終わっているのではない、ということです。

私たちの教会は、地域の他の教会との関わりの中で、そして世界に広がっているカンバーランドの教会の中で、今ここに置かれています。そして、そういう関わりを担うのが、長老です。お客様に、これは私たちの婦人会が作ったお花ですよと言う、その人が世界に広がる教会の議長をされた、こういうことが自然に起こる教会に私たちは仕えています。そういう教会の長老であるのです。

御言葉がこの地域に、そしてもう少し広い地域に、さらには世界に伝えられていくために、カンバーランド長老教会がこのシステムを大切にしていること、その教会で私たちは長老をつとめていることを、ぜひ覚えていただきたいのです。

まとめ

最後に、まとめとして、ある教会の話をしたいと思います。その教会に心を病んでいる方が来られた。やがて日曜日にもおいでになるようになった。教会で一生懸命にお迎えしていたわけですが、ところがある時、その方が、一人の人をなぐってしまった。なぜかと言うと、聖書にあるように右の頬を打たれたら左の頬を本当に向けるのかと、本当にそうするのかと思って、なぐってしまったそうです。なぐられたのは、長老だった。その長老さんはどうしたかというと、どうしたと思いますか？こっちを打たれたから反対側を出したかというと、そうしなかった。瞬間的になぐり返してしまったのです。この長老さんは、しかしこのことで悩んでしまった。「善良な人格」と書いてあるでしょう。成熟した判断ができなければならない、との対話ができなければいけないという、その資格が自分にはないと言って、牧師にそのことを話したのです。自分に長老の資格がない、辞めさせてほしい、と。

私は、こここのところが大事だと思うのです。なぜならそれは正当防衛でした。この世の論理で、なぐられた瞬間に、もう体の方が動いてしまう、それは正当防衛です。悩む必要なんかないのです。そうでしょう？攻撃を受けたから守っていくのは、これは当たり前の論理です。当たり前の論理があるときに、しかし彼は、悩んだのです。どうですか？悩まなくていい、当たり前の出来事を、彼は悩んだのは、彼が御言葉に生きていたから、ということです。イエスさまに従う者であったから、そして長老として教会のつとめを担う者であったから、だから彼は悩んだのです。ここが大事だと思うのです。何も悩まないで、この世の論理を通して、自分の思った通りのことをしていれば長老のつとめはつとまるのか。大体そういう人は長老には選ばれないと思いますが、長老は、この世の論理では悩まなくていいところで悩むわけです。悩まなくていいところで悩むのです。これが長老だと思うのです。イエスさまが出て

行くところに、「何故ですか？　どうしてそこに行くのですか？」というように、悩みながらついていくわけです。イエスさまに従う時、何をするにしても、悩みになる。この悩みを持つがゆえに、私はこの方は長老だったのだと、そのお話を聞いた時に思いました。大いに悩むことが、私は長老としての一番の資質なのだと思います。何でもかんでも割り切ってしまって、何か分かったようなことを言っているのではなくて、事毎に悩みながらそのつとめを担っていくことができたなら、その教会は、本当の教会になれるのです。Ω

参考文献

- ・『カンバーランド長老教会信仰告白』カンバーランド長老キリスト教会日本中会情報委員会 1995 年、同 いのちのことば社 2014 年
- ・『教会の政治』吉岡繁、小峯書店 1972 年
- ・『カルヴァンの教会論』渡辺信夫、改革社 1976 年
- ・『使徒的な教会』T. ウィズロー、新教出版社 1965 年
- ・『信徒と教職』H. R. ウエーバー、日本基督教団出版局 1973 年
- ・『教会論入門』渡辺信夫、新教出版社 1973 年、第 10 版
- ・『長老のつとめ／長老制の歴史』久保義宣、渡辺信夫、改革社 1976 年
- ・『教会と長老—東神大パンフレット No.21』竹森満佐一、
東京神学大学出版委員会 1986 年
- ・『牧会百話』多田素、新教出版社 1980 年、第 3 版
- ・『教会生活の处方箋』辻宣道、日本キリスト教団出版局 1981 年
- ・『嵐の中の教会—ヒトラーと戦った教会の物語』O. ブルーダー著、
新教出版社 1989
- ・『嵐の中の牧師たち』辻宣道、新教出版社 1993 年
- ・『罪なき者の血を流すなかれ』フィリップ・ハリー、新地書房 1986

希望が丘教会「あしあとの会」講演会（23.04.30）

「平和を実現するために、見る、聞く、考える」

引退教職者 古畠和彦

あいさつ

今回は、このように皆様方と共に平和について考える機会が与えられたことを感謝いたします。私は、一牧師にすぎず、平和問題の専門家でも、ましてや軍事評論家でもありません。若い時は、それなりに平和運動にかかわっていましたが、今はほとんど何もできていません。ですから、たぶん皆様方の方が、知識においても活動においても私よりはるかに高いところにおられると思います。ですから私が何か教えるというのではなく、共に学んでいくことができたらと思います。

本日は、「平和を実現するために、見る、聞く、考える」をテーマとしました。なぜこのテーマにしたのかといいますと、戦争は、国民が眞実から目をそらし、真理の言葉を聞かなくなり、自ら考えることをしなくなる時に起こるからです。皆さんは、「自分たちは、そのようなことにはならないよう気をつけているから大丈夫だ」と思うかもしれません。90年前、ドイツの教会の人々もそう思っていました。しかし、いつの間にか、眞実から目をそらし、ヒットラーの言葉以外に耳を閉ざして、考えることを放棄して、彼の言いなりになっていたのです。平和を脅かす存在は、私たちよりもはるかに狡猾で巧妙なのです。気が付いた時には手遅れとならないように、今、備えていきましょう。

序

最近よくこんな声を聞きます。「ロシアがウクライナに攻めてきたようなことが日本で起こったらどうするのか、憲法九条で国を守ることができるのか」これを聞きますと私たちは不安を覚えます。「いくら平和主義だと言いても、どこかの国が攻めてきたら大変だ、自分や家族を護るために

は、政府がいうように敵基地を攻撃する能力も必要かもしれない」そう思われるかもしれません。とくに毎日のように、ウクライナの悲惨な状況をテレビで見ているとそういう思いになってしまふ不思議ではありません。しかし、これこそが考えることを放棄していることなのです。

考えてみましょう。そもそも、ロシアは、なぜウクライナに軍事侵攻をしたのでしょうか。ほとんどの方はよく分からぬではないでしょうか。よく分かっていないのに、同じようなことが日本で起こつたらどうするのかと心配することはおかしくありませんか。さらに、「どこかの国が日本に攻めてくる」といっても、具体的にどこの国が、何のために、どのようにして攻めて来るのでしょうか。それが分からぬのに、どうして「憲法九条で国を守ることができない」と決めつけているのでしょうか。憲法九条は、戦後78年間日本が戦争に巻き込まれることから護ってきました。それほどの実績があるのに、なぜ、そう簡単に「国を守ることができるのか」などというのでしょうか。このように考えていきますと、実は私たちは、すでに相手方の策に引っかかっているのです。何の根拠もないことで、不安を覚えさせ、敵にやられる前に、攻撃しなければならない、と戦争へと巻き込まれていくのです。

今日は、「ロシアがウクライナに攻めてきたようなことが日本で起こつたらどうするのか、憲法九条で国を守ることができるのか」に反論する形で平和について考えていきます。

1. ウクライナ戦争とは何か

まず、ウクライナで何が起こつたのかみていきますが、その前に、人はなぜ戦争を起こすのかということを考えます。古代ギリシアの歴史家トウキュディデスは、戦争が起こる理由は、貪欲、恐怖、名譽の三つだといいます。今回は、このうち貪欲、恐怖からロシアのウクライナへの軍事侵攻を見ていきましょう。

①貪欲

聖書では、「貪り」とか、「欲する」と訳されている言葉です。もともとの意味は、「本来自分のものでないものを強く欲しがる」ということです。

この言葉は、「知識を貪欲に吸収する」「聖書を貪るように読む」といった良い意味でも使われます。しかし、求めてはいけないものを求めたり、不当な方法で求めたりしたらそれは罪です。ヤコブの手紙には「何が原因であなたがたの間に戦いや争いが起こるのですか。あなたがた自身の内部で争い合う欲望が、その原因ではありませんか。あなたがたは、欲しても得られず人を殺します。また、熱望しても手に入れることができず、争ったり戦ったりします。得られないのは、願い求めないからで、願い求めても与えられないのは、自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願い求めるからです。」（4：1-3）と記されています。

今回、ロシアが、本来自分のものでない何を欲しがっているのでしょうか。それは、海です——厳密に言いますと、冬でも凍らない海です。右の地図をご覧ください。中心にあるのは北極点です。のことから、ロシアの大部分は、北極海に隣接していることが分かります。ロシアは、国土の大部分が寒冷地で、夏でも氷が解けない永久凍土が拡がります。ロシアには、豊かな地下資源があります。それを世界に輸出するためには、季節を問わずに使える、大海に面した港が必要なのです。ロシアにも港はありますが、需要を賄うには不十分です。そこでロシアは、歴史上何度も海を求めて南下してきました。20世紀初頭には、アジアの海を目指して、中国の北東部に南下してきました。そこで日本と対立して起ったのが日露戦争です。それに失敗すると、今度はヨーロッパに進出し





ようとしました。その標的となつたのは、ウクライナです。ウクライナには、温暖な地中海につながる黒海に面した良質な港があります。ウクライナがソビエト連邦に属しているときは、その港を自由に使うことができました。ソビエト連邦が崩壊したあともロシア寄りの政権が続いていたので問題がありませんでした。

ところが近年、欧米寄りの反ロシア

の政権が誕生したのです。そのためにウクライナの港を自由に使えなくなりました。そのためいろいろな理由をつけてウクライナに進出してきたわけです。

②恐怖

旧約聖書にサウルという王が登場します。この王は、忠実で、優秀な家来であるダビデを執拗に攻撃し、亡き者にしようとします。その理由を、サウル王は自分の息子にこう語ります。「エッサイの子（ダビデ）がこの地上に生きている限り、お前もお前の王権も確かではないのだ。」（I サム 20：31）つまり、ダビデを恐れているのです。自分の王座を狙っているかもしれない、力を持ったら何をするか分からず、先手を打って今のうちに亡き者にしなければならない、とそう考えてダビデを攻撃しているのです。歴史をみると、隣国に対する恐怖から戦争を始めるることは、少なくありません。

ロシアは、何を恐れてウクライナに軍事侵攻しているのでしょうか。プーチン大統領は、ウクライナに軍事侵攻をする理由を、「ネオナチからロシアを護るためにある」と強調しました。ネオナチとは、簡単に言いますと、「ヒットラーが率いたナチス・ドイツが、新たな装いで帰ってきた」

ということです。これが事実であったら、ロシア国民にとってこれほどの恐怖はありません。ロシアがソビエト連邦の一員として、ナチス・ドイツと戦った戦争は、最終的には勝利しましたが、戦死者は2,660万人¹⁶⁷でした。日本の戦死者が310万人ですから、8.6倍です。いかに多かったかが分かります。プーチン大統領は、「そのナチスが装いを新たにして、ウクライナでロシア人に危害を加えている。だから、

ロシア人を護るためにウクライナに軍事侵攻を行う」というのです。ウクライナに、ネオナチと呼ばれるが人々がいることは確かです。しかし、現在のウクライナ大統領ゼレン斯基ーはナチス・ドイツに迫害されたユダヤ人です。ネオナチを支持するわけがありません。ですから、「ネオナチからロシアを護るためである」というのは国民を戦争に動員するための方便であると考えられます。

第二次世界大戦の戦死者

- 1 ソ連 2,660万人
- 2 中国 1,320万人
- 3 ドイツ 690万人
- 4 ポーランド 600万人
- 5 インドネシア 400万人以上
- 6 日本 310万人



それではロシアは、何を恐れているのでしょうか。それはNATO—北大西洋条約機構です。NATOとは、簡単に言いますと「加盟国が他国から攻撃を受けた時、一緒になって防衛しましょう」という約束をしている北大西洋にある国々のグループです。

¹⁶⁷ <https://u-ff.com/ww2/>

一のことです。最近フィンランドが加入しましたから31か国になりました。¹⁶⁸ ウクライナがこのNATOに加入するようなことがあれば、ロシアはNATOに囲まれるようになります。もしも、今回のようなロシアがウクライナに軍事侵攻をしようものなら、NATO全体、特にアメリカを敵に回すことになります。実は、ロシアとアメリカとは隣同士

(右図)です。ですから、アメリカがロシアを攻撃することはそう難しくないのです。ロシアとしては、そのようなことにならないように、ウクライナを自分の支配下に置きたいのです。



③ウクライナ側の問題

今回の軍事侵攻において、ウクライナは何にも悪くないのに、ある日突然ロシアが一方的に攻めてきたと誤解する人がいます。人の争いでも、国家間の戦争でも、全面的に一方が悪く、他方は悪くはない被害者だとすることは危険です。本質を見失ってしまうことがあります。

ここでウクライナ側の問題点を考えましょう。ウクライナのゼレンスキ大統領は、俳優出身です。政治経験もなく、軍司令官としての実績もありません。ウクライナはロシアに睨まれて国の存亡の危機にあります。そのような時に国民は、全くの素人を大統領に選んだのです。なぜでしょうか。実はウクライナでは、賄賂をもらって政治を歪めることが日常化していました。

¹⁶⁸ 2024年3月にスウェーデンが加盟し32か国になった。

「腐敗認識指数世界ランキング」¹⁶⁹（次頁左図）によると、ウクライナは180国中122位です。ちなみに、ロシアはそれ以下の136位、日本は18位です。このようなことからウクライナ国民には政治不信、政治家不信が広がっていました。そこで何の柵（しがらみ）もないクリーンな素人が大統領に選ばれたのです。しかし、賄賂に慣れ切っている政治を、素人が改革することは簡単ではありません。期待してゼレンスキーダ

腐敗認識指数世界ランキング(2021年)

- 1位 ニュージーランド（最もクリーン）
- 2位 フィンランド
- 3位 デンマーク
-
- 18位 日本
-
- 122位 ウクライナ
-
- 136位 ロシア
-
- 180位 南スーダン（最下位）

統領を選んだ国民は失望し、支持率が急速に落ち、もう持たない、そう思われていた、そのタイミングでロシアは軍事侵攻をしたのです。国が混乱しているこのタイミングなら簡単に

支配できると考えたのです。今回の軍事侵攻には、ウクライナ側にもつけ入る隙を与えてしまったという問題点があるということを覚えましょう。

今回は触れませんが、アメリカをはじめとしたNATO側にも問題がないわけではありません。NATOに脅威を感じているロシアに対して、話し合いでその恐れを取り除く努力をせず、さらにNATOを拡大させていました。そのことがロシアを追い詰めることになりました。

日本のテレビや新聞は、ほとんどウクライナ寄りで、ロシアのみに問題

¹⁶⁹ 2023年の統計では、ウクライナ 104位、ロシア 141位となって いる。<https://www.globalnote.jp/post-3913.html>

があるかのような報道になっています。私たちは、それを一方的に信じないで、考えることが大切です。

2. ウクライナと同じ事が日本で起こることがあるのか

次にウクライナと同じ事が日本で起こることがあるのかということを、先ほど紹介した貪欲と恐怖というキーワードから考えましょう。

①貪欲

日本には、他国が戦争をしてまで欲しがるものがあるでしょうか。石油をはじめ資源はほとんどありません。食料自給率は低く、豊かな農産物もありません。唯一あるのは温暖な海です。この海を狙ってロシアが攻めてくると考えられていた時代がありました。今のロシアにそのような余裕はないでしょう。海洋進出を目指している中国が沖縄周辺の島々を狙う可能性はあります。しかし、そのために日本と全面戦争するとは考えられません。このようなことから、貪欲が原因で、日本において戦争が起こるとは考えられません。

②恐怖

問題なのは、日本に対する恐怖から攻撃をしてくる可能性です。日本は、かつて資源を貪欲に求めてアジアに軍事侵攻して、土地を奪い、多くの人々を殺害しました。その数2,000万人とも言われています。ロシア国民がナチス・ドイツに未だに恐怖を覚えているように、アジアの人々が日本に対する恐怖心が、今なおあっても不思議ではありません。戦後も安い労働力を求めてアジアに進出し、経済的搾取が問題になりました。アジアの人々は、日本のゲームやアニメを歓迎していますが、心の奥には日本への恐怖が消えてはいません。それが韓国の反日運動のように突然現れてくることがあります。

さらに、アジアの国々には、もっと大きな恐怖があります。軍事力世界

一位のアメリカの基地が日本にいくつもあるということです。アメリカ軍は、ベトナム戦争や湾岸戦争の時に、日本の基地から攻撃にむかいました。ですから、アジアの国々には、同じようにアメリカが日本の基地から自分たちを攻撃するかもしれないという恐怖があります。このように考えますと、近隣の国々が日本やアメリカとの関係がうまくいかなくなつた時、攻撃されるかもしれないという恐怖心に囚われて、日本を攻撃してくれる可能性があります。恐怖というのは感情であつて、理屈ではありません。そのようなことで恐怖を感じることはおかしいだろう、とは言えないのです。

3. どうしたら日本を護ることができるのか。



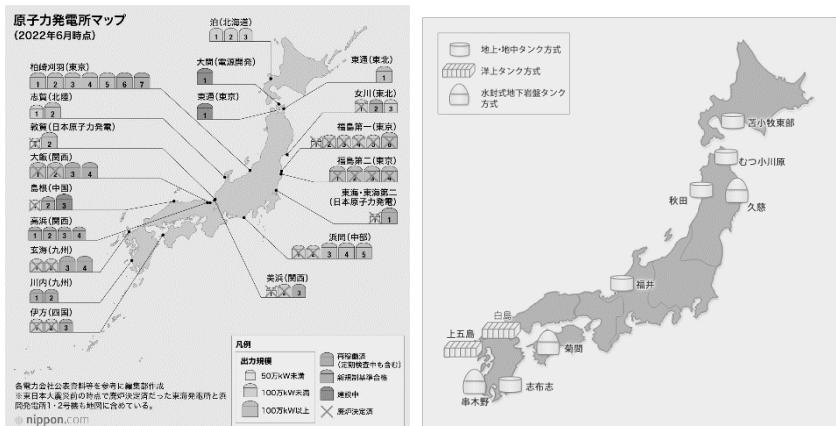
れば、戦争に勝つことはできません。そこで考えたのは、相手が攻撃する

このような状況にあって、どのようにしたら日本を護ることができるでしょうか。日本は、憲法九条があるために、他国を攻撃する武器を持つことはできません。しかし、歴代の内閣は、「憲法九条は、国を護ることを禁じてはいない」と解釈して専守防衛に徹することにしました。しかし、護ることしかないのであ

ことを諦めるほどの防衛力を持つということでした。左図の『2021年国別軍事力ランキング』¹⁷⁰をご覧ください。

これだけの防衛力があれば、ロシアや中国であっても、そう簡単に日本に軍事侵攻をすることはできません。ですから、これで大丈夫だろうと思ってきました。

ところが近年、その考えを脅かすことが起こりました。長距離ミサイルの開発です。日本は、ミサイル攻撃に対して致命的な弱点があります。多くの原子力発電所が、北朝鮮や中国に近い日本海側にあります（下左図）。また日本は緊急時に備えて一年分の石油を備蓄しています。その備蓄基地のほとんどが九州にあります（下右図）。もしも、これらの施設がミサイル攻撃を受けたら壊滅的な被害になります。さらに日本は、人口が都市部に集中しており、政治や経済の機能のほとんどが首都圏にあります。ここをミサイル攻撃されたら取り返しのつかないことになります。



そこで政府は、アメリカの協力のもと、ミサイルを迎撃つ——迎撃シ

¹⁷⁰ <https://news24-web.com/military-ranking/>

ステム作りに躍起になっています。しかし、現在の技術では複数のミサイルを同時に撃ち込まれたら完全に迎撃することはできません。実は、ウクライナは、ロシアのほとんどのミサイルを迎撃しています。しかし、全てを打ち落とすことはできていません。それならどうしたら日本を護ることができるでしょうか。現在、日本政府が考えていることは、相手がミサイル攻撃の準備を始めたら、ミサイル基地を攻撃（「敵基地攻撃」）して、発射を食い止めるというのです。これは国を防衛するためであるから、専守防衛の原則から離れていない、憲法九条にも違反しない、そのように政府は言います。しかし、これは少し考えれば現実的でないことがすぐに分かります。潜水艦などの隠れたところから発射されたら、手の打ちようがありません。たとえミサイル発射の準備をしている基地が分かったとしても、それが日本を狙っていることがどのようにして分かるでしょうか。確認できずに攻撃すれば日本が先制攻撃を仕掛けたことになり、それを口実に攻撃を受ける可能性もあります。そもそも日本が敵基地を攻撃する武器を持ったら、ますます近隣諸国に恐怖を与えることになります。

4. 軍隊に頼らない平和構築

では、どうした
らしいのでしょうか。
か。近隣諸国に恐
怖を与えない、い
やもっと積極的に
安心感を与えるよ
うにするしかあり
ません。そこで提
案するのが憲法九
条の徹底化です。
「防衛を含めて一

日本国憲法第九条

第九条 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、國權の發動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。國の交戦権は、これを認めない。

切の武力を放棄する。当然、アメリカ軍には出ていってもらう。」ということです。そのような主張をしますと、必ず「そのようなことをしたら相手の思うつぼだ。ここぞとばかりに攻撃してくる。一切の武器を放棄して国を護ることができるはずがない。」と言われます。しかし、不可能ではないのです。実例があります。それが中米の国、コスタリカ共和国です。コスタリカは、絶えず近隣諸国から軍事侵攻を受け、さらに度々軍事クーデターが起こって国は荒廃していました。1949年に憲法を改正して一切の武力を放棄しました。そして「兵士の数だけ教師を」を合言葉に、軍事予



算を教育に回し教育国家に転換しました。国際社会で活躍できる人材を育てて、世界の平和に貢献しています。

1980年代には、当時の大統領が、話し合いで中南米の内戦を終わらせるに大きな役割を果たしてノーベル平和賞を受賞しています。コスタリカは、近隣諸国で戦争が起こったら負傷

者の手当てや難民のケアをし、さらには話し合いによって周囲の国々の平和を護るための努力をしています。このようなことから、近隣の国々は、コスタリカを平和を実現する国として信頼しています。ですから、コスタリカの国民は他の国々に戦争を仕掛けられるはずはない、と自信を持って暮らしています。同じ事が日本にできないはずはありません。防衛費をコスタリカのように教育に回すことができたらといつも思います。今、日本の教育は最悪です。国からの補助金が減額されたために小規模でも特色ある教育を行っていた大学がつぶれています。過酷な労働環境で教師たちは喘（あえ）いでいます。若い世代の「死因トップが自殺」はG7で日本だ

け、という状態になっています。未来に希望を持てないので。そのような状態で、子どもを産み育てたいと思うでしょうか。さらに急速に少子化が進み、人口減少が加速しています。まさに国家存亡の危機です。それなのに、岸田内閣は、「防衛費 五年間で“総額約 43 兆円確保”で調整している」と言うのです。¹⁷¹ これでいいのでしょうか。変えなければいけません。といいましても、すぐに自衛隊をなくすことはできません。すでに自衛隊があることが前提に国づくりがなされているからです。それでは私たちに何ができるでしょうか。共に考えていきましょう。

結論

本日は、「平和を実現するために、見る、聞く、考える」をテーマに、平和について考える時をもちました。こういう学びをしますと、その時は何か分かった気がします。しかし、暫くすると、自分には何もできない、とかえって失望してしまうことがあります。そのような時、どうしたらいいのでしょうか。私が恩師に教えられたことを、お分かちしたいと思います。「問題があまりに多く、あれもしなければならない、これもしなければならないと焦っていると、結局何もしなくなる。なんでもいいから手を伸ばして掴んだものからはじめなさい。はじめてみると、意外に問題解決の糸口が見つかるものだ。」皆さん方も、手を伸ばして掴んだことから始めてみてください。世界規模の平和が台所から始まることだってあります。教会の小さな祈りが歴史を変えたことだってあります。諦めずに続けましょう。

そして何よりも私たち自身が、貪欲と恐怖に、日々、勝利する歩みをしていきましょう。自分にできることを国に要求することはできませんから……。

¹⁷¹ 政府は2024年3月16日、防衛費について2023年度から5年間の総額を43兆円程度とすることを閣議決定した。

最後に、ヘブライ人への手紙13章5節をお読みいたします。

「金に執着しない生活をし、今持っているもので満足しなさい。神ご自身、『私は決してあなたを見捨てず、決してあなたを置き去りにはしない』と言われました」。

貪欲に勝利する秘訣は、今あるもので満足することです。

恐怖に勝利する秘訣は、神の御守りを信じることです。

以上

この拙文には、筆者の勉強不足のため誤りがあると思います。ですから、ここに書かれていることを鵜呑みにしないでください。皆さん、一人一人が考えることが大切です。

参考文献

- 1、ロナルド・J・サンダー 『イエスは戦争について何を教えたか——暴力の時代に敵を愛すること』（あおぞら書房 2021年）
- 2、植木千可子 『平和のための戦争論——集団的自衛権は何をもたらすのか?』（ちくま書房 2015年）
- 3、小泉悠 『ウクライナ戦争』（ちくま書房 2022年）
- 4、デビッド・マッキー 『せかいで いちばん つよい国』
（光村教育図書 2005年）
- 5、伊藤千尋 『コスタリカ』（高文研 2023年）

編集後記

紀要「カンバーランド宣教研究」（以下「紀要」）二号を送り出すことができることを心から感謝いたします。

1. 歴史的遺産

昨年6月に講演に来てくださった阿部伊作氏が、講演内容をアップグレードして「エー・デー・ヘル師没100年、何を学び継承するか、—カンバーランドスピリットとハンセン病療養所—」を寄稿してくださいました。明治期のカンバーランド長老教会の宣教への情熱を知ることができます。関伸子牧師の「日本に派遣された宣教師（フォレスター、ディル、スタッツ各師）の意義」は日本に派遣された三人の宣教師を軸に、日本中会の草創期を知ることができる論文です。その草創期の牧師である吉崎忠雄先生の説教「そのうちのひとりは、感謝した」を掲載しました。

2. 研究発表

濱崎孝牧師の論文「祝福を告げる者—伝道師の祝祷について—」は、「伝道師の祝祷を認めるかどうか」を決議した中会会議（第45回会議 1999年2月28日）に提出された論文です。今では、伝道師の祝祷（祝福）は当たり前に行われていますが、神学的な議論があったことを思いこされる論文です。潮田健治牧師が寄稿して下さった「長者のつとめ」は、22年前の講演ですが、今なお、私たちに迫ってきます。最後の「事毎に悩みながらそのつとめを担っていくことができたなら、その教会は、本当の教会になれるのです」は胸に刺さります。拙文「平和を実現するために、見る、聞く、考える」は、「紀要」は過去だけでなく、現在への問題提起も必要と考えて、寄稿させていただきました。

今回は、寄稿された原稿を何名かの方に読んでいただき、コメントを頂きました。心から感謝いたします。研究発表においては広く寄稿を求めております。ご希望される方は担当者までお知らせください。

編集担当 古畑和彦

紀要『カンバーランド宣教研究』 二号

2024年6月8日発行

編集 カンバーランド長老教会日本中会宣教研究所

発行 カンバーランド長老キリスト教会日本中会
〒242-0006 神奈川県大和市南林間2-14-21
電話 046 (274) 1371 office@cumberland.jp
<https://www.cumberland.jp/>

(発行者の許可なくして無断転載を禁ず)